

き こ ない ちよう
木古内町

こう れん
幸連 4 遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

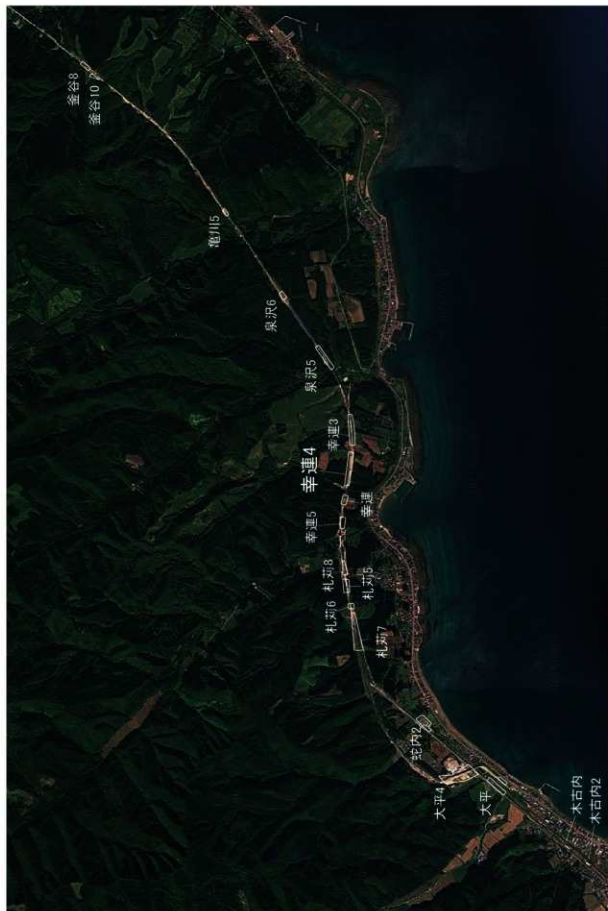
第 1 分冊

本文編 1 (I ～ V ・ VII ～ IX 章)

- I 緒言
- II 遺跡の位置と環境
- III 調査の方法
- IV A 地区の遺構・遺物
- V B 地区の遺構・遺物
- VII D 地区の遺構・遺物
- VIII 自然科学的分析等
- IX 総括

令和 4 年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



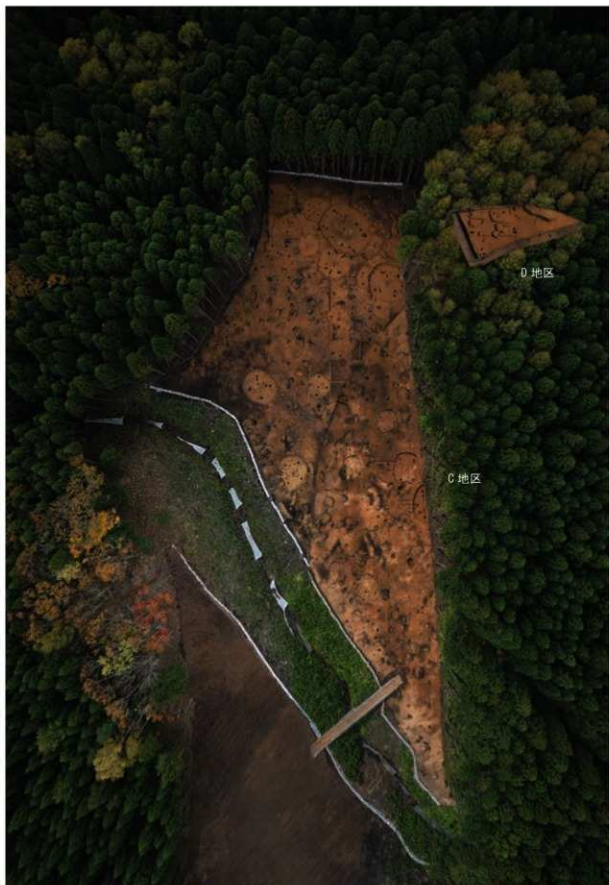
1 幸運4 遺跡と函館江差自動車道・新幹線開通の調査遺跡（南から、グーグルアースより）



1 幸連 4 遺跡 (東から、平成 27 年度撮影)



2 幸連 4 遺跡 (西から、平成 27 年度撮影)



1 C・D地区（東から、平成27・28年度を合成）



1 C地区高位部小～大型住居群（東から）



2 H-1（東から）



1 C 地区廃棄域（南西から）



2 D 地区廃棄域（北から）



1 II群b類土器



2 III群b類土器



1 C3 地区出土剥片石器



2 C3 地区出土礫石器



1 縄文時代前期後半接合資料



2 P-2 出土土偶



3 H-13 出土フクロウ形垂飾

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局函館開発建設部が行う高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成27(2015)・28(2016)年度に発掘調査を実施した木古内町幸連4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査・整理は、平成28年度は第1調査部第4調査課、平成29～令和3年度は第1調査部第3調査課、令和4年度は第2調査部第1調査課が担当した。
3. 整理作業は、遺構を各担当職員、遺物の整理を鈴木宏行が担当した。
4. 現場の写真撮影は調査担当者、遺物の撮影は石器の接合写真を鈴木、口絵を2部2課吉田裕史洋、それ以外を1部1課菊池慈人が行った。航空写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。
5. 本書の執筆は、皆川洋一・鈴木・坂本尚史・直江康雄・谷島由貴が行い、文責は各項目の末尾に括弧で示した。編集は鈴木が担当した。
6. 各種測定・分析は、下記の機関・個人に委託・依頼し、Ⅷ章11は鈴木が担当した。
放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所(Ⅷ章1)
黒曜石産地分析、炭化材樹種同定、砂資料粒度・岩石・鉱物組成分析、石器の残存デンプン粒分析、炭素・窒素安定同位体比分析、土器残存脂質分析：(株)パレオ・ラボ(Ⅷ章2・3・6～9)
炭化種実同定、ウルシ属炭化核分析：バリノ・サーヴェイ株式会社(Ⅷ章4・5)
土器圧痕調査：小畑弘己(熊本大学)(Ⅷ章10)
7. 報告書刊行後、遺物および台帳は木古内町町教育委員会が、図面・写真フィルムは北海道立埋蔵文化財センターが保管する。
8. 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏の御指導、御協力をいただいた。(順不同、敬称略)
国土交通省北海道開発局函館開発建設部
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
木古内町教育委員会：木元 豊
北斗市教育委員会：森 靖裕
知内町教育委員会：高橋豊彦・竹田 聡
北海道考古学研究所：横山英介
青森県埋蔵文化財調査センター：永嶋 豊
熊本大学：小畑弘己

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。

H: 竪穴住居跡

HP: 住居に関連する土坑・柱穴 HF: 住居内の焼土 HFC: 住居内の剥片集中

HSC: 住居内の礫集中 HCC: 住居内の炭化物集中

P: 土坑

PP: 土坑内の小土坑 PF: 土坑内の焼土

F: 焼土 PC: 土器集中 FC: 剥片集中 SC: 礫集中 BP: 埋設土器

2. 遺構図の縮尺は、基本は1/40としたが、大型の住居は大きさに応じて1/60・1/80、一部の遺物出土状況については1/20とした。いずれの場合もスケールを示した。
3. 遺構図には方位記号を付した。方位は真北を示す。発掘区の南北方向ライン（数字ライン）は公共座標の南北方向に対して8°45'01"東に傾いている。遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、傍らの名称番号は右下のグリッドを示している。レベルは標高（単位：m）である。
4. 遺構出土遺物で床面出土には「床」、坑底出土には「坑底」を掲載番号の隣に付した。
5. 遺構図に掲載している実測図等の数字は挿入中の掲載番号と同一である。
6. 土層の表記については、基本土層はローマ数字、遺構の層位はアラビア数字で示した。
7. 土層の色調は『新版 標準土色帖 2002年版』（小山・竹原 2002）に従った。
8. 火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会 1982）に順じ、以下の略称を用いた。
Ko-d: 駒ヶ岳 d 降下火山灰 B-Tm: 白頭山 - 苦小牧火山灰
9. 土層の肉眼的な混合比率を表現するために以下のような表現を用いた場合がある。
 $A = B$: A と B がほぼ等量。 $A > B$: A が主体。 $A \gg B$: B が微量。
10. 主な包含層であるⅢ（上・下）層と M・RM 層にはそれらの関係を視覚的に理解しやすいように断面図にそれぞれトーンをかけた。
11. 遺物の実測図の縮尺は以下のとおりで、いずれもスケールを示した。
復元土器・土器拓影: 1/3 土偶: 1/2 剥片石器・石斧・石のみ・石製品など: 1/2
石器接合資料、石斧など・台石・石皿以外の礫石器: 1/3 台石・石皿: 1/4
12. 土器図には正面図では表現できない箇所を図を追加して補助的に掲載しているものがある。この補助図は「」印によってその実測位置を示している。「」印は土器の上面観を模式化したもので、十字の垂直線は下端が正面側、上端が裏面側を、十字の水平線は左端が左面側、右端が右面側を示す。「」に太線がある場所が補助図の位置で、太線が円の内側にある場合「」は内側、外側にある場合「」は外側を示している。
13. 土器に粘土の積み上げ痕である接合面が確認できる場合、断面図に接合面を記入した。正面図の上に「Y」や「T」の印を付けてその位置を示し、「Y」は正面側、「T」は裏面側である。数字は断面図と対応し、下部から順に付けた。但し、記入された接合面のみが製作工程上の「継ぎ目」を示すものではない。
14. 石織は基部のアスファルトの付着範囲を黒塗りで示した。
15. スクレイパー・R フレイク・U フレイク・剥片は肉眼で観察可能な光沢面の範囲を灰色で示した。
16. 尖頭器関連の接合資料の実測図においては、全体の状況を示すと同時に腹面側（内側）の状況の

実測図を示したものもある。

17. 実測図を掲載した石器・接合資料はすべて写真図版に掲載し、さらに接合資料に含まれる石器については、接合資料の縮尺に合わせて再度掲載した。また、写真図版にのみ掲載した接合資料もある。
18. 接合資料は、視覚的に図を理解し易くするために、尖頭器調整剥片接合資料の内面図を除く接合剥片の腹面や両極剥離による分割面を以下の3種類のトーンで示した。
一次調整剥片の腹面  素材の分割面 
二次調整剥片（分割礫や剥片素材の調整剥片）の腹面 
19. 接合資料の中で、剥片石器や石核の素材である剥片もしくは原石を分割したものについては「個体A」「個体B」・・・、さらにそれらから剥離された剥片を素材にするものは「個体a」「個体b」・・・と呼称した。
20. 接合資料と共に掲載した個々の石器（接合する単体石器）は工程ごとに剥離順で並べている。
21. 接合資料は、剥離工程を理解し易くするために模式図を作成し、実測図と共に掲載した。模式図は同一段階の剥離群毎にトーンを変え、剥離の流れを番号で示した。ただし、切り合い関係がなく、前後関係が明らかでないものにおいても便宜上番号を付けたので、詳細は個々の説明を参照願いたい。
22. 剥離模式図の縮尺は任意である。模式図中の矢印（→）は接合剥片の剥離方向を示すが、接合剥片の打点側が欠損している場合は切れた矢印（-→）、重なって見えない部分は破線の矢印（-----→）で示した。
23. 礫石器に関して敲打痕はⅤ——Ⅴ、すり痕（機能部平坦面）は+——+で範囲を示した。
24. 掲載一覧表の計測値は現存値を（ ）で、復元値を〔 〕で括弧で表し、計測不能は「-」と表記した。
25. 石質は凝灰岩を泥岩に含めている。

第1分冊(本文Ⅰ～Ⅴ・Ⅶ～Ⅸ章)目次

口絵(カラー図版)

例言・記号等の説明

目次・挿図目次・表目次

Ⅰ 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経過	2
4 調査の経過	2
(1) 平成27年度	3
(2) 平成28年度	4
5 調査結果の概要	4

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形・地質	7
2 木古内・幸連の地名	9
3 周辺の遺跡	9
4 遺跡の位置と地形	14

Ⅲ 調査の方法

1 調査区の設定	19
2 調査の方法	19
3 整理の方法	21
(1) 土器・石器	21
(2) 遺物の収納	22
4 遺物の分類	22
(1) 土器の分類	22
(2) 石器の分類	23
5 土層	26
(1) 観察方法	26
(2) 基本土層	26
(3) 土層	27

Ⅳ A地区の遺構・遺物

1 概要	39
2 遺構	39
(1) 土坑	39
(2) 焼土	39
(3) 剥片集中	40
3 包含層出土遺物	41
(1) 概要	41
(2) 土器	41
(3) 石器	41

Ⅴ B地区の遺構・遺物

1 概要	43
2 遺構	43
(1) 竪穴住居跡	43
(2) 土坑	50
(3) 焼土	50

(4) 礫集中	52
3 包含層出土遺物	54
(1) 概要	54
(2) 土器	54
(3) 石器	59
Ⅶ D地区の遺構・遺物	
1 概要	63
2 遺構	63
(1) 竪穴住居跡	63
(2) 土坑	80
(3) 焼土	83
(4) 剥片集中	85
(5) 礫集中	93
(6) 盛土	93
3 包含層出土遺物	99
(1) 概要	99
(2) 土器	99
(3) 石器	112
Ⅷ 自然科学的分析等	
1 幸連4遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	123
2 幸連4遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	139
3 幸連4遺跡出土炭化材の樹種同定	144
4 木古内町幸連4遺跡出土炭化種実同定	153
5 幸連4遺跡出土ウルシ属炭化核の電子顕微鏡観察	159
6 遺構試料の粒度分析及び岩石・鉱物組成分析(木古内町幸連4遺跡)	168
7 幸連4遺跡から出土した石器の残存デンプン粒分析結果報告	182
8 炭素・窒素安定同位体比分析	196
9 北海道木古内町幸連4遺跡出土土器の残存脂質分析	204
10 幸連4遺跡出土土器圧痕調査報告	215
11 幸連4遺跡出土石器の使用痕分析	223
Ⅸ 総括	
1 概要	229
2 C・D地区の遺構	229
3 C・D地区の遺物	234
(1) 土器	234
(2) 石器類	238
4 分析等について	244
(1) 放射性炭素年代測定	244
(2) 炭化材の樹種同定・炭化種実同定・ウルシ属炭化核の観察・土器圧痕ほか	247
(3) 土器の使用痕	250
(4) 砂ビットについて	254
(5) 擦切技法・礫石器の形態変化	255
5 総括	257

第1分冊 (I～V・VII～IX章) 挿図目次

I 緒言

図 I-1 年度別調査範囲図	3
----------------	---

II 遺跡の位置と環境

図 II-1 遺跡の位置と木古内町周辺の地形	8
図 II-2 木古内町周辺の地質	8
図 II-3 『大日本沿海輿地全図』	10
図 II-4 『東西蝦夷 山川地理取調図』	10
図 II-5 木古内町周辺の遺跡と段丘分類図	13
図 II-6 幸速 4 遺跡位置図	15
図 II-7 幸速 4 遺跡と周辺の地形	15
図 II-8 C 地区地形分類図	16
図 II-9 幸速 4 遺跡と周辺の窪み	16
図 II-10 幸速 4 遺跡の変遷	17

III 調査の方法

図 III-1 調査範囲・調査区設定図	20
図 III-2 調査方法別範囲図	21
図 III-3 石器細分類図	24
図 III-4 基本土層図	26
図 III-5 土層断面図 (1)	28
図 III-6 土層断面図 (2)	30
図 III-7 土層断面図 (3)	31
図 III-8 土層断面図 (4)	32
図 III-9 土層断面図 (5)	33
図 III-10 土層断面図 (6)	34
図 III-11 土層断面図 (7)	35
図 III-12 M (盛土)・RM 層 (周堤) 分布図	36
図 III-13 広域土層断面図	37

IV A 地区の遺構・遺物

図 IV-1 A 地区遺構位置図	39
図 IV-2 土坑 P-15・16、焼土 F-6、剥片集中 FC-1	40
図 IV-3 A 地区包含層出土遺物分布	41
図 IV-4 A 地区包含層出土遺物	42

V B 地区の遺構・遺物

図 V-1 B 地区遺構位置図	43
図 V-2 堅穴住居跡 (1) H-35 (1)	44
図 V-3 堅穴住居跡 (2) H-35 (2)	45
図 V-4 堅穴住居跡 (3) H-36 (1)	46
図 V-5 堅穴住居跡 (4) H-36 (2)	47
図 V-6 堅穴住居跡 (5) H-36 (3)	48
図 V-7 堅穴住居跡 (6) H-36 (4)	49
図 V-8 土坑 P-90、焼土 F-8 ～ 12・21・22、雑集中 SC-1	51
図 V-9 B 地区包含層出土遺物分布 (1)	55
図 V-10 B 地区包含層出土遺物分布 (2)	56
図 V-11 B 地区包含層出土遺物分布 (3)	57
図 V-12 J59 区個体土器出土状況	57
図 V-13 B 地区包含層出土土器	58

図 V-14 B 地区包含層出土土器 (1)	60
------------------------	----

図 V-15 B 地区包含層出土土器 (2)	61
------------------------	----

VII D 地区の遺構・遺物

図 VII-1 D 地区遺構位置図	63
図 VII-2 堅穴住居跡 (1) H-40 (1)	64
図 VII-3 堅穴住居跡 (2) H-40 (2)	65
図 VII-4 堅穴住居跡 (3) H-41 (1)	66
図 VII-5 堅穴住居跡 (4) H-41 (2)	67
図 VII-6 堅穴住居跡 (5) H-42 (1)	68
図 VII-7 堅穴住居跡 (6) H-42 (2)	69
図 VII-8 堅穴住居跡 (7) H-42 (3)	70
図 VII-9 堅穴住居跡 (8) H-42 (4)	71
図 VII-10 堅穴住居跡 (9) H-42 (5)	72
図 VII-11 堅穴住居跡 (10) H-42 (6)	73
図 VII-12 堅穴住居跡 (11) H-42 (7)	74
図 VII-13 堅穴住居跡 (12) H-42 (8)	75
図 VII-14 堅穴住居跡 (13) H-43 (1)	77
図 VII-15 堅穴住居跡 (14) H-43 (2)	78
図 VII-16 堅穴住居跡 (15) H-44 (1)	79
図 VII-17 堅穴住居跡 (16) H-44 (2)	80
図 VII-18 土坑 (1) P-100 ～ 103・105・106	82
図 VII-19 土坑 (2) P-104・107・108	84
図 VII-20 焼土 F-25 ～ 27、剥片集中 FC-19 ～ 29、 雑集中 SC-2	86
図 VII-21 土坑・剥片集中 (1) の遺物 P-100・102・ 104・105、FC-19	88
図 VII-22 剥片集中の遺物 (2) FC-22 (1)	89
図 VII-23 剥片集中の遺物 (3) FC-22 (2)	90
図 VII-24 剥片集中の遺物 (4) FC-27	91
図 VII-25 剥片集中の遺物 (5) FC-28	92
図 VII-26 D 地区包含層出土遺物分布 (1)	100
図 VII-27 D 地区包含層出土遺物分布 (2)	101
図 VII-28 D 地区 RM 層下部・Ⅲ下層上部遺物出土状況	102
図 VII-29 D 地区 RM 層下部遺物出土状況	103
図 VII-30 D 地区Ⅲ下層上部遺物出土状況 (1)	104
図 VII-31 D 地区Ⅲ下層上部遺物出土状況 (2)	105
図 VII-32 D 地区包含層出土土器 (1)	106
図 VII-33 D 地区包含層出土土器 (2)	107
図 VII-34 D 地区包含層出土土器 (3)	108
図 VII-35 D 地区包含層出土土器 (4)	109
図 VII-36 D 地区包含層出土土器 (5)	110
図 VII-37 D 地区包含層出土土器 (6)	111
図 VII-38 D 地区包含層出土土器 (1)	113
図 VII-39 D 地区包含層出土土器 (2)	114
図 VII-40 D 地区包含層出土土器 (3)	115
図 VII-41 D 地区包含層出土土器 (4)	116
図 VII-42 D 地区包含層出土土器 (5)	117

図VII-43 D地区包含層出土石器 (6)	119
------------------------------	-----

Ⅷ 自然科学的分析等

1-図版1 暦年較正年代グラフ (参考)	131
1-図版2 暦年較正年代グラフ (マルチプロット図、参考)	137
2-図1 黒曜石産地分布図 (東日本)	139
2-図2 黒曜石産地推定判別図 (1)	141
2-図3 黒曜石産地推定判別図 (2)	141
2-図4 黒曜石産地推定判別図 (3)	142
2-図5 黒曜石産地分析試料一覧	143
3-図版1 幸連4遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1)	150
3-図版2 幸連4遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2)	151
3-図版3 幸連4遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (3)	152
4-図版1 炭化種実	158
5-図版1 ウルシ属核 (1)	161
5-図版2 ウルシ属核 (2)	162
5-図版3 ウルシ属核 (3)	163
5-図版4 ウルシ属核 (4)	164
5-図版5 ウルシ属核 (5)	165
5-図版6 ウルシ属核 (6)	166
5-図版7 ウルシ属核 (7)	167
6-図1 粒度分布と累積頻度曲線 (その1)	173
6-図2 粒度分布と累積頻度曲線 (その2)	174
6-図3 粒度分布と累積頻度曲線 (その3)	175
6-図4 粒度分布と累積頻度曲線 (その4)	176
6-図5 粒度分布と累積頻度曲線 (その5)	177
6-図6 粒度分布と累積頻度曲線 (その6)	178
6-図7 歪度-冪度における河川砂と海岸砂の区別	178
6-図8 遺跡と周辺の地質図	179
6-図版1 -0.5φ篩残渣の実体顕微鏡写真	180
6-図版2 4φ篩残渣中の軽鉱物・重鉱物の顕微鏡写真	181
7-図1 幸連4遺跡の分析対象とした石器と検出したデンブン粒	189
7-図2 幸連4遺跡の分析対象とした石器と付着した土から検出したデンブン粒	190
7-図3 幸連4遺跡の分析対象とした石器と検出したデンブン粒	191
7-図4 幸連4遺跡の分析対象とした石器と検出したデンブン粒	192
7-図5 幸連4遺跡の分析対象とした石器と検出したデンブン粒	193
7-図6 幸連4遺跡の分析対象とした石器と検出したデンブン粒	194
7-図7 幸連4遺跡の分析対象とした石器	195
8-図1 炭素・窒素安定同位体比	199
8-図2 炭素安定同位体比とC/N比の関係	199
8-図3 炭素・窒素安定同位体比 (縄文時代後期後半)	200

8-図4 炭素安定同位体比とC/N比の関係 (縄文時代前期後半)	200
8-図5 炭素・窒素安定同位体比 (縄文時代中期後半)	201
8-図6 炭素安定同位体比とC/N比の関係 (縄文時代中期後半)	201
8-図7 炭素・窒素安定同位体比 (縄文時代後期前葉、中葉)	202
8-図8 炭素安定同位体比とC/N比の関係 (縄文時代後期前葉、中葉)	202
8-図9 炭素・窒素安定同位体比 (縄文時代後期前葉)	203
8-図10 炭素安定同位体比とC/N比の関係 (縄文時代後期前葉)	203
9-図1 バルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成	207
9-図版1 土器外観と分析試料採取位置 (1)	209
9-図版2 土器外観と分析試料採取位置 (2)	210
9-図版3 土器外観と分析試料採取位置 (3)	211
9-図版4 土器外観と分析試料採取位置 (4)	212
9-図版5 土器外観と分析試料採取位置 (5)	213
9-図版6 土器外観と分析試料採取位置 (6)	214
10-図1 幸連4遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像1	216
10-図2 幸連4遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像2	217
10-図3 幸連4遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像3	218
10-図4 幸連4遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像4・STL画像1	219
10-図5 幸連4遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像5・STL画像2	221
11-図1 C1 (上)・C3 (下) 地区出土石器の使用痕	226
11-図2 C3地区出土石器の使用痕	227
11-図3 C3地区出土石器の使用痕	228

Ⅸ 総括

図IX-1 C・D地区の遺構 (1)	230
図IX-2 C・D地区の遺構 (2)	231
図IX-3 円筒下層b1～c式土器の高さ (cm)	234
図IX-4 円筒下層b1～d2式土器 (1)	236
図IX-5 円筒下層b1～d2式土器 (2)	237
図IX-6 縄文時代中期後半の土器	239
図IX-7 縄文時代後期前葉の土器	239
図IX-8 C3地区包含層出土石器	241
図IX-9 石器接合資料分類図	242
図IX-10 幸連4遺跡の暦年代分布 (1)	245
図IX-11 幸連4遺跡の暦年代分布 (1σ) (2)	246
図IX-12 炭素・窒素安定同位体比・残存脂質分析	249
図IX-13 CN比分析復元土器の使用痕 (1)	251
図IX-14 CN比分析復元土器の使用痕 (2)	252
図IX-15 CN比分析復元土器の使用痕 (3)	253
図IX-16 擦切残片・擦切技法進行模式図	256
図IX-17 礫石器の形態変化	256
図IX-18 スクレイパーの二次加工	258
図IX-19 コクゾウムシ匠痕資料	258

第1分冊(本文Ⅰ～Ⅴ・Ⅶ～Ⅸ章) 表目次

Ⅰ 緒言

表Ⅰ-1 地区別作業進行表	3
---------------	---

表Ⅰ-2 検出遺構一覧	5
-------------	---

表Ⅰ-3 出土遺物一覧	6
-------------	---

Ⅱ 遺跡の位置と環境

表Ⅱ-1 木古内町の遺跡一覧	12
----------------	----

Ⅳ A地区の遺構・遺物

表Ⅳ-1 A地区遺構一覧	40
--------------	----

表Ⅳ-2 A地区遺構出土遺物一覧	40
------------------	----

表Ⅳ-3 A地区包含層出土遺物一覧	42
-------------------	----

表Ⅳ-4 A地区包含層出土掲載土器一覧	42
---------------------	----

表Ⅳ-5 A地区包含層出土掲載石器一覧	42
---------------------	----

Ⅴ B地区の遺構・遺物

表Ⅴ-1 B地区遺構一覧	53
--------------	----

表Ⅴ-2 B地区遺構出土遺物一覧	53
------------------	----

表Ⅴ-3 B地区遺構出土掲載土器一覧	53
--------------------	----

表Ⅴ-4 B地区遺構出土掲載石器一覧	54
--------------------	----

表Ⅴ-5 B地区包含層出土掲載土器一覧	61
---------------------	----

表Ⅴ-6 B地区包含層出土遺物一覧	62
-------------------	----

表Ⅴ-7 B地区包含層出土掲載土器一覧	62
---------------------	----

Ⅶ D地区の遺構・遺物

表Ⅶ-1 D地区遺構一覧	93
--------------	----

表Ⅶ-2 D地区遺構出土遺物一覧	94
------------------	----

表Ⅶ-3 D地区遺構出土掲載土器一覧	95
--------------------	----

表Ⅶ-4 D地区遺構出土掲載石器一覧	96
--------------------	----

表Ⅶ-5 D地区遺構出土掲載石器接合資料一覧	96
------------------------	----

表Ⅶ-6 D地区包含層出土遺物一覧	120
-------------------	-----

表Ⅶ-7 D地区包含層出土掲載土器一覧	121
---------------------	-----

表Ⅶ-8 D地区包含層出土掲載石器一覧	122
---------------------	-----

表Ⅶ-9 D地区包含層出土掲載石器接合資料一覧	122
-------------------------	-----

Ⅷ 自然科学的分析等

1-表1 放射性炭素年代測定結果($\sigma^{13}\text{C}$ 補正值)	125
--	-----

1-表2 放射性炭素年代測定結果($\sigma^{13}\text{C}$ 未補正值、 暦年較正用 ^{13}C 年代、較正年代)	126
---	-----

2-表1 分析対象	139
-----------	-----

2-表2 東日本黒曜石産地の判別群	140
-------------------	-----

2-表3 測定値および産地推定結果	141
-------------------	-----

2-表4 時期・器種別の産地	142
----------------	-----

3-表1 遺構別の樹種同定結果	144
-----------------	-----

3-付表1 樹種同定結果一覧(1)	148
-------------------	-----

3-付表2 樹種同定結果一覧(2)	149
-------------------	-----

4-表1 炭化種実同定結果	155
---------------	-----

4-表2 炭化種実出土状況	156
---------------	-----

5-表1 ウルシ属核の観察結果	160
-----------------	-----

6-表1 粒度分析、岩石・鉱物分析を行った試料	168
-------------------------	-----

6-表2 粒度分析結果	169
-------------	-----

6-表3 各試料の粒度階区分	170
----------------	-----

6-表4 モーメント法(積率統計計算法)に基づく 粒度係数	170
----------------------------------	-----

6-表5 分級度、歪度、尖度の評価	170
-------------------	-----

6-表6 -0.5ϕ (1mm) 篩以上の岩石組成	171
---	-----

6-表7 4ϕ 篩残渣中の鉱物組成	172
------------------------	-----

7-表1 分析した石器と残存デンプン粒検出個数	184
-------------------------	-----

7-表2 石器残存デンプン粒の候補となる植物と その評価	186
---------------------------------	-----

8-表1 炭素・窒素安定同位体比測定結果	198
----------------------	-----

9-表1 分析試料一覧	206
-------------	-----

9-表2 分析装置と標準試料	207
----------------	-----

9-表4 パルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル 炭素同位体組成	207
-------------------------------------	-----

9-表3 脂質組成	208
-----------	-----

10-表1 幸連4遺跡出土土器圧痕の種類と属性(1)	220
----------------------------	-----

10-表2 幸連4遺跡出土土器圧痕の種類と属性(2)	221
----------------------------	-----

11-表1 幸連4遺跡石器使用痕観察表	225
---------------------	-----

Ⅸ 総括

表Ⅸ-1 石器接合資料類型	243
---------------	-----

表Ⅸ-2 炭素・窒素安定同位体比分析結果	248
----------------------	-----

表Ⅸ-3 CN比分析還元土器の使用痕観察表	253
-----------------------	-----

表Ⅸ-4 木古内町における縄文時代前期から後期の変遷	258
----------------------------	-----

I 緒 言

1 調査要項

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

受託者：公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：幸連4遺跡（北海道教育委員会登録番号：B-05-60）

所在地：上磯郡木古内町字幸連 110-13、111-4、112-9、116-2、116-13、116-14、117-5、117-6

調査面積：10,255 m²（平成27年度 7,978 m²、平成28年度 2,277 m²）

調査期間：平成27年4月1日～平成28年3月31日（発掘期間：5月12日～11月2日）

平成28年4月1日～平成29年3月31日（発掘期間：5月9日～10月28日）

平成29年4月3日～平成30年3月30日（整理作業）

平成30年4月2日～平成31年3月29日（整理作業）

平成31年4月1日～令和2年3月31日（整理作業）

令和2年4月1日～令和3年3月31日（整理作業）

令和3年4月1日～令和4年3月31日（整理作業）

令和4年4月1日～令和5年3月31日（整理作業）

2 調査体制

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 坂本 均（平成27年6月25日まで）

越田賢一郎（平成27年6月26日から令和元年6月20日まで）

長沼 孝（令和元年6月21日から）

副理事長 中田 仁（平成27年6月26日から令和元年6月20日まで）

専務理事 中田 仁（事務局長兼務 平成27年6月25日まで）

山田寿雄（事務局長兼務 平成27年6月26日から令和3年6月17日まで）

馬橋 功（事務局長兼務 令和3年6月18日から）

常務理事 長沼 孝（第1調査部長兼務 平成27年6月29日から令和元年6月20日まで）

鈴木 信（第1調査部長兼務 令和元年6月21日から）

平成27年度

第1調査部長 長沼 孝（兼務）

第4調査課長 皆川洋一（発掘担当者）

主 査 鈴木宏行（発掘担当者）

主 査 坂本尚史（発掘担当者）

主 査 直江康雄

主 任 谷島由貴

平成28年度

第1調査部長 長沼 孝（兼務）

第4調査課長 皆川洋一（発掘担当者）

主 査 鈴木宏行（発掘担当者）

主 査 直江康雄（発掘担当者）

平成29年度

第1調査部長 長沼 孝（兼務）

第3調査課長 皆川洋一

主 査 鈴木宏行

平成 30 年度

第 1 調査部長 長沼 孝 (兼務)

第 3 調査課長 皆川洋一

主 査 鈴木宏行

平成 31 (令和元) 年度

第 1 調査部長 長沼 孝 (兼務、令和元年 6 月 20 日まで)

鈴木 信 (兼務、令和元年 6 月 21 日から)

第 3 調査課長 皆川洋一

主 査 鈴木宏行

令和 2 年度

第 1 調査部長 鈴木 信 (兼務)

第 3 調査課長 鈴木宏行

令和 3 年度

第 1 調査部長 鈴木 信 (兼務)

第 3 調査課長 鈴木宏行

令和 4 年度

第 2 調査部長 村田 大

第 1 調査課長 鈴木宏行

3 調査に至る経過

函館江差自動車道は函館新道函館インターチェンジ (IC) を起点とし、北斗市、木古内町を経由して江差町に至る延長約 70 km の自動車専用道路である。高速ネットワークの拡充による近隣都市間の連絡強化により、地域間交流の活性化や物流の効率化、災害時の緊急輸送ルートの強化などを目的とした事業である。平成 15 年 3 月には函館 IC ～北斗中央 IC、平成 21 年 11 月には北斗中央 IC ～北斗富川 IC、平成 24 年 3 月には北斗富川 IC ～北斗茂辺地 IC の函館茂辺地道路区間が供用開始となり、令和 4 年 3 月に、北斗茂辺地 IC ～木古内 IC までの延長 16.0 km の茂辺地木古内道路が開通した。

平成 11 年に国土交通省北海道開発局函館開発建設部は函館江差自動車道、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会 (以下、「道教委」) に提出した。それを受けて道教委は、木古内町大釜谷から大平までの範囲において 15 地点の所在確認調査が必要と通知した。

幸連 4 遺跡は平成 26 年 10 月に道教委によって試掘調査が実施され、9,482 m² の発掘調査 (A ～ C 地区) および 3,200 m² (A 地区) の工事立会が必要との判断が示された。平成 27 年には工事用道路に関わる北西部 (D 地区) の 119 m² の発掘調査が追加され、道教委の指示により当センターが平成 27・28 年度に発掘調査、平成 28 ～令和 4 年度に整理・報告を行うこととなった。

4 調査の経過

調査区は北東から南西に流れる 2 本の大きい沢を隔てて東から A・B・C 地区と呼称した。これら 3 地区は工事の進行と調査の展開を考慮して平成 27 年度は A 地区および B・C 地区の南側、平成 28 年度は B・C 地区の北側を調査する予定であった (図 I-1)。平成 27 年度に C 地区西側の沢 (ポンクレ川) に下りる工事用道路の建設が計画され、試掘調査の結果 C 地区北西部の 119 m² の範囲が調査対象に加えられ、D 地区とした。

(1) 平成 27 年度

調査の流れ

5～7月に幸連3遺跡、8～10月に幸連4遺跡を調査する計画で、幸連3遺跡の調査に並行して本遺跡の準備を進めた。調査区の現況は杉の植林された山林で、4月の段階ではA地区のみが伐採された状況であった。地区間に横たわる沢が障壁となり、木の伐採や切り株の除去・表土除去などA→B→C地区の順に進める必要があった。また、試掘調査ではA・B地区に比べC地区には大型住居をはじめ多くの遺構・遺物が予想されていたので、8月までにC地区の準備を終え、その後はC地区を中心に調査を行った。

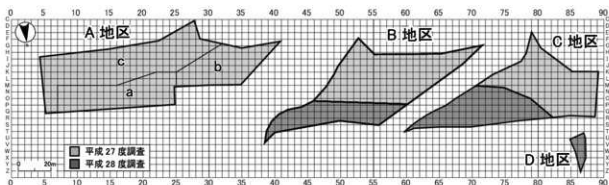


図 I-1 年度別調査範囲図

表 I-1 地区別作業進行表

平成 27 年度

	A地区	B地区	C地区
4月	4/23 北側工事立会(道教委)		
5月	5/14～27 準備工(抜根・表土除去) 5/21 武部遺構確認調査(重機) 5/27～6/3 小地区c 遺構確認調査		
6月	6/1・2 小地区c 地形測量	6/19～7/18 木伐採・抜根・搬出・表土除去(B・C地区)	
7月		7/21～29 地形測量・清掃(B・C地区)	7/30～ 調査開始 7/31～ 乱石?遺跡作業員合流(65人体制)
8月	8/28～31 25%調査(小地区a・b)	8/7～18 25%調査 8/27～9/7 遺構・包含層調査	盛土確認トレンチ(K・Nライン) 斜面部・低位部の遺構・包含層調査
9月	9/1～3 遺構確認調査(重機、小地区a・bの一部) 9/4～9 遺構・包含層調査(小地区a)	9/22～24 遺構・包含層調査	大型住居関連トレンチ(O・86ライン、斜行) 8/31～10/28 大型住居掘削内調査
10月	10/5～7 遺構・包含層調査(小地区a) 10/8・9 埋め戻し	10/19～21 遺構・包含層調査 10/22・23 埋め戻し	10/14～17 大型住居周機掘り下げ 10/19～28 大型住居周掘下住居調査 10/7～29 土器陶器調査 10/27 空撮
11月			11/2 作業終了 11/3 引き上げ

平成 28 年度

	B地区	C地区	D地区
4月		4/20～4/26 準備工(表土除去)	
5月	5/10・11 準備工(表土除去)	5/12 調査開始(当初34人体制) 5/13～26 25%調査・盛土範囲確認トレンチ調査 5/23～8/11 遺構・包含層調査 5/24より途中8遺跡へ12人離脱し22人体制 雨天時遺物水洗	
6月	6/13・14 25%調査 6/27～7/19 遺構・包含層調査	6/6より島の第2遺跡から9人合流し31人体制	
7月	7/2 工事用道路迂回工事 7/9 工事用道路復旧工事 7/23 埋め戻し		
8月	8/2 空撮		8/5・6 木伐採・搬出 8/9～11 表土除去(手掘り) 8/23～9/21 遺構・包含層調査
9月		9/22～10/27 遺物水洗(平成27・28年度調査遺物)	9/21・22 養生
10月		10/28 作業終了 10/29 引き上げ	

調査の経過は表 I-1 のとおりで、4 月 23 日に A 地区北側の範囲を対象に道教委による工事立会が行われ、工事用道路の設置により B 地区の準備が可能となり、5 月は A 地区の抜根・表土除去および小地区 c の遺構確認調査、6 月下旬から 7 月中旬は B・C 地区の伐採・抜根・表土除去、8 月に A・B 地区の 25% 調査、9 月上旬に手掘り調査から切り替えた一部の A (小地区 a・b)・B 地区の遺構確認調査、8 月下旬・9 月上・下旬に A (小地区 a・b)・B 地区を交互に遺構・包含層調査を行った。

B 地区までは調査区北側に砂利敷きの工事用道路の設置が可能で、車による物資や人の移動が可能であったが、BC 地区間の沢には絶滅危惧Ⅱ類であるニホンザリガニが生息し、開発局より保護対策の要請があり、沢に日陰を作るための寒冷紗の設置、単管による簡易橋の設置によって対応した。

C 地区の調査

遺構・遺物数が突出して多い C 地区は、表土除去・表面清掃・地形測量後すぐに調査に取り掛かった。まずは、清掃で確認されていた盛土 (Ⅲ～Ⅴ層の混土) の広がりを確認するために西側の高位部から東側の低位部にかけて東西方向にトレンチ (K・N ライン) を設定し、並行して盛土の分布していない低位部の調査に着手した。また、西側の高位部では大型住居 4 軒の周堤の状況を確認するためのトレンチ (O・86 ライン、H-1・2・4 ライン) を設定した。その後、高位部と斜面・低位部に分かれて調査を進めた。斜面部から低位部にかけては比較的順調であったが、高位部では大型住居の周堤の下から多くの小型住居と潰れた土器が密集した廃棄域が検出され、秋の深まる中での作業は困難を極め、日の出から日の入りまで実測作業は続いた。9～11 月は祝日 3 日・土曜日 3 日・日曜日 1 日作業を行い、当初予定より 2 日間延長して 11 月 2 日に調査を終えた。

(2) 平成 28 年度

調査の流れ

B・C 地区の平成 27 年度調査区の北側、および D 地区が対象である。B・C 地区ともに前年に抜根まで完了しており、表土除去から開始した。27 年度同様、遺構・遺物の濃密な C 地区が調査の主体で、B 地区の調査は工事用道路を切り替えながら 6・7 月に C 地区と並行して進めた。C 地区の調査を 8 月中旬に終了した後、D 地区に移行できるように 8 月上旬に準備に着手した。C 地区高位部の北側に位置する D 地区は、大型住居の周堤や廃棄域の続きが予想されていたため重機による作業を伐採木の搬出のみにとどめ、表土除去を含めた掘り下げはすべて人力で行った。予想通り、南側の H-3 や東側の H-39 の周堤や周堤下位の土器・石器の集中が検出された。9 月 21 日に調査を終え、壁際に土嚢を並べ養生を施した。以後、2 か年にわたって取り上げた遺物の水洗を 10 月 28 日まで行って作業を終了した。

C 地区の調査

最初に 25% 調査と並行して、前年度に斜面部で検出されていた盛土の広がりを確認するために、斜面方向にトレンチ調査 (63・65・69・73・75・77 ライン) を行った。その後、遺構・包含層調査に移行した。周堤を伴う大型住居はなかったものの 74 ライン以東には小型土坑が密集して検出された。

5 調査結果の概要

遺構は C 地区を中心に堅穴住居跡 43 軒、土坑 108 基、焼土 27 か所、土器集中 1 か所、剥片集中 29 か所、礫集中 3 か所、埋設土器 1 か所が検出された。そのほか、C 地区の斜面部には盛土が広く分布し、高位部の西側斜面際には土器・石器などの廃棄域が検出された。

A 地区は遺構・遺物ともにわずかであるが、トリサキ式が出土した。

表 I-2 検出遺構一覧

地区	遺構種別	遺構番号	数量	備考
A	土坑(P)	P-15・16	2基	
	焼土(F)	F-6	1か所	
	剥片集中(FC)	FC-1	1か所	
B	竪穴住居跡(H)	H-35・36	2軒	
	土坑(P)	P-90	1基	
	焼土(F)	F-8 ~ 12・21・22	7か所	
	礫集中(SC)	SC-1	1か所	
C	竪穴住居跡(H)	H-1 ~ 21・23 ~ 34・37・38	35軒	H-22は欠番
	土坑(P)	P-1 ~ 14・17 ~ 89・91 ~ 99	96基	
	焼土(F)	F-1 ~ 5・7・13 ~ 20・23・24	16か所	
	土器集中(PC)	PC-1	1か所	
	剥片集中(FC)	FC-2 ~ 18	17か所	
	礫集中(SC)	SC-3	1か所	
	埋設土器(BP)	BP-1	1か所	
D	竪穴住居跡(H)	H-39 ~ 44	6軒	H-39は周堤の一部のみ
	土坑(P)	P-100 ~ 108	9基	
	焼土(F)	F-25 ~ 27	3か所	
	剥片集中(FC)	FC-19 ~ 29	11か所	
	礫集中(SC)	SC-2	1か所	
計	竪穴住居跡(H)	H-1 ~ 44	43軒	H-22は欠番
	土坑(P)	P-1 ~ 108	108基	
	焼土(F)	F-1 ~ 27	27か所	
	土器集中(PC)	PC-1	1か所	
	剥片集中(FC)	FC-1 ~ 29	29か所	
	礫集中(SC)	SC-1 ~ 3	3か所	
	埋設土器(BP)	BP-1	1か所	

B地区は後期前葉の浅い竪穴住居跡2軒のほか、焼土が疎らに検出された。また、後期中葉の土器1個体が潰れた状態で出土した。

C地区からは多くの遺構・遺物が検出されたが、高位部にある周堤を伴う大型住居(H-1~4、円筒下層d1式期)が特筆される。周堤下には円筒下層b1~c式期の小型住居が高密度に分布し、その西側に廃棄域が伴う。また、中央の斜面部には榎林式期の住居、その北側上部には円筒下層c~d1式期の住居が分布する。土坑は大型住居周辺に坑口の広いフラスコ状のものがあり、74ラインより東側の斜面部から低位部にかけて小型のものを主体として濃密な分布が見られる。盛土は高位部から斜面部にかけて広がるが、遺物は多くはない。高位部の廃棄域や一部の住居の覆土には潰れた多くの土器が出土し、剥片集中や焼土も含まれる。

遺物は土器等155,096点、石器等306,216点の計461,312点が出土した。

土器は縄文時代前期後半(Ⅱ群b類)円筒下層b1~d2式、中期前半(Ⅲ群a類)円筒上層a2式・サイベ沢Ⅶ式、中期後半(Ⅲ群b類)榎林式相当・大安在B式、後期前葉(Ⅳ群a類)天祐寺式・トリサキ式、晩期前葉(V群a類)があり、前期後半が92.9%で最も多く、内訳を集計していないが円筒下層b1~c式がそのうち9割を占めると推定される。次に多いのが中期後半(3.6%)で榎林式に相当するもの、次いで後期前葉(2.5%)の天祐寺式である。

石器は石織・石槍・両面調整石器・筥状石器・つまみ付きナイフ・スクレイパー・楔形石器・石錐・Rフレイク・Uフレイク・石核・石斧・石のみ・北海道式石冠・扁平打製石器・すり石・たたき石・くぼみ石・石鋸・砥石・台石・石皿・石錘・線刻礫・磨製礫・垂飾・石冠・異形石器・石製品・加工痕のある礫がある。

頁岩産地に立地するためほとんどの剥片石器には頁岩が利用され、同様に礫石器の多くは近隣で採取される泥岩・砂岩が利用されている。(鈴木)

表 I -3 出土遺物一覧

種 別	分 類	遺 構	包 含 層	合 計
土器等	Ⅱ群 b 類	40,516	103,517	144,033
	Ⅲ群 a 類	435	494	929
	Ⅲ群 b 類	2,320	3,276	5,596
	Ⅳ群 a 類	929	3,006	3,935
	Ⅳ群 b 類		6	6
	Ⅳ群 c 類		88	88
	Ⅴ群 a 類		15	15
	不明	172	219	391
	土偶	1		1
	焼成粘土塊	38	47	85
	土製円筒 (Ⅱ b)	9	6	15
	赤色顔料?	1		1
	粘土塊	1		1
	小計	44,422	110,674	155,096
石器等	石鏃	88	140	228
	石槍	90	218	308
	両面調整石器	284	400	684
	筒状石器	15	17	32
	つまみ付きナイフ	76	118	194
	スクレイパー	334	536	870
	石鏃	21	27	48
	楔形石器	2	2	4
	R フレイク	376	562	938
	L フレイク	77	144	221
	割片	172,433	81,099	253,532
	石鏃	454	768	1,222
	石斧	26	58	84
	石斧半成品	1		1
	石のみ	10	15	25
	断切残片	6	9	15
	北海道式石冠	37	24	61
	扁平打製石器	191	247	438
	すり石	77	101	178
	石鏃	20	33	53
	たたき石	137	146	283
	くぼみ石	1		1
	砥石	23	25	48
	台石	31	17	48
	石皿	15	3	18
	原石	159	242	401
	石鏃	2	7	9
	加工痕のある礫	71	101	172
	礫	19,847	26,204	46,051
	石冠		1	1
	産筋	6	2	8
	産筋?		1	1
	異形石器		1	1
	石製品	11	4	15
	石製品?		1	1
	三角形石製品	1	2	3
	線刻礫	3	7	10
	磨製礫	1	1	2
	田たれ石	1	1	2
	高部小僧	4	1	5
	小計	194,931	111,285	306,216
合計		239,353	221,959	461,312

II 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形・地質

幸連4遺跡の所在する上磯郡木古内町は北海道南西部の渡島半島南側に位置する。北東側で北斗市、北側で厚沢部町、西側で上ノ国町、南西側で知内町と町界を接している（図II-1）。市街地は町の南西沿岸部にあり函館中心部から約40km西にある。町域はおよそ東西22.5km、南北17.7km、総面積は221.89km²で、その約9割が山岳・丘陵地帯である。南東側は津軽海峡に面し、北～北西側は300～700m級の渡島丸山、桂岳、梯子岳、瓜谷山、焼山、尖岳、袴腰岳などの山々に囲まれていて、北西部は日本海に流下する河川との分水嶺になっている。市街地中心地は木古内川・佐女川河口周辺の沖積地に形成されている。令和4年11月末時点で人口は3,732人である。

渡島半島は地体構造区分上、渡島帯に区分され、木古内町の北東にはその東帯の上磯コンプレックス（上磯層群）、北西には西帯の江差コンプレックス（松前層群）が基盤岩として分布する（図II-2）。東帯は特徴的な三疊紀（～ジュラ紀）石灰岩体と後期ジュラ紀～前期白亜紀砕屑岩シーケンス、および混在相から構成され、西帯は緑色岩を伴う石炭紀～ペルム紀炭酸塩岩相、ペルム紀～三疊紀～前期ジュラ紀のチャート、および中期ジュラ紀の砕屑岩シーケンスから構成される（日本地質学会編2010）。

それらの隆起地塊の間には大きな沈降部が形成され、新第三系が埋めるように厚く発達する。新第三系は下位から中新世前期の福山層および中新世中～後期の檜山層群の大安在川層・木古内層・厚沢部層および館層からなり、鮮新世の瀬棚層の地層は分布しない。

福山層は大部分が陸成の火山岩および火山砕屑物からなり、著しい変質作用を受けている。大安在川層は海進初期の堆積物で比較的淘汰の良い礫岩・砂岩など浅海性の粗粒堆積物からなる。木古内層から館層にいたる地層は主として泥質相からなる一連の堆積物である。木古内層は硬質頁岩相で特徴づけられる地層で薄板状の珪質硬質頁岩層と硬質泥岩軟質泥岩互層からなり中部には凝灰質砂岩層が発達する。大平川層以東の地域では厚く、幸連川では厚さ約500mで東部の亀川に向かって600m以上となる。この地域では硬質頁岩層の発達がよく、粘土質泥岩層を含まない。大平川上流域では層厚は薄いが比率は90%近くになる。赤褐色～チョコレート色の珪質な団塊を多く含むのも特徴である。木古内町内の河川における石材の分布調査では、木古内層を貫流する建有川・木古内川・幸連川・橋呉川・亀川・大釜谷川では石器に利用可能な硬質頁岩が採取され、貫流しない佐女川・蛇内川・上六畳間川では採取されておらず（鈴木2004）、木古内層の分布と一致する。

厚沢部層は黒色ないし暗灰色の泥岩を主とする下部の札苅部層と泥岩シルト岩互層および砂質シルト岩からなる佐助沢部層とに区分される。館層は塊状を呈する凝灰質～珪藻質シルト岩からなる。このほか檜山層群堆積時から鮮新世にかけての火山岩として桂岳の北東部には流紋岩岩脈が貫入し、桂岳の山頂部や周辺にはデイサイトが溶岩円丘を形成している。第四系は海岸沿いに発達する海岸段丘堆積物、木古内川・中野川・亀川流域に河岸段丘堆積物、各河川流域および海岸に発達する沖積層がある。

木古内町周辺の地質構造は、南北方向の褶曲および断層構造が支配的で、木古内断層と大平川断層はその方向から褶曲構造と密接に関連する。これらを切るNW-SEおよびNE-SW方向の断層がその後形成される（秦・垣見1979）。

木古内周辺の海岸段丘は宮内・八木（1984）によって高位のものからH₁面、H₂面、M₁面、M₂面、

M₂面の5面に区分されている(図II-5)。幸連・泉沢地区を境に違いがあり、北東部では5段の段丘が発達するのに対し、南西部ではM₁面、M₂面しか見られないが、その幅は北東部に比べ広い。亀川と幸連川には小規模な断層(前掲論文のf₃・f₄断層)があり、M₁面の旧汀線の比高差がf₃断層では22m、f₄断層では17mあり、東側で隆起量が多く、同一面であってもf₃断層以東、f₃・f₄間、f₄以西では海や隣接した川との比高差は東に順に大きくなる。幸連4遺跡はf₃・f₄断層間のM₁面上に立地している。M₁面は基盤の上に洞爺火山灰(Toya)が被覆し、最終間氷期最盛期に形成されたとされる。段丘形成後は、隆起の中心が東へ移動し、上磯隆起地塊西縁を画する大平川断層や江差隆起地塊を画する木古内断層のような地質構造上の大断層より東側の小規模な断層のほうが活動的である。f₄断層以東の隆起量が大きいためf₃・f₄に挟まれた傾動地塊と考えられる幸連・泉沢地区はM₁面で1.0°西(旧汀線方向S78°Wでの傾き)へ傾斜している。幸連川に沿ったf₃断層に関連するとみられる地震による地割れが川の500mほど西側の札苅6遺跡で検出され、その時期が縄文時代晩期以降、B-Tm以前と判定されている(道埋文2014a)ことから褶曲作用が継続しているようである。また、地割れの可能性のある溝が泉沢3遺跡(木古内町教委1998)、釜谷遺跡(木古内町教委1999a)〔旧川道〕や「流水跡」と報告)でも検出されている。

2 木古内・幸連の地名

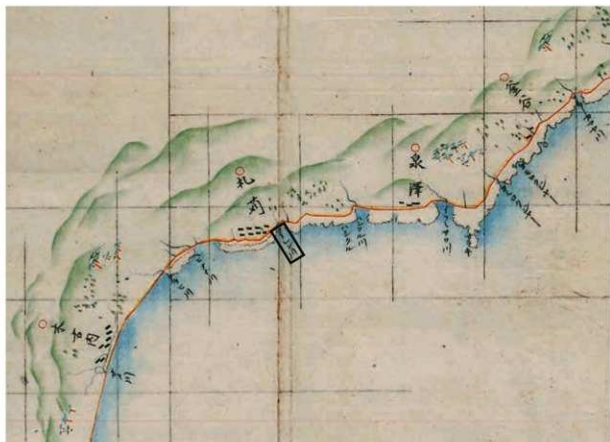
木古内の地名は木古内川の語源であるリロナイ(Rir' o nai)〔「潮入り川の意」:永田方正1891年(明治24年)刊『北海道蝦夷語地名解』〕やリコナイ〔「登る沢の意」:上原熊次郎1792年(寛政4年)刊『蝦夷地名考并里程記』、キコナイのキコを「木之子」(菌の意)の略称で菌の沢(市川十郎1858年頃(安政5年頃)刊『蝦夷実地検考録』)とする説があるが(「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1987)、「リコナイ」の記述が明治以前に見られないことから「リロナイ」が正しいとされる。山田秀三(1983)は、Rir-o-nai「波(磯波)のある・川」と訳し、風に逆行して潮(rur)が遡ると波(rir)がたつことから永田が意識したものと推測している。

幸連の地名は昭和4年に行政字名として付けられ、古くはこうれい・コウレキ・コウレ・香連とも書かれた(「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1987)。文政4年(1821年)完成の伊能忠敬『大日本沿海輿地全図』には「コーレン川」(図II-3)、安政6年(1859年)の松浦武四郎『東西蝦夷 山川地理取調図』には「コウレンマ」(図II-4、山田監修・佐々木編1988)、安政3・4年(1856・1857年)の『竹四郎廻浦日記』(高倉解説1978)や安政6年から慶応年代とされる『渡島日誌 巻之志』には「コウレン澗」(秋葉解説1988)の記載がある。嘉永7年(1854年)藤田惇斎・橋本玉蘭斎の作である『蝦夷閩境輿地全図』には「コヲレ」の表記がある。しかし、地名の由来については不明である。

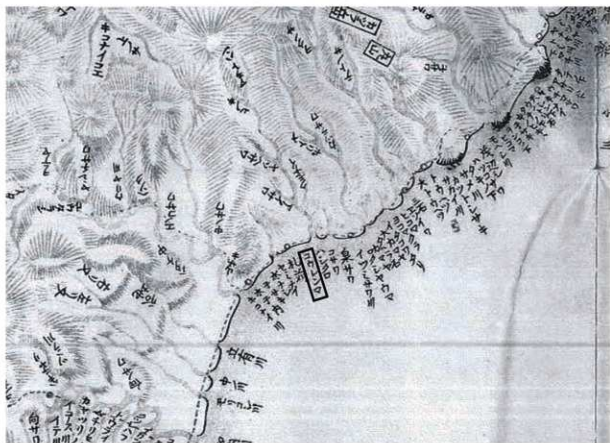
3 周辺の遺跡

木古内町には令和5年3月現在、旧石器時代から擦文文化期までの62カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている(表II-1)。また、大平4遺跡などで幕末函館戦争時の可能性のある遺構・遺物が少数確認されている。

調査遺跡は34遺跡で、学術調査である1971・1972年の札苅遺跡を除いて、道路や鉄道建設に伴う緊急調査である。1973年に国道228号線拡幅事業による札苅遺跡の調査以来、1983～1986年に津軽海峡線建設工事による札苅・新道4・建川・建川2遺跡の4遺跡、1988・1989年に農地造成事業による鶴岡2遺跡、1990～2001年に農道整備事業による大釜谷3・釜谷・釜谷4・釜谷5・亀川2・亀川3・泉沢2・泉沢3・蛇内遺跡の9遺跡、1996～2002年に砂利採取事業による新道2・新道3遺跡の2遺跡、



図Ⅱ-3 『大日本沿海輿地全図』（渡辺監修 2013）



図Ⅱ-4 『東西蝦夷 山川地理取調図』（山田監修・佐々木編 1988）

2009～2013年に北海道新幹線建設事業による蛇内2・大平・大平4・木古内・木古内2・新道4遺跡の6遺跡、2011～2019年に高規格幹線道路函館江差自動車道建設事業による釜谷8・釜谷10・亀川5・泉沢5・泉沢6・幸連・幸連3・幸連4・幸連5・札苅5・札苅6・札苅7・札苅8・大平4遺跡の14遺跡の調査が行われ、1983～2002年、2009～2019年は毎年のように調査が行われている。特に①農道整備事業、②北海道新幹線事業、③高規格幹線道路事業は大規模なもので、建設に伴う試掘調査で発見される遺跡も多く、①は大釜谷～泉沢地区、②は蛇内～木古内地区、③は釜谷～札苅地区の遺跡の濃密な地域をトレンチ状に調査しているため地域における遺跡の状況を把握する上で重要な成果をもたらしている。

町内の遺跡はF₃断層以西（泉沢地区以西）では河岸段丘上の中野A・中野B、沖積地上の瓜谷遺跡を除いて海岸段丘M₁面上に立地し、F₃断層以東では海岸段丘M₂面を中心に一部丘陵背面跡のH₂面にも分布し、M₁面には大釜谷・釜谷3遺跡が立地する（図Ⅱ-5）。分布を詳細に見ると東端の大釜谷2遺跡から木古内2遺跡にかけての沿岸部の遺跡と東から釜谷8・10・9、亀川5、泉沢6・4・5、幸連3・4・5、札苅9・8・5・6・7のやや内陸の遺跡に分けられる。後者は高規格道路事業による分布調査で確認されたものであり、両者の間の遺跡の有無（特にF₃断層以東のM₁面上の遺跡の有無）については調査の粗密があり注意が必要である。

調査遺跡を対象にして段丘区分と遺跡の標高を比較するとH₂面では釜谷・亀川地区（釜谷8・10）が75～85m、泉沢地区（泉沢6）が45～50mである。M₁面では幸連地区（幸連3・4・5、幸連）が20～30m、札苅地区（札苅8・5・6・7、札苅）は5～35mであるが10～25mが主体で、段丘の奥は高い傾向がある。蛇内地区（蛇内2・蛇内）は10～20m、大平地区（大平4・大平）は10～15m、木古内地区（木古内・木古内2）は5～15m、鶴岡・新道・建川地区（鶴岡2、新道3・4・2、建川2・建川）で15～20m主体で、新道4は20～30mを含み、新道2は5～10mでやや低い。M₂面では大釜谷・釜谷地区（大釜谷3・釜谷4・釜谷・釜谷5）が15～35m、亀川地区（亀川3・2）が25～30m、泉沢地区（泉沢3・2・5）が5～10及び20～35mでややバラつきがある。全体的にはH₂面が最も高く、M₁・M₂面はほとんど違いがない。これは先述のとおり東側の隆起量が大きいためである。M₁面ではF₃・F₄断層間の幸連地区より西側では標高が低くなり、第四紀地殻変動の影響の結果である。

次に本遺跡を除く幸連・橋呉地区の遺跡を概観する。()内の数字は北海道教育委員会の遺跡登録番号である。

幸連遺跡(B-05-18):標高24～29mほどの海岸段丘(M₁面)上に立地する。函館江差自動車道建設に伴い、平成29(2017)・30(2018)年に当センターにより発掘調査が行われた。調査面積は3,773 m²。遺構は堅穴住居跡10軒、土坑102基（うちフラスコ状土坑87基）、小土坑168基、焼土18か所、埋設土器6か所、盛土遺構4か所が検出され、盛土遺構からは焼土、土器集中、剥片集中、小礫の集中がまとまって検出されている（道埋文2022b）。住居の時期は縄文時代前期後半円筒土器下層b～d2式期、中期後半椀式期、フラスコ状土坑は円筒下層b～d2式期、盛土遺構は円筒下層d1～d2式期である。遺物は円筒下層d1～d2式期を中心として421,877点の土器・石器類・漆製品（2点）が出土している。

幸連2遺跡(B-05-33):標高20m程の海岸段丘(M₁面)上に立地する。未発掘である。時期は不明。

幸連3遺跡(B-05-59):標高22～27mほどの海岸段丘(M₁面)上に立地する。函館江差自動車道建設に伴い、平成27(2015)年に当センターにより発掘調査が行われた。調査面積は9,709 m²。遺構は堅穴住居跡15軒、土坑16基、Tビット1基、焼土26か所、土器集中3か所、剥片集中6か所、盛土1か所が検出されている（道埋文2018a）。遺物は土器13,683点、石器ほか13,438点、合計

表Ⅱ-1 木古内町の道跡一覧

道跡番号	道跡名	種別	主な時期	調査歴(報告書)【備考】	調査原因
B-05-01	新道道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-02	大釜谷道跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)		
B-05-03	木古内道跡	集落跡	縄文(前期・中期)・弥生	2010・2011 道理文(2010b)	新幹線
B-05-04	札瓦道跡	集落跡	縄文(晩期)・近世	1971・1972 北海道開拓記念館(1976)	宇留
				1973 町教委(1974)	沼田太郎
				1983 道理文(1986b)	海峽線
B-05-05	釜谷道跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・弥生	1991-1993 町教委(1999a)	農道
B-05-06	泉沢道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-07	大平道跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・弥生	2009～2011・2013 道理文(2011b, 2016a, 2017a・b)	新幹線
B-05-08	蛇内道跡	集落跡	縄文(前期～後期)	2000 町教委(2004b)	農道
B-05-09	新栄町道跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)		
B-05-10	新道 3 道跡	集落跡	縄文(中期・後期)	1996 町教委(1997)	砂利採取
B-05-11	新道 2 道跡	集落跡	縄文(前期)	1997～2002 町教委(1999b, 2003b)	砂利採取
B-05-12	中野 A 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-13	中野 B 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-14	瓜谷道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-15	大釜谷 2 道跡	遺物包含地	縄文(前期・中期)		
B-05-16	釜谷 2 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-17	橋爪道跡	遺物包含地	縄文・縄文(前半期)		
B-05-18	幸連道跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	2017・2018 道理文(2022)	江差道
B-05-19	蛇内 2 道跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	2009～2011 道理文(2011c, 2012a)	新幹線
B-05-20	蛇内 3 道跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)		
B-05-21	大平 2 道跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)		
B-05-22	大平 3 道跡	遺物包含地	縄文(中期)		
B-05-23	高枝高台道跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)		
B-05-24	結岡道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-25	結岡 2 道跡	遺物包含地	縄文(前期～後期)・縄文	1988・1989 町教委(1989, 1990)	農地造成
B-05-26	津川道跡	遺物包含地	縄文(早期～後期)	1984 道理文(1986a)	海峽線
B-05-27	新道 4 道跡	集落跡	旧石器・縄文(早期～晩期)・縄文	1984～1986・2013 道理文(1986a, 1987, 1988, 2015c)	海峽線・新幹線
B-05-28	木古内 2 道跡	集落跡	縄文(前期)	2010・2011 道理文(2011a・2012b)	新幹線
B-05-29	大平 4 道跡	集落跡	縄文(早期～中期・晩期)	2009・2010・2012～2014 道理文(2011b・2012a・2017d)	新幹線・江差道
B-05-30	札瓦 2 道跡	遺物包含地	不明		
B-05-31	札瓦 3 道跡	遺物包含地	不明		
B-05-32	札瓦 4 道跡	遺物包含地	不明		
B-05-33	幸連 2 道跡	遺物包含地	不明		
B-05-34	橋爪 2 道跡	遺物包含地	不明		
B-05-35	津川 2 道跡	集落跡	縄文(前～晩期)	1985・1986 道理文(1987)	海峽線
B-05-36	釜谷 3 道跡	遺物包含地	縄文(晩期)		
B-05-37	釜谷 4 道跡	遺物包含地	旧石器・縄文(早期～後期)	1990 町教委(1991)	農道
B-05-38	龜川道跡	遺物包含地	縄文(晩期)		
B-05-39	龜川 2 道跡	遺物包含地	縄文(中期～晩期)	1995 町教委(1998a)	農道
B-05-40	龜川 3 道跡	集落跡	縄文(早期～後期)	1995 町教委(1998b)	農道
B-05-41	泉沢 2 道跡	集落跡	縄文(前期～晩期)・弥生	1998～2001 町教委(2003c・d, 2004a)	農道
B-05-42	泉沢 3 道跡	遺物包含地	縄文(後期)	1996 町教委(1998c)	農道
B-05-43	龜川 4 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-44	釜谷 5 道跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	1993 町教委(1995)	農道
B-05-45	釜谷 6 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-46	釜谷 7 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-47	大釜谷 3 道跡	集落跡	縄文(前期～晩期)	2001 町教委(2003b)	農道
B-05-48	札瓦 5 道跡	遺物包含地	縄文(早期・前期・後期)	2011・2017 道理文(2012c・2019)	江差道
B-05-49	札瓦 6 道跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2011 道理文(2014a)	江差道
B-05-50	札瓦 7 道跡	集落跡	縄文(後期)	2013～2017 道理文(2022a・2023b)	江差道
B-05-51	釜谷 8 道跡	遺物包含地	縄文(早期・中期・後期)	2011・2012 道理文(2014c)	江差道
B-05-52	釜谷 9 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-53	泉沢 4 道跡	遺物包含地	縄文		
B-05-54	龜川 5 道跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	2014 道理文(2017a)	江差道
B-05-55	泉沢 5 道跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2014 道理文(2017c)	江差道
B-05-56	札瓦 8 道跡	集落跡	旧石器・縄文(前期)	2014 道理文(2020)	江差道
B-05-57	札瓦 9 道跡	遺物包含地	不明		
B-05-58	釜谷 10 道跡	遺物包含地	縄文(後期)	2016 道理文(2018b)	江差道
B-05-59	幸連 3 道跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	2015 道理文(2018a)	江差道
B-05-60	幸連 4 道跡	遺物包含地	縄文(前期後半・中期後半～後期前半)	2015・2016 道理文(2023 本書)	江差道
B-05-61	泉沢 6 道跡	遺物包含地	縄文(早期・後期)	2015・2016 道理文(2018c)	江差道
B-05-62	幸連 5 道跡	集落跡	縄文(前期後半～後期前半)	2016～2019 道理文(2023c)	江差道

町教委：木古内町教育委員会、道理文：北海道道理文化財センター

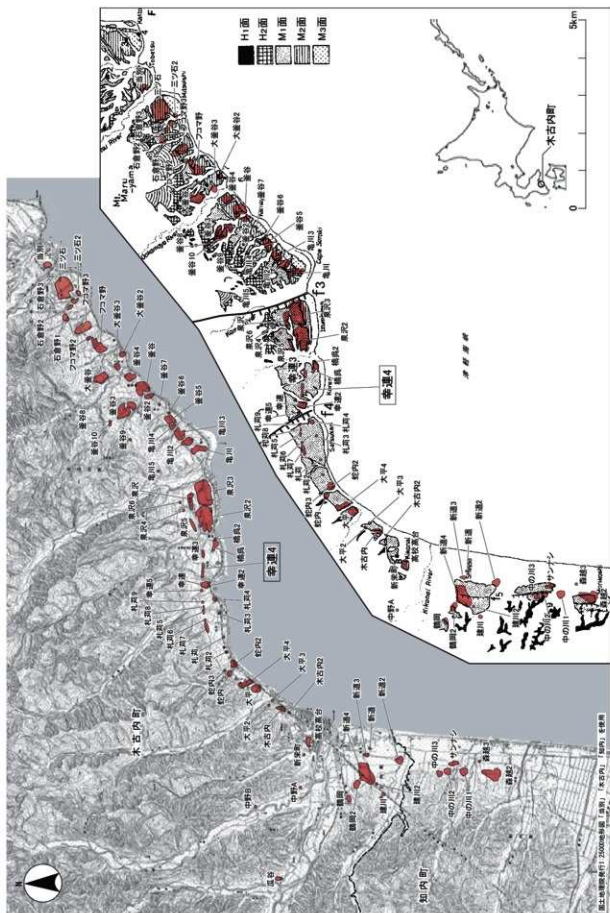


図 Ⅱ-5 木古内町周辺の遺跡と段丘分類図 (宮内・八木 1984 第 5 図に加筆)

27, 121 点が出土している。時期は縄文時代前・中・後期、続縄文時代前半期で、遺構・遺物とも縄文時代中期前半および後期前葉が主体を占める。

幸連 5 遺跡 (B-05-62) : 標高 20 ~ 22m ほどの海岸段丘 (M₁ 面) 上に立地する。函館江差自動車道建設に伴い、平成 28 (2016) ~ 令和元 (2019) 年に当センターにより発掘調査が行われた。調査面積は 2,687 m²。大きく 2 列の盛土とその間の削平された部分に分けられ、斜面部 1 か所を含む盛土遺構 3 か所のほか、堅穴住居跡 135 軒、フラスコ状を主体とする土坑 588 基、石棒ピット 1 か所、倒立土器 1 か所、焼土 46 か所、小礫集中 4 か所、畑跡 2 か所が濃密に重層して検出された。遺物は土器・石器など 1,603,294 点が出土し、土器は前期後半の円筒下層式、中期の円筒上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、榎林式、大安在 B 式、ノダツⅡ式、後期前葉の煉瓦台式、天祐寺式が出土している。縄文時代初めの人の顔が描かれた三角形石製品が特筆される (道埋文 2023b)。

橋呉遺跡 (B-05-17) : 標高 20m 程の海岸段丘 (M₁ 面) 上に立地する。未発掘である。縄文・続縄文時代前半期とされる。

橋呉 2 遺跡 (B-05-34) : 標高 20m 程の海岸段丘 (M₁ 面) 上に立地する。未発掘である。時期は不明。

4 遺跡の位置と地形

幸連 4 遺跡は JR 木古内駅から北東に 5.0 km、海岸線より 400m ほど内陸に位置し、橋呉川とボンクレ川¹⁾ に挟まれた標高 22 ~ 28m 程の海岸段丘 (M₁ 面) 上のボンクレ川寄り、海岸と丘陵のほぼ中央に立地する (図Ⅱ-5 ~ 7)。調査区を A ~ C 地区に分断する 2 本の沢が南西方向に下刻し、A 地区内にも A・B 地区間の沢の支流が流下する。これらの沢は上部の幅 15m 程、段丘面との比高が 5 ~ 10m で、両岸は急傾斜を呈する。調査範囲の北側 30m には B・C 地区間の沢の源頭部に湧水池があり (図版 163-2)、遺跡の形成に影響を与えたと考えられる。西側のボンクレ川は上部の幅 80m 程、比高 18m 程でこれらに比べ深く、規模が大きい。その河原は主に木古内層起源の泥岩の扁平な転礫で構成される (図版 163-5)。

A 地区は全体的に平坦、B 地区は平坦面が狭く、馬の背状で、両側の沢に向かって傾斜する。C 地区は西側のボンクレ川沿いが最も高く、南北に続く狭長な平坦面 (①) で、そこから南東に向かってすり鉢状に斜面部 (②) があり、下部は傾斜が緩やかである (③)。本報告では①を高位部、②を斜面部、③を低位部と呼ぶこととする (図Ⅱ-8)。

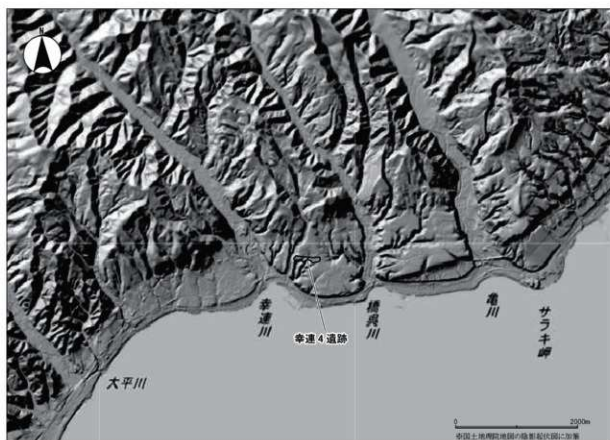
図Ⅱ-9 は C 地区周辺の窪みを木古内町教育委員会立ち会いの下で簡易測量した図である。段丘西縁の平坦部には今も南北に列状に多数の窪地が確認でき (図版 162-5 ~ 8)、調査区内の H-1 ~ 4 と同様の周堤のある大型住居などが連続している。

図Ⅱ-10 は遺跡周辺の戦後の土地利用の変遷を並べたものである。1948 (昭和 23) 年は A・B 地区および C 地区の低位部は畑で、C 地区高位部・斜面部は山林である。1976 (昭和 51) 年には C 地区低位部に植林がされており、2005 (平成 17) 年には A 地区の一部を除いてほぼ全的に山林となっている。調査時にも A・B、C 地区低位部は表土に耕作の影響があり、C 地区斜面部低位には道路による削平があったが、C 地区高位部・斜面部は土壌の擾乱がほとんど見られなかった。

幸連 4 遺跡と同一段丘面上の東側には幸連 3 遺跡、その海側には橋呉・橋呉 2 遺跡が、ボンクレ川を挟んで西側には幸連・幸連 5 遺跡がある。東側の橋呉川支流を挟んだ北東部の幸連育成牧場では 10 cm を超える頁岩の石刃製石器が採集されており、蘭越型細石刃核石器群の存在が予想される (道埋文 2018a)。川の対岸にあたる幸連遺跡には縄文時代前期後半の円筒下層 b1 ~ d2 式期の住居、多数のフラスコ状ピット群、盛土遺構が検出されており、当遺跡との関連が想定される。



図Ⅱ-6 幸連4遺跡位置図



図Ⅱ-7 幸連4遺跡と周辺の地形

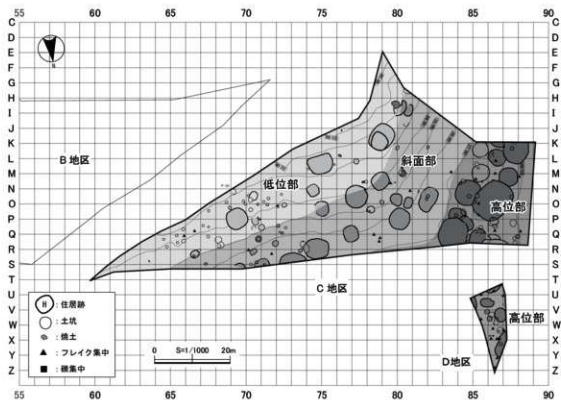


図 II-8 C 地区地形分類図

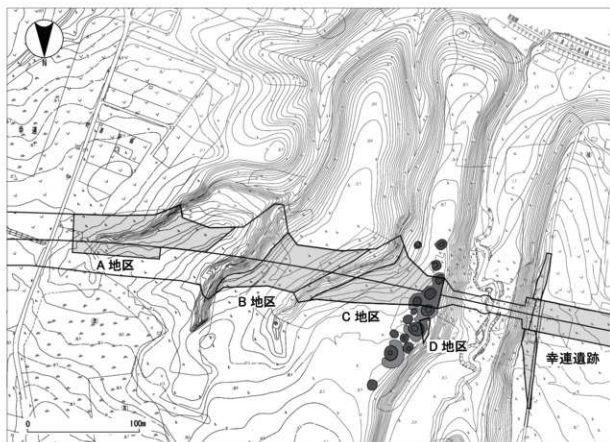
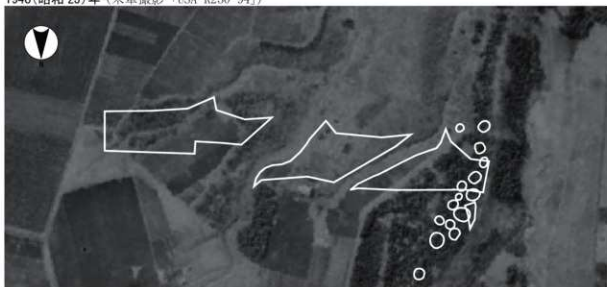
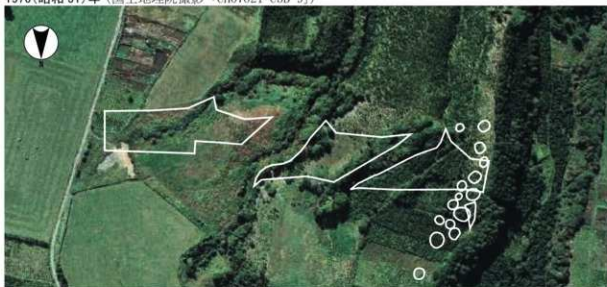


図 II-9 幸連4遺跡と周辺の窪み

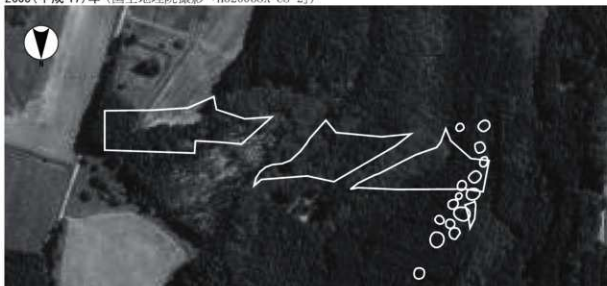
1948(昭和 23)年(米軍撮影「USA-R250-94」)



1976(昭和 51)年(国土地理院撮影「CH07621-C3B-9」)



2005(平成 17)年(国土地理院撮影「H020058X-C8-2」)



図Ⅱ-10 幸連 4 遺跡の変遷

※「」内は写真番号

(鈴木)

- 1) 国土交通省の河川データでは現在、「ボンクレ川」と登録されているが、国土地理院明治 29 年製の 5 万分の 1 地形図「木古内」には「エビシトー川」と記載されている。

Ⅲ 調査の方法

1 調査区の設定

調査区はアルファベットの太文字と数字の組み合わせで表示し、規格は4×4mとした。調査区の基準は工事測定のSP29,400を基点として、SP29,500を通る直線を東西方向の基線とし、南北方向はSP29,400の基準点を通り、東西方向の基線に直交する直線とした(図Ⅲ-1)。

ラインの設定は、東西方向をアルファベットの太文字とし、基線をMに設定し、南から順にC～Z、南北方向をアラビア数字とし、基線を30に設定し、東から0～90まで付けた。

調査区の呼称は4m四方区画の南東隅(グリッド図では左上)のライン交点で示した。例えば、Nラインと88ラインの交点の北西側が「N88区」となる。

M30・M55の世界測地系による平面直角座標は以下のとおり。

M30 (SP29,400)	X = -255100.508	Y = 19585.106
M55	X = -255085.854	Y = 19486.192 (平面直角座標系 第Ⅺ系)

2 調査の方法

調査の経過についてはⅠ章4で述べたので、ここでは全体の方法について記載する。

調査にあたって、試掘調査の結果をもとに場所ごとに遺構・遺物の粗密や包含層の残存の良否を想定し、①移植ごてを使用する範囲、②移植ごてとスコップを併用する範囲、③表土除去後、遺構確認を行う範囲に分けた。①～③とも植林された杉の伐採・抜根・搬出の後、重機による表土除去を行い、杭の打設、表面清掃、2mおきのレベルの記録を経て、調査に着手した。

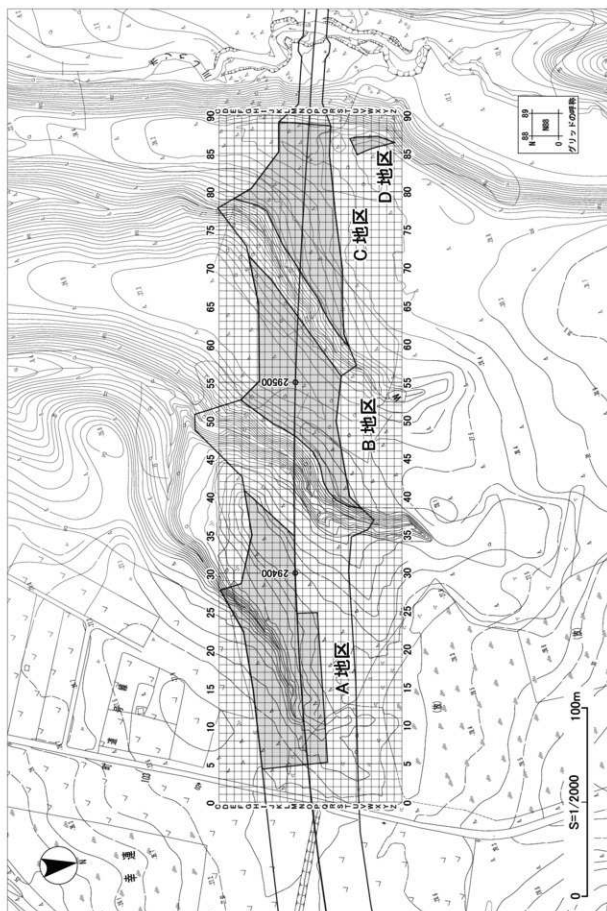
①②の範囲については、早期に全体の出土傾向を把握するために25%調査(1グリッドおきの調査)を行い、出土量の極めて少ないA地区-a・bについては③の方法に切り替えた(図Ⅲ-2)。C地区については高位部の大型住居周辺及び斜面部は周堤や盛土の広がりを確認するためにトレンチ調査を行った後、包含層調査に移行した。

包含層調査においては遺構の検出に努め、検出した遺構は大型のものは十字ベルトを残し、小型のものは半截、断面図作成後、完掘し、図面を作成した。遺構出土遺物は床面・坑底面・覆土中の主要なものについては図面に記載し、それ以外のものは覆土単位で取り上げ、包含層の遺物はグリッド単位で層位ごとに取り上げた。87ライン以西では大型住居の周堤の下から遺物の集積(廃棄域)が検出された。出土状況の客観化および記録の省力化と接合作業の効率化の目的で土器のまとまりの単位をグリッドごとに1番から番号を付け、写真と輪郭図で記録した。同一のまとまりでも複数グリッドにまたがる場合、それぞれに番号を付けた。平成28年度にはD地区においても遺物の集積が検出され、同様の方法をとった。

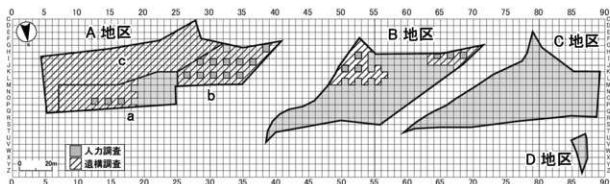
焼土は土壌の一部を採集し、有機質遺物の回収を目的としてフローテーション法(浮遊物を0.425mmと2mmメッシュで、沈殿物を1mmメッシュの篩で選別)による選別作業を行った。また、剥片集中のうち、細片が多く、取り上げが困難なものは土ごと取り上げ、1mmメッシュの篩で水洗選別を行った。

出土遺物は、現場段階で遺跡名・グリッド(遺構名)・層位・遺物番号・日付をマジックでビニール袋に記入して回収した。その際、土器片、剥片石器類・礫石器類に袋を分けた。

調査状況や遺構等の確認状況・平面・断面、遺物出土状況については図化作業と写真撮影によ



図Ⅲ-1 調査範囲・調査区設定図



図Ⅲ-2 調査方法別範囲図

て記録した。カメラは銀塩中判カメラ（マミヤ RZ67 PRO II）とデジタル一眼レフカメラ（Nikon D5500）を併用し、前者では6×7判リバーサル（FUJIFILM FUJICHROME PROVIA 100F）・モノクロフィルム（FUJIFILM NEPAN ACROS 100）の両者に、後者ではRAWとJPEGの両形式で同時記録した。また、平成28年度には遺構・遺物実測を効率的に進めるために、コンパクトレンズカメラ（CASIO EX-FR100）を活用し、専用のスティックや測量用のスタッフの先端に装着して高位置からの撮影や俯瞰写真の記録を行った。

銀塩カメラでは保存性を考慮して遺構の完掘・土層断面など主要な被写体を対象とし、デジタルカメラでは手軽さを生かして銀塩カメラと同一カット以外にも小規模な付属遺構なども撮影対象とした。

現場では撮影データ（日付・遺跡名・被写体・方向・撮影者・カメラごとのカット番号）を野帳に記録し、写真台帳を作成し、フィルムを整理・収納した。

3 整理の方法

（1）土器・石器

取り上げた遺物は①水洗・乾燥、②分類、③遺物カード作成、④遺物台帳作成、⑤注記の順で一次整理を行った。①は平成28年度の雨天時と9/22～10/27に現地で行い、江別の整理作業所に搬送した後、②以降の作業を進めた。遺物カードには調査区・遺構名・遺物番号・層位・分類名（器種名）・石質・点数・重量を記入した。

石器は剥片・原石・礫以外のツールを抜き出し、1点につき1つの袋に入れて分離し、袋ごとに遺物カードを作成した。礫は点取り遺物を除きデータの収集後、廃棄した。

遺物番号は、遺構は点取り遺物がある場合にはその番号を優先的に1番から付け、その後に土器・剥片石器・礫石器に番号を付けた。包含層は、土器は層位・分類順、石器は剥片石器・礫石器の順にそれぞれ1番から付けた。

これらのカード情報を基に台帳作成を行い、データについてはエクセルで入力を行った。

注記は、土器は約1cm以上のものに、石器は抜き出したものにポスターカラーで行い、クリアラッカーで上塗りした。注記の順番は遺跡名、調査区・遺構、層位、遺物番号の順番でそれぞれの間には「・」をつけている。具体的な注記の要領は以下のとおりである。

遺跡名：「コ4」とした。

調査区・遺構名等：包含層出土遺物の場合はアルファベットと数字を連続させ、N88区の場合「N88」とし、遺構出土遺物の場合はアルファベットと数字の間にハイフン（-）を入れて「H-1」とした。

層位：基本層位にあるものはローマ数字で表現し、覆土や攪乱や床面の場合はカタカナや漢字で「フク」「カク」「床」とした。また、盛土は「M」、周堤は「RM」とした。

遺物番号：アラビア数字で表した。

以上の注記法に従い、N88 区Ⅲ層出土の遺物番号 10 の遺物は「コ 4・N88・Ⅲ・10」、堅穴住居跡 1 床面出土の遺物番号 3 の遺物は「コ 4・Ⅱ-1・床・3」となる。

以上の一次整理作業後に土器・石器の接合に移行した。土器の接合は分類ごとに進め、接合作業の終了後、掲載遺物を選択し、実測、拓本、トレース、写真撮影などの図版作成に関する作業を行った。土器の掲載基準は、実測図は復元できた個体、拓影図は大きく接合したものを優先的に、文様構成の特徴的なものとした。石器は、器種ごとに主要なものを掲載し、特に表面に使用痕とみられる光沢のある石器を R フレイク・U フレイク・剥片からも抽出した。

石器類の接合作業は、折れ面については器種単位で進め、器種間でも類似したものは接合を試みた。また、剥離面同士の接合は住居の覆土中にまとも出土した資料、剥片集中を対象とした。

実測図や拓影図を示した土器・石器などは写真図版にも載せ、掲載遺物一覧表に表示した。

遺構図については、イラストレーターでトレースし、印刷原稿とした。

（2）遺物の収納

整理後の遺物は、報告書掲載資料と非掲載資料に分け、掲載資料は土器・石器ごとに遺構・包含層出土資料に分け、掲載番号順にコンテナに収納した。復元土器については木古内町に搬送後、収蔵施設に収納している。

非掲載資料は土器・石器に分け、それぞれ遺構・包含層出土資料に分け、遺構は全種別とも遺構毎に、包含層出土資料は、土器は分類で分け、発掘区順に収納した。石器は器種で分け、発掘区順に収納した。

最終的にこれらのコンテナに通し番号を付け、収納台帳を作成した。

4 遺物の分類

（1）土器の分類

土器は（公財）北海道埋蔵文化財センターの一般的な分類に準じ、縄文時代早期～擦文文化期に至るまでⅠ～Ⅶ群に分類し、特徴的な文様などにより可能な破片等については細分類を行っている。

Ⅰ群 縄文早期に属するもの（未検出）

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの

a 類：縄文の施された丸底、尖底を特色とするもの（未検出）

b 類：円筒下層式に相当するもの

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの

a 類：円筒上層式・サイベ沢Ⅶ式・見晴町式に相当するもの

b 類：榎林式・大安在Ⅱ式・ノダツⅡ式・糠瓦台式に相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの

a 類：天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津式・白坂Ⅲ式に相当するもの

b 類：ウサクマイⅢ式・手稲式・鯉間式に相当するもの

c 類：堂林式・三ツ谷式・湯の里Ⅲ式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの

- a 類：大洞 B・BC 式、上ノ国式に相当するもの
- b 類：大洞 C₁・C、聖山Ⅰ式に相当するもの（未検出）
- c 類：大洞 A・A' 式、聖山Ⅱ式に相当するもの（未検出）

Ⅵ群 縄文時代に属するもの（未検出）

Ⅶ群 弥生文化期に属するもの（未検出）

（2）石器類の分類（細分類は図Ⅲ-3）

石鏃 素材を細かい加工により薄身にして、端部に尖頭部を作り出した 5cm 未満の石器

- Ⅰ類：凸基のもの。尖頭部側縁が直線的なものをⅠa 類、内湾して尖るものをⅠb 類とする
- Ⅱ類：有茎のもの。茎部側縁がやや内湾するものをⅡa 類、強く内湾するものをⅡb 類とする
- Ⅲ類：平基～凹基のもの。基部が直線的なものをⅢa 類、やや内湾するものをⅢb 類、強く内湾するものをⅢc 類、五角形のものをⅢd 類とする

石槍 素材の両面を細かく加工して、尖頭部を作り出した 5cm 以上の石器

両面調整石器 素材の両面を粗く加工した石器で、石鏃・石槍・筈状石器以外の石器

筈状石器 素材の両面を加工し、端部を直線または弧状に作り出した石器

つまみ付きナイフ 素材端部にノッチ状の加工でつまみ部を作り出した石器

スクレイパー 素材の縁辺に連続的な二次加工を施した石器

- Ⅰ類：縦長剥片素材。加工が斜角のものをⅠa 類、平坦なものをⅠb 類とする
- Ⅱ類：薄手で幅広のやや縦長の剥片素材。加工は平坦剥離による
- Ⅲ類：内湾する側縁に加工が施されるもの
- Ⅳ類：短径の剥片素材のもの
- Ⅴ類：両面に加工が施されるもの
- Ⅵ類：斜軸剥片素材のもの
- Ⅶ類：加工部に石鏃状の擦り面があるもの
- Ⅷ類：その他

石鏃 素材の端部に鏃状の尖頭部を作り出した石器

楔形石器 素材の両端に両極剥離による対向する剥離がある石器

R フレイク 素材に二次加工を施したもので、定形的石器以外の石器

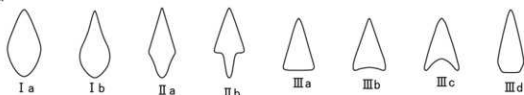
U フレイク 縁辺に概ね 2mm 以下の使用による刃こぼれとみられる連続的な剥離のある石器

剥片 石核・石器（ツール）から剥離されたもので、二次的な加工が施されていない石器

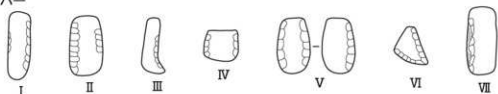
石核 目的剥片を剥離したと考えられる石器

- Ⅰ類：平坦な作業面で縦長剥片が剥離されるもの。正面で一方方向の剥離のあるものをⅠa 類、側面の剥離があるものをⅠb 類、両面で一方方向の剥離のあるものをⅠc 類とする
- Ⅱ類：打面と作業面を固定して全周で剥片が剥離されるもの。両面で剥片が剥離され、ディスク状になるものをⅡa 類、上面に打面を固定し、主に側面で縦長剥片が剥離されるものをⅡb 類とする
- Ⅲ類：幅広の面で剥片が剥離され、舟形になるもの。単剥離打面のものをⅢa 類、副剥離打面のものをⅢb 類とする
- Ⅳ類：一縁辺で打面と作業面を入れ替えながらチョッパー状に剥離が行われるもの。栗の実形
- Ⅴ類：打面と作業面を入れ替えながら剥片が剥離され、複数面での転移により立方体状になるもの
- Ⅵ類：自然面打面で一方方向の剥離が行われるもの

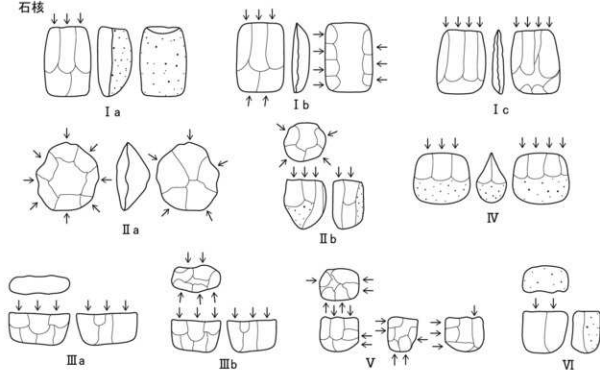
石鏃



スクレイパー



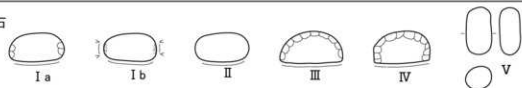
石核



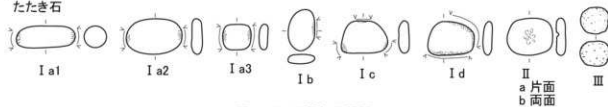
扁平打製石器



すり石



たたき石



図Ⅲ-3 石器細分類図

Ⅶ類：その他

石斧 打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器

石のみ 打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した小型の石器

擦切残片 擦切技法による溝状の痕跡のある破片

北海道式石冠 厚手の礫の縁辺に平滑な擦り面があり、敲打により持ち手が作り出された石器

扁平打製石器 扁平な素材の縁辺部が平坦剥離によって加工された石器で、長辺に狭長な平坦面の残るものがある

Ⅰ類：側縁が直線的に加工されるもの

Ⅱ類：側縁が内湾するように加工されるもの

Ⅲ類：加工されずに半円形のもの

Ⅳ類：細長い長方形のもの

Ⅴ類：幅広い長方形のもの

Ⅵ類：その他

すり石 小型礫の縁辺や平坦面に擦り面(平坦面)がある石器。Ⅰ～Ⅳ類は下縁に擦り面(平坦面)がある

Ⅰ類：側縁に加工のあるもの。打ち欠きによるものをⅠ a 類、敲打によるものをⅠ b 類とする

Ⅱ類：加工のないもの

Ⅲ類：周縁加工があり、半円形のもの

Ⅳ類：周縁加工があり、側縁が作り出されるもの

Ⅴ類：表面全体が平滑なもの

Ⅵ類：その他

石鉾 扁平な素材の縁辺に断面がU字状の擦り面が作り出された石器

たたき石 礫に潰打痕が観察される石器

Ⅰ類：礫の側縁に潰打痕のあるもの。端部にあるものをⅠ a 類とし、素材により棒状礫をⅠ a1 類、扁平棒状礫をⅠ a2 類、短径の扁平礫をⅠ a3 類とする。側縁に1か所あるものをⅠ b 類、複数か所あるものをⅠ c 類、連続するものをⅠ d 類とする

Ⅱ類：平坦な表面に潰打痕のあるもので、片面のみをⅡ a 類、両面をⅡ b 類とする

Ⅲ類：長・幅・厚がほとんど変わらない塊状の形状のもの

砥石 礫に幅広く浅い窪み状の擦り面のある石器

台石 盤状礫に打撃痕や擦り痕が観察される石器

石皿 盤状礫に窪み状の擦り面のある石器

石錘 扁平礫の対向する辺にノッチ状の打ち欠きのある石器

線刻礫 表面に線刻のある礫

磨製礫 表面が研磨された礫で刃部などが作り出されないもの

加工痕のある礫 素材の一部に剥離が観察されるもので定形的石器以外の礫

雨だれ石 素材の一部に穴の開いた自然石

原石 剥片石器の石材として利用される石で、人為的と考えられる剥離面のないもの

礫 剥片石器の石材として利用されない石で、人為的な痕跡が観察されないもの

異形石器 不定形に加工された石器

垂飾 素材に穿孔の認められる石器

石製品 素材に研磨などで丁寧に加工された石器

5 土層

(1) 観察方法

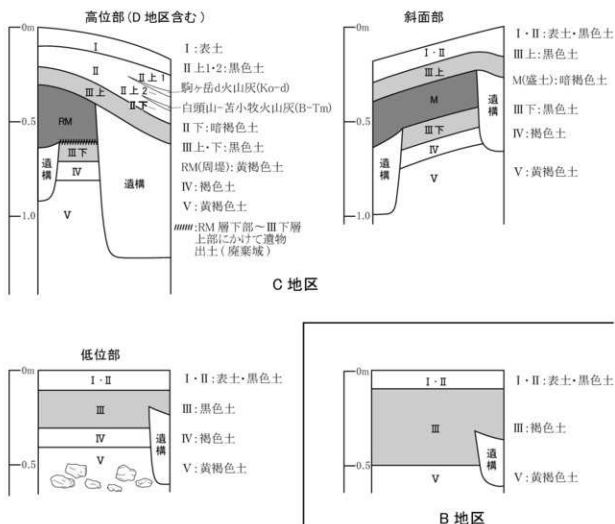
土層については、以下の項目について観察・記録した。色調・面積割合については『新版標準土色帖』を用い、土性・堅密度・粘性（粘着性）の区分は『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇話会 1984）の基準を主に用いた。

- ・色調：色相・明度・彩度を記号および数値で表した。
 - ・土性：砂土（S）・砂壤土（SL）・壤土（L）・シルト質壤土（SiL）・埴壤土（CL）・軽埴土（LiC）・重埴土（HC）に区分し、必要に応じて記載した。
 - ・粘性：なし・弱・中・強に区分した。
 - ・堅密度：すこぶるしょう・しょう・軟・堅・すこぶる堅・固結に区分した。
- その他、主に混入物については種類・大きさなどを記載した。

(2) 基本土層（図Ⅲ-4）

I 層：黒褐色（10YR2/2）埴壤土 粘性中 軟～堅 表土・耕作土

II 層：黒色（10YR1.7/1～2/1）埴壤土 粘性中 軟～堅 住居跡の窪みには駒ヶ岳 d 火山灰（Ko-d）、1640 年降下：黄褐色（2.5YR5/4）砂土（極細粒砂）粘性なし 軟～堅）が挟在し、より深い



図Ⅲ-4 基本土層図

住居にはその下位に白頭山 - 苦小牧火山灰 (B-Tm、10 世紀降下) が確認される。B-Tm の上下でⅡ上層とⅡ下層に分け、上層はさらに Ko-d の上下でⅡ上 1 層とⅡ上 2 層に分けた

Ⅱ上 1・2 層: 黒色 (10YR1.7/1 ~ 2/1) 埴壤土 粘性中 軟~堅

Ⅱ下層: 暗褐色 (10YR3/4) 埴壤土 粘性中~強 軟~堅 B-Tm が混じる

Ⅲ層: 黒色 (10YR2/1) ~ 黒褐色 (10YR2/3) 埴壤土 粘性中~強 軟~堅 M・RM 層のある場所では上下でⅢ上層とⅢ下層に分けられる。両者は、土性は類似するが、Ⅲ上層 (黒色 (10YR2/1) ~ 黒褐色 (10YR2/3)) に比べ、Ⅲ下層 (黒褐色 (10YR2/2) ~ 暗褐色 (10YR3/4)) は黄色が強い。B 地区のⅢ層 (褐色 (10YR4/6)) は C 地区に比べさらに黄色が強い

M 層: 黒褐色 (10YR2/3) ~ 褐色 (10YR4/4) 埴壤土 粘性中~強 軟~堅 ローム粒混じる Ⅲ層と V 層が混じった人為的な堆積土 盛土 RM 層に比べ黒色が強く、色調の変化が大きい

RM 層: 暗褐色 (10YR3/4) ~ 黄褐色 (10YR5/8) 埴壤土 粘性中~強 軟~堅 V 層ローム主体の人為的な堆積土 大型住居の周堤 M 層に比べ黄色が強く、色は均質である

IV 層: 暗褐色 (10YR3/4) ~ 褐色 (10YR4/6) 埴壤土 粘性中~強 軟~堅

V 層: 黄褐色 (10YR5/6 ~ 5/8) 軽埴土 粘性中~強 堅 ローム層 低位部では 5 ~ 10 cm の凝灰岩・泥岩の亜角・亜円礫を含む

B 地区

C・D 地区に比べ遺物包含層であるⅢ層の色調が黄色みを帯びる (C・D 地区のⅣ層に類似) 一方、馬の背状の頂部では厚く堆積する。遺構はⅢ層中で検出される。

C・D 地区

高位部では大型堅穴住居に伴う V 層に類似した均質な RM 層がⅢ層中に厚く検出され、Ⅲ層を上下に分けている。また、大型住居の窪みにはⅡ層中に B-Tm・Ko-d が薄く挟まる。RM 層下位には大型住居より古い遺構が検出されている。

斜面部では高位部の RM 層とは異なり黒色土の比率が高いやや不均質な M 層が分布し、遺構はその上下から検出される。

低位部では斜面際の一部に M 層が確認できるが、大部分には分布せず、遺構はⅢ層中で検出される。V 層には凝灰岩・泥岩の角礫が混じり、住居の床面に露出する。

(3) 土層

調査区は海岸段丘上に立地し、北東から南西に流れる沢によって A、B、C・D 地区に分けている。ここでは遺物包含層の残りの良くない A 地区を除いて B・C・D 地区の土層を概観する。

B 地区

両側に沢が迫る馬の背状の地形で、土層の記録はそれを横切るように北側の R ラインに設定した。

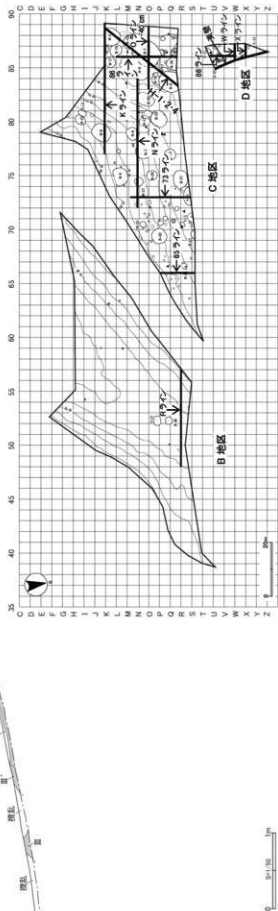
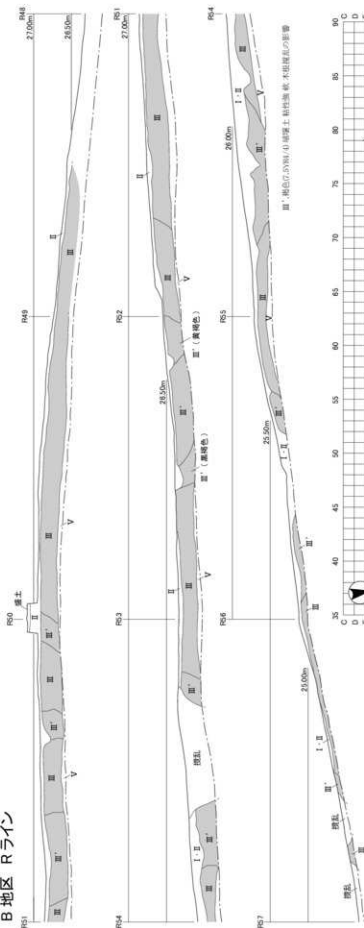
R ライン (図 III-5、図版 5-1・2)

遺物包含層であるⅢ層は C 地区より色調が黄色みを帯びる。頂部付近の R48 ~ R55 区はⅢ層が 20 cm ほどの厚さで安定的に堆積するが、傾斜の強くなる R55 ~ R57 区は薄くなっている。

C 地区

地形は西側が高く (高位部)、南東部に向かってすり鉢状に斜面部が広がり (斜面部)、平坦に近い緩斜面 (低位部) につながる。土層の記録は、高位部から低位部にかけての東西方向に K・N・O-40 cm ライン、斜面部の南北方向に 65・73 ライン、高位部の南北方向に 86 ライン、高位部大型住居 H-1・2・4 を通るラインに設定した。

B地区 Rライン



図III-5 土層断面図 (1)

Kライン (図III-6、図版16-1・2)

K85～89は高位部で、H-2の周堤(RM層)がK86～87にはH-10の上に最大30cm、K89側には約15cm堆積している。K80～85は斜面部で、K82より下位にはM層が最大20cm堆積し、K80以下の低位部に連続している。特にH-8内の斜面上側には50cmものM層が厚く流れ込んでいます。

N・0-40cmライン (図III-7・8、図版17-1・2、18-1、21-3、22-1～3)

0-40cmラインは高位部で、H-1の東西には周堤(RM層)が東側で60cm、西側で30cmと厚く堆積する。4m南側のNラインは斜面部から低位部に相当し、N83～81ではやや平坦で、N81～79は斜面、N79～72は概ね平坦である。M層はN82周辺からN79まで認められ、特にN79～81は厚く、最大40cmである。

65ライン (図III-8、図版18-2)

斜面部に相当し、厚さ30cmと安定的に堆積するが、Rライン付近では薄くなる。

73ライン (図III-8、図版18-3・4)

調査区南側の平坦面の端部から斜面部に相当する。M層は斜面上部のR～Qにかけて10～15cm堆積し、その下位には見られないがQ-P間はⅢ層もないため、削平されている可能性がある。低位部のNライン周辺にはⅢ～V層にかけて段丘堆積物とみられる礫が含まれる。

86ライン (図III-9、図版22-4・5)

高位部を縦断するラインである。H-1の両側には周堤(RM層)が堆積し、特にM86付近は60cmと厚い。

H-1・2・4ライン (図III-10、図版23-1～5、24-1・2、28-5)

H-1・2、H-1・4の間に周堤(RM層)が堆積し、H-1・4間は60cmと厚い。遺構間は両者の周堤が重複していると考えられるが、両遺構間とも木根の擾乱があり、また、RM層が均質で分層できないことからそれぞれの周堤の上下(前後)関係は不明である。

D地区

地形はC地区高位部から連続し、西側のボンクレ川に向かって傾斜している。土層の記録はC地区と同ラインの86ライン、調査区北側にある大型住居(H-39)の周堤の堆積が観察できる東壁、斜面部の東西方向のW・Xラインに設定した。

86ライン (図III-9、図版149-1・2)

南側のU86周辺にはC・D地区間にあるH-3の周堤(RM層)が35cm、その上に別の周堤(RM層)が20cmの厚さで堆積する。V86の北側にはH-39の周堤(RM層)が最大50cm堆積し、W86以北に続いている。

東壁 (図III-11、図版147-6・148-1)

東側の調査区外にある大型住居H-39の周堤(RM層)が広い範囲で確認できる。厚さはH-39の窪みに最も近いW～Vが50cmで、その南北は20cmほどである。H-40は周堤を切っており、H-39の後に掘り込まれている。

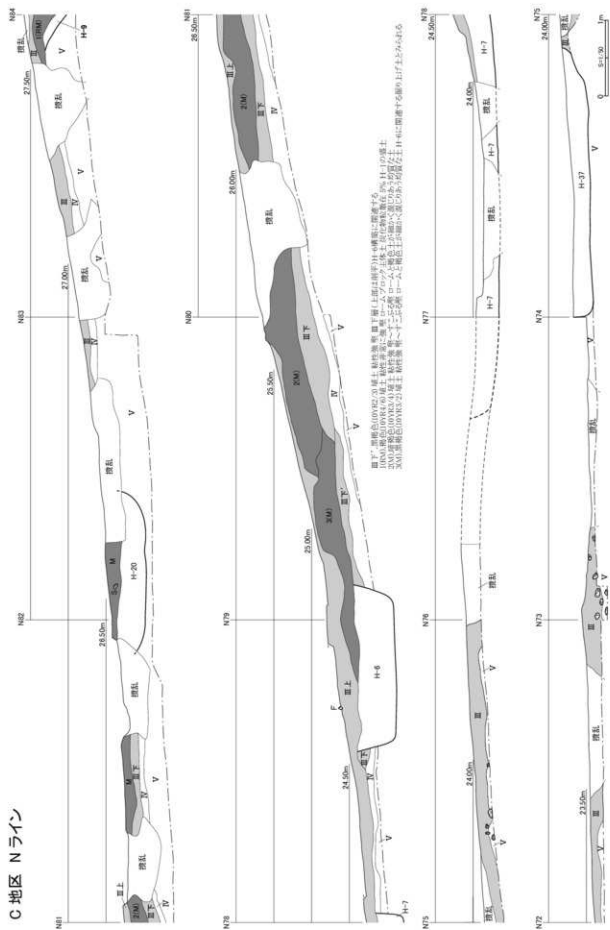
Wライン (図III-11、図版149-3・4)

高位部からボンクレ川に向かって傾斜している。H-39の周堤(RM層)が最大35cm堆積するが、W87の東側で途切れている。

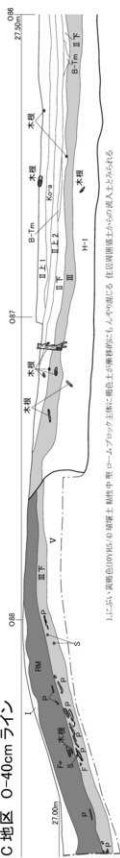
Xライン (図III-11、図版149-5・6)

H-39の周堤(RM層)は西側斜面には続かず、高位部平坦面で途切れている。西側にはH-44がある。

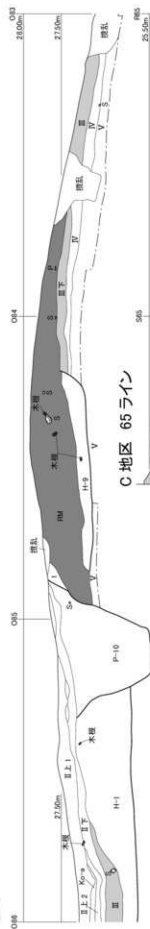
(鈴木)



C 地区 0-40cm ライン



1) 土は、黄褐色の粘土質土で、主として、黄褐色の粘土質土で構成されている。



C 地区 65 ライン

C 地区 73 ライン

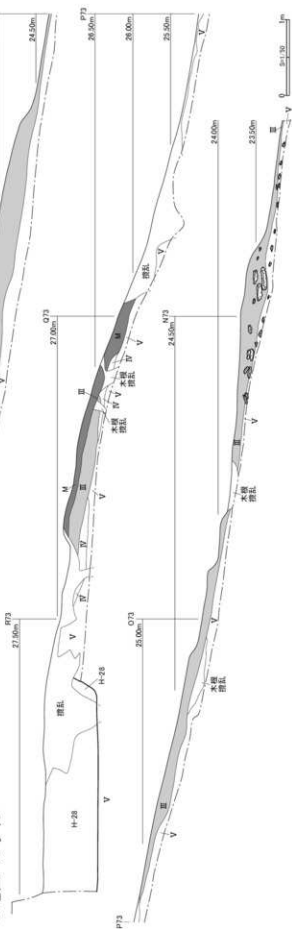
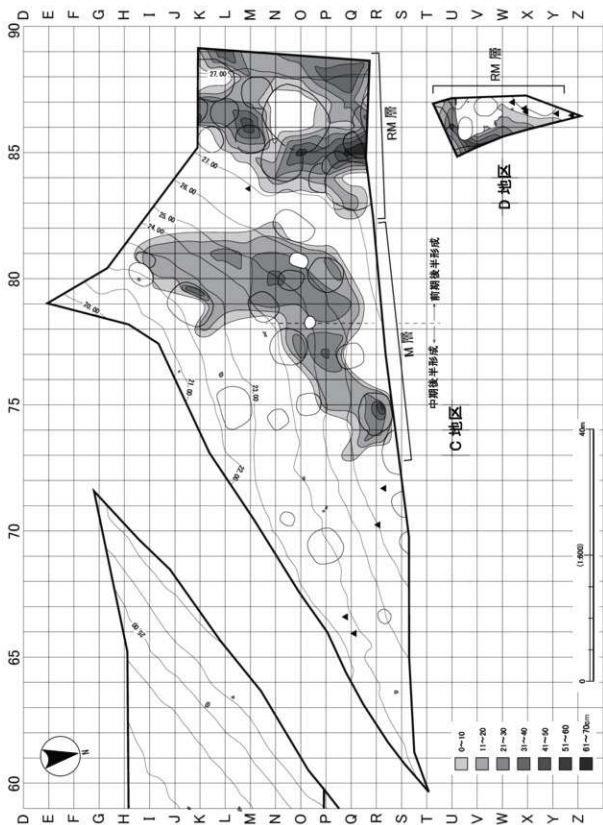
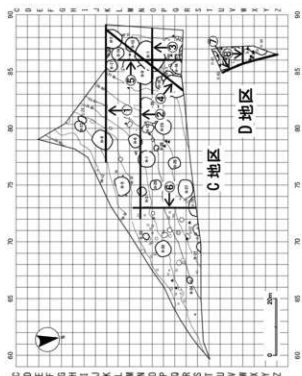
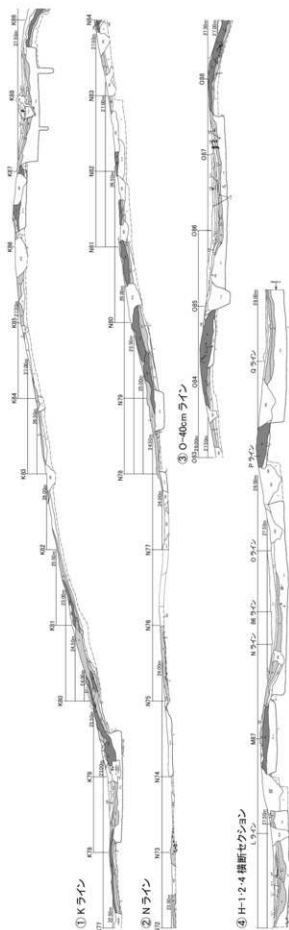


図 III-8 土層断面図 (4)



図Ⅲ-12 M(盛土)・RM層(周堤)分布図



图Ⅲ-13 広域土層断面図

IV A地区の遺構・遺物

1 概要

A地区は中央を北東から南西へ沢が横断しているが、全体的には東側の幸連3遺跡から続く比較的平坦な地形面に立地する。長く畑地として利用され、包含層の残りは悪く、ほとんどⅢ層は残存しなかった。遺構は土坑2基（P-15・16）、焼土1か所（F-6）、剥片集中1か所（FC-1）が検出された（図IV-1）。南東側の遺構確認調査範囲にある剥片集中1か所以外は北側中央に分布し、包含層の遺物もその周辺に集中している。（鈴木）

2 遺構

（1）土坑

土坑15（P-15）（図IV-2、図版3）

調査・特徴：Ⅲ層を除去後、Ⅴ層上面で円形の黒褐色土の広がりを確認し、半截して調査を行った。坑底に黒褐色土（覆土2）が厚く堆積し、上位の黒褐色土（覆土1）に続く。自然堆積とみられる。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

時期：周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。（直江）

土坑16（P-16）（図IV-2、表IV-2、図版3）

調査・特徴：Ⅲ層を除去後、Ⅴ層上面で円形の黒褐色～暗褐色土の広がりを確認し、半截して調査を行った。坑底に暗褐色土（覆土2）が厚くみられ、上位に黒褐色土（覆土1）が堆積する。自然堆積とみられる。坑底はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。遺物は時期不明土器2点が出土した。

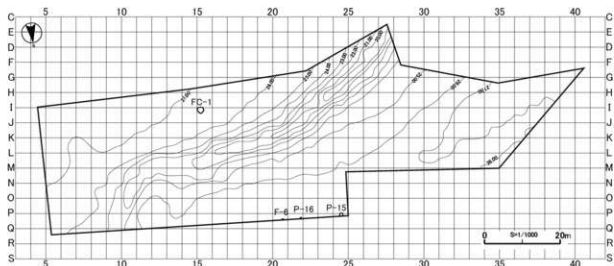
時期：周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。（直江）

（2）焼土

焼土6（F-6）（図IV-2、図版3）

調査・特徴：P20区のⅤ層上面で焼成の強い明赤褐色土の広がりを検出した。風倒木痕により大半が消失している。断面は推定で半紡錘形。遺物は出土していない。

時期：層位と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。（直江）



図IV-1 A地区遺構位置図

(3) 剥片集中

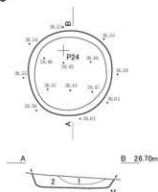
剥片集中1 (FC-1) (図IV-2、表IV-2)

調査・特徴：沢の南側のH14・I14区で、風倒木痕の落ち込みに絡んで検出された。4 cm以下の両面調整石器の調整剥片15点、礫3点、9 cmの砥石片1点が出土した。

時期：不明である。

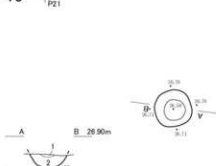
(谷島)

P-15



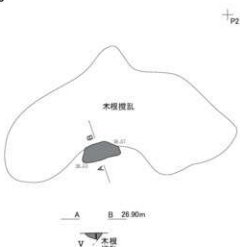
P-15
1.黒褐色(5YR2/3)珪質土 粘性弱 型 1mmのローム粒 1%
2.黒褐色(5YR2/3)珪質土 粘性中 型 2~3mmのローム粒 7%

P-16



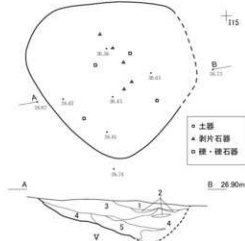
P-16
1.黒褐色(5YR2/3)珪土 粘性強 型 3mmのローム粒 5%
2.黒褐色(5YR3/3)珪土 粘性強 型 3mmのローム粒 5%

F-6



F-6
1.黒褐色(5YR5/3)珪土
粘性中 寸2.5mm 炭化物粒 2%

FC-1



FC-1
1.黒褐色(5YR3/3)シルト質珪土 粘性やや弱 軟
2.黒褐色(5YR4/4)シルト質珪土 粘性弱 軟 プロット状ロームに混じる
3.黒褐色(5YR2/2)シルト質珪土 粘性弱 軟
4.黒褐色(5YR5/6)シルト質珪土 粘性弱 軟 ロームに黒色土少量混じる
5.黒褐色(5YR3/3)シルト質珪土 粘性弱 軟 少量のローム粒を含む

図IV-2 土坑 P-15・16、焼土 F-6、剥片集中 FC-1

表IV-1 A地区遺構一覧

遺構名	位置 (坐標区)	構面図	検出面	平面形	検出面(m)		断面(m)		深さ(m)	長軸方向	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸				
P-15	C23・24, P23・24	圓形?	V層	円形	0.89	0.88	0.77	0.74	0.12	N-9°-E	縄文後前期前葉?	
P-16	P21	圓形?	V層	隅丸方形	0.38	0.38	0.21	0.22	0.14	N-6°-E	縄文後前期前葉?	
F-6	P20	圓形	II層	—	0.40	0.17	—	—	0.07	—	縄文後前期前葉?	
FC-1	I14	—	V層	—	1.72	1.67	—	—	—	—	不明	

表IV-2 A地区遺構出土遺物一覧

類別		土器		石器15点				総計	
遺構名	単位	不明	小計	剥片	砥石	礫	小計		
FC-1	Ⅱ			15	1	3	19		19
P-16	Ⅱ	2	2						2
総計		2	2	15	1	3	19		21

3 包含層出土遺物

(1) 概要 (図IV-3、表IV-3)

A地区の包含層からは土器79点、石器等91点、計170点が出土した。沢の北西側に位置し、遺構(P-15・16、F-6)の分布する周辺(N～P・20～22区)に小集中城があり、IV群a類土器や剥片などが出土している。それ以外ではわずかに出土したのみである。

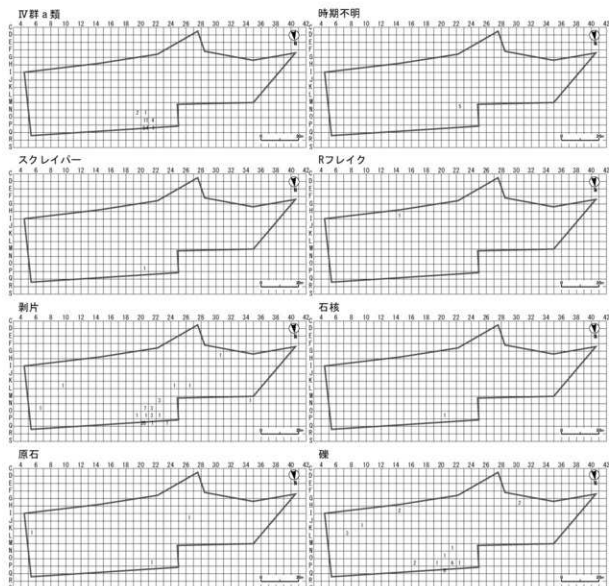
(2) 土器 (図IV-4-1～4、図版165)

IV群a類74点、時期不明5点が出土した。

1～4はIV群a類で、トリサキ式に相当する。すべて先の丸いやや幅広いの工具で横方向に沈線が施文される。1は胴上部に波頭文が描かれ、沈線間に条痕が見られる。1～3の頸部はくびれ、口縁部は外反する。1の胴上部は丸く膨らむ。3のみ細かいLR縄文が施され、下部は外傾接合面が残る。

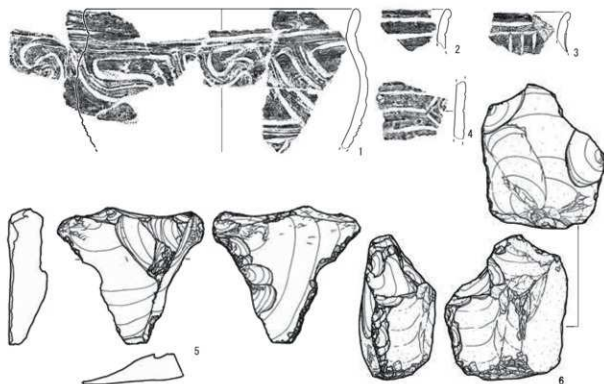
(3) 石器 (図IV-4-5・6、図版165)

スクレイパー1点、Rフレイク1点、剥片57点、石核1点、原石3点、礫28点が出土した。



図IV-3 A地区包含層出土遺物分布

5はスクレイパー。幅広い剥片が縦折れした三角形の素材で、2辺の腹面に加工が施される。6は石核。正面右側に原礫面、正面左・裏面に風化した古い剥離面があり、左側面と裏面に相対的に新しい剥離面が残る。長さ8cm程の風化面のある原石を持ち込んで少量の剥片剥離が行われている。(鈴木)



図IV-4 A地区包含層出土遺物

表IV-3 A地区包含層出土遺物一覧

種別	分類	石材	層位				総計
			I	II	III	層位	
土器	IV a				57	17	74
	不明				5		5
小計					62	17	79
石器ほか	剥片	貫岩	2	1	37	15	55
		砂岩			1		1
		泥岩			1		1
		スクレイパー			1		1
		石フレイク	1		1		1
		石核			1		1
		原石	1	1	1		3
		安山岩			1	3	4
		砂岩	1		1		2
		泥岩	4		10	4	18
		泥岩 2	3				3
小計			12	2	54	23	91
総計			12	2	116	40	170

表IV-4 A地区包含層出土掲載土器一覧

種別	図版	番号	遺構・発掘区	層位	遺物番号	点数	分類	器形・部位	備考
IV-4	165	1	F20	III	層位	7	IV a	口縁・胴部	
IV-4	165	2	F20	III	層位	1	IV a	口縁	
IV-4	165	3	F20	III	層位	1	IV a	口縁	
IV-4	165	4	F20	III	層位	1	IV a	胴部	

表IV-5 A地区包含層出土掲載石器一覧

種別	図版	番号	器種名	遺構・発掘区	層位	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
IV-4	165	5	スクレイパー	C20	層位	1	73	78	21	64.7	貫岩	
IV-4	165	6	石核	C20	層位	2	77	65	41	192.7	貫岩	

V B地区の遺構・遺物

1 概要

B地区は南北を沢で区切られた北東から南西に伸びる尾根状の地形である(図V-1)。遺構は竪穴住居跡2軒(H-35・36)、土坑1基(P-90)、焼土7か所(F-8~12・21・22)、礫集中1か所(SC-1)が検出された(表V-1)。竪穴住居跡は北側ほぼ中央の馬の背状地形の頂部に位置し、焼土は散漫な分布で、北側の竪穴住居跡周辺と南側の斜面部に偏る。遺構・遺物ともにC地区に比べ少ない。土層は包含層であるⅢ層がC地区と異なり腐植土が発達せず、褐色を呈する。(鈴木)

2 遺構

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡35(H-35)(図V-2・3、表V-2、図版5・6)

確認・調査: B地区中央の標高26.5m付近の馬の背状の地形の頂部に位置する。Ⅲ層を除去後、V層上面で暗褐色土の円形の広がりを確認した。土層観察用のベルトを設定して、調査を開始した。断面を確認したところ、褐色土を最下層とする床面と壁面を確認し、竪穴住居と判断した。

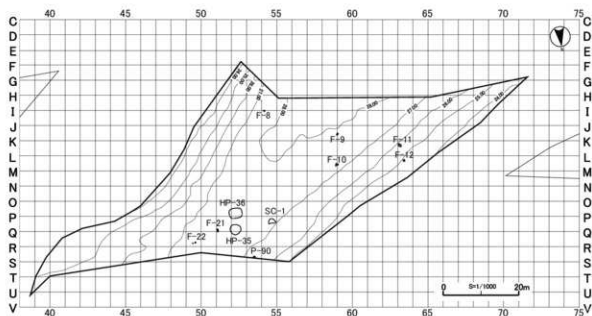
土層: 覆土は壁際から床面中央にかけて褐色土(覆土2)があり、その上位に中央部を中心として暗褐色土(覆土1)が堆積している。

床面・壁: 床面はほぼ平坦で、壁は全体的に若干開き気味だが、北側は緩やかに立ち上がる。

付属遺構: 付属遺構はHF-1のみである。HF-1は住居西部の床面から検出した。不整な円形を呈する地床炉である。

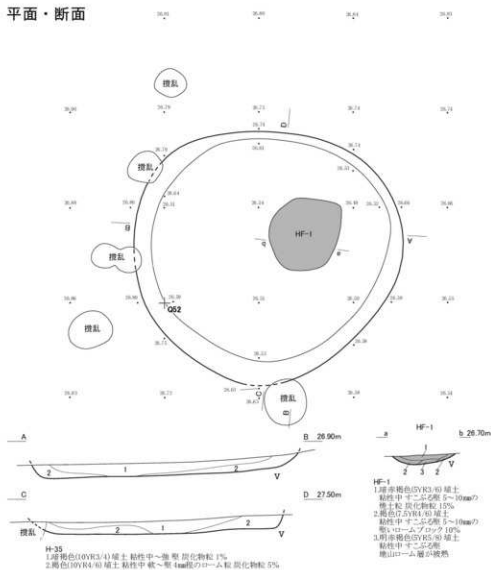
遺物出土状況: 出土遺物の総数は109点で、土器等が25点、石器等が84点である。土器等はⅣ群A類23点、焼成粘土塊2点、石器等はRフレイク1点、剥片61点、石核2点、たたき石1点、原石1点、礫18点が出土した。遺物は石器類を主体として西側のHF-1周辺に偏在している。

時期: HF-1の炭化物は $3,790 \pm 30\text{yrBP}$ (K04-D38)の年代値が得られている。この年代値と床面出土



図V-1 B地区遺構位置図

H-35 平面・断面



遺物分布

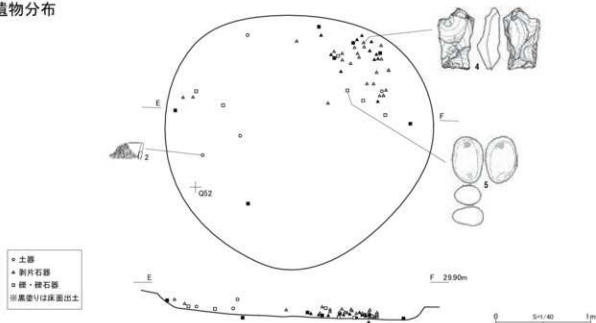
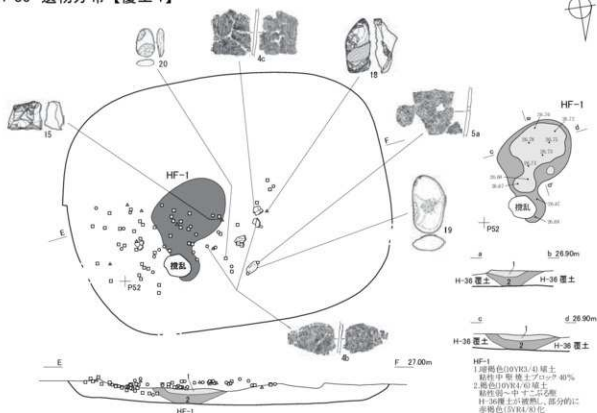
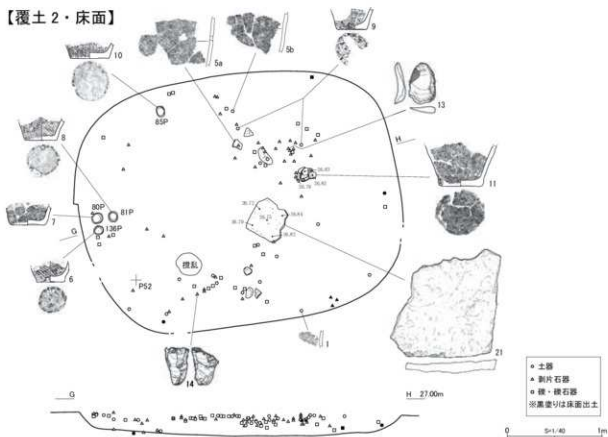


図 V-2 竪穴住居跡 (I) H-35 (1)

H-36 遺物分布【覆土1】



【覆土2・床面】



図V-5 竪穴住居跡(4) H-36(2)

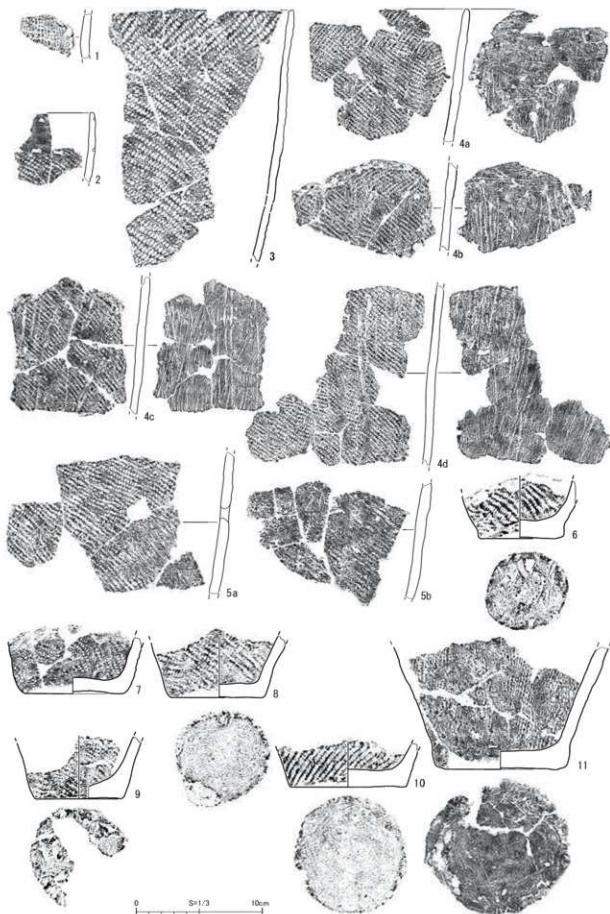
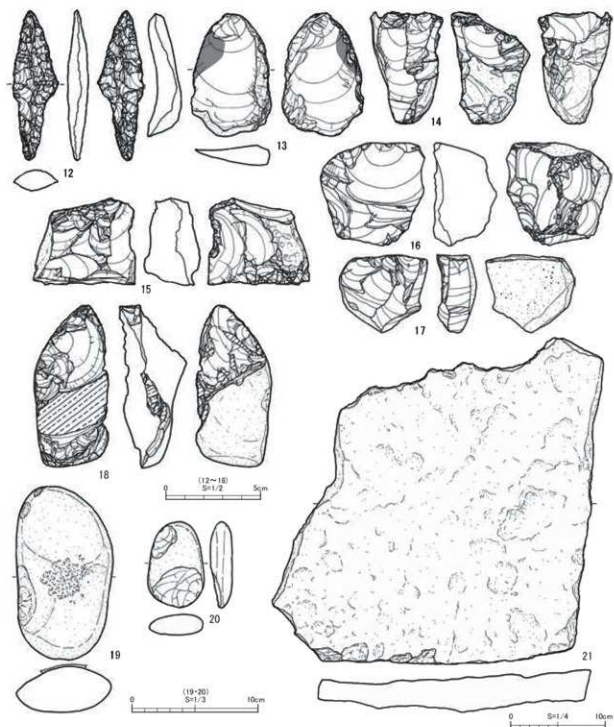


図 V-6 竪穴住居跡 (5) H-36 (3)



図V-7 竪穴住居跡 (6) H-36(4)

付属遺構：付属遺構はHF-1・2である。HF-2は住居中央やや北側の床面直上から検出した。楕円形を呈する石組み炉である。石組みは円礫で構成され、北西側が欠落している。HF-1は覆土1層下部から検出された地床炉である。住居の床面まで被熱が及んでいる。

遺物出土状況：出土遺物の総数は384点で、土器等が197点、石器等が187点である。土器等はⅡ群b類1点、Ⅳ群a類195点、不明1点、石器等は石槍1点、スクレイパー1点、Rフレイク3点、剥片88点、石核5点、たたき石1点、台石2点、加工痕のある礫1点、礫85点が出土した。

覆土2層には底部を中心とする土器が正位ないし逆位の状態で5個体(6・8・10・11)出土した。

特に東側の壁際に 3 個体 (6 ~ 8) まとまっていた。また、同層では板状の台石 (21) が HF-2 に斜めに突き刺さり蓋をするような状態で出土した。

時期: 床面直上にある HF-2 の炭化物は 3,800 ± 20yrBP (K04-D39) の年代値が得られている。この年代値と床面出土遺物から住居の帰属時期は縄文時代後期前葉と考えられる。また、埋没過程で形成された HF-1 を中心とする遺物のまともりも周辺の同層序の遺物から縄文時代後期前葉のものと思われる。(直江)

掲載出土遺物: (図 V-6-1 ~ 図 V-7-21、図版 165・166)

土器: 1 は II 群 a 類の胴部片で、単軸絡条体 1 類が縦位に施される。円筒下層 c ~ dI 式である。2 ~ 11 は IV 群 a 類である。2 は口縁部無文帯の上下に刺突列がめぐる。3 は口縁部がわずかにキリパー状に膨らみ、LR 縄文が口縁部には横方向、胴部には縦方向に回転方向を変えて施文される。4a ~ d は同一個体で、3 同様に縄文が施される。胴部は部分的に縄文間に縦の無文帯がある。内面は口縁部付近には横方向、胴部には縦方向の先端がささくれた工具による線状の調整痕が残る。5a・b は胴部片で、内外面の施文が 4 に類似する。5a の補修孔は主に正面からのすり鉢状で直径 1 cm と大きい。6 ~ 11 は底部片。ほぼ平底で、直角から斜めに立ち上がる。6 ~ 9 は LR 縄文を縦回転、10 は横回転、11 は単軸絡条体 1 類の縦回転施文である。胴部がやや膨らみ直線的に立ち上がる器形で、接合面の観察できるものは外傾接合である。

石器: 12 は石槍で、先端部と茎部の軸がずれている。13 はスクレイパー IV 類で、加工のある左側縁の両面に光沢がある。14 ~ 18 は石核で、14 は II b 類、15・16 は V 類、17・18 は VI 類である。原礫面の残存状況からいずれも 10 cm 以下の小型の転礫素材で、主に 5 cm 前後の剥片が剥離されたと推定される。19 はたたき石 II a 類で、正面中央に敲打痕がある。20 は加工痕のある礫で、正面左上・右下に敲打による剥離面が残る。21 は扁平な四角形の礫で、敲打痕や擦痕は確認できないが、その形状から台石とした。正面は風化した面で凹凸があり、裏面は剥離面のようで風化がみられない。(鈴木)

(2) 土坑

土坑 90 (P-90) (図 V-8、表 V-2、図版 8)

調査・特徴: III 層を除去後、V 層上面で半楕円形の暗褐色土の広がりを確認した。北側約 3 分の 1 は調査区外に続いている。半截して調査を行った。覆土は暗褐色土(覆土 I)のみで埋め戻しとみられる。坑底は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。遺物は礫 3 点が出土した。

時期: 周辺の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(直江)

(3) 焼土

焼土 8 (F-8) (図 V-8)

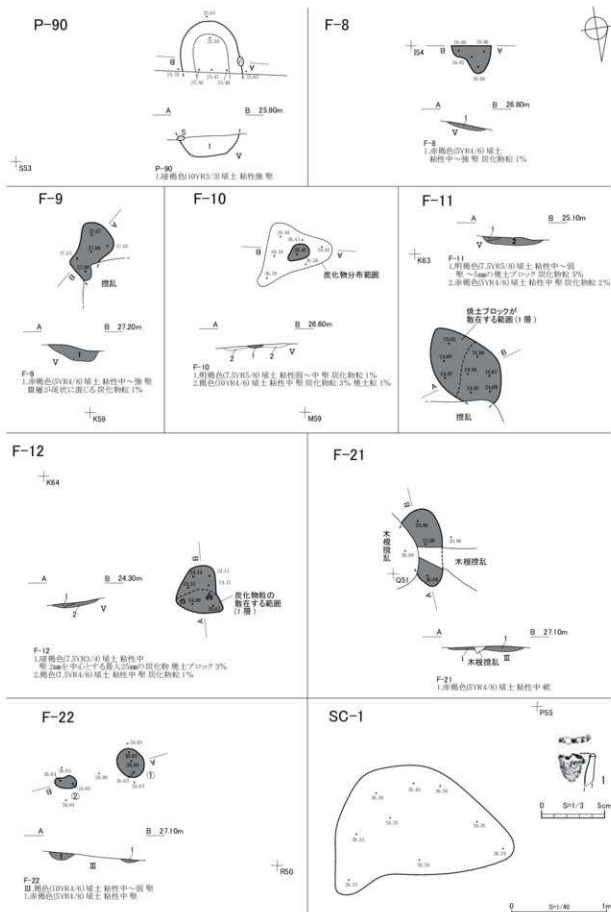
調査・特徴: I54 区の V 層上面で赤褐色土の広がりを検出した。南側の H54 区にも続いて広がるとみられるが確認できていない。平面形は推定で不整な楕円形、断面は半紡錐形。炭化物粒を少量含む。

時期: 層位と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。(直江)

焼土 9 (F-9) (図 V-8)

調査・特徴: J58・59 区の V 層上面で赤褐色土の広がりを検出した。北西側の一部が擾乱により消失している。平面形は不整な楕円形で、断面は比較的厚く片端が急斜度の半紡錐形。炭化物粒を少量含む、III 層が斑状に混入する。

時期: 層位と周辺の遺物から縄文時代中～後期の可能性がある。(直江)



図V-8 土坑 P-90、焼土 F-8～12・21・22、礫集中 SC-1

焼土 10 (F-10) (図 V-8、図版 8)

調査・特徴: L58・59 区の V 層上面で明褐色土の広がりを検出した。周囲の焼土粒を含む褐色土 (2 層) も含めて F-10 と認定した。平面形は角の丸い三角形、断面は半紡錘形。1・2 層とも炭化物粒を少量含む。

土壌のフローテーション選別の結果、アサダ? 果実 75 点、ウルシ属核 1 点、イネ科胚乳 1 点が検出された。ウルシ属核については種の同定を目的として詳細な分析を行ったがウルシに類似するものの同定するには至らなかった (Ⅷ章 4)。

時期: 炭化物から $3,680 \pm 20\text{yrBP}$ (K04-D45) の年代測定値が得られた。層位と周辺の遺物および年代測定結果から縄文時代後期前葉とみられる。 (直江)

焼土 11 (F-11) (図 V-8)

調査・特徴: K63 区の V 層上面で赤褐色土の広がりを検出した。南東側に広がる焼土粒を含む明褐色土 (1 層) も含めて F-11 と認定した。北西側の一部は攪乱により消失している。平面形は楕円形で、断面は半紡錘形。1・2 層とも炭化物粒を少量含む。

時期: 層位と周辺の遺物から縄文時代前～後期の可能性がある。 (直江)

焼土 12 (F-12) (図 V-8)

調査・特徴: K64 区の V 層上面で焼土ブロックを含む暗褐色土の広がりを検出した。南側の炭化物粒が散在する範囲 (2 層) も含め F-12 と認定した。平面形は不整な楕円形で、断面は半紡錘形。1 層には 25 mm 程度の炭化材も少量含まれている。別な地点で焼成された炭化材を含む土壌が本地点に廃棄された可能性がある。

時期: 層位と周辺の遺物から縄文時代前～後期の可能性がある。 (直江)

焼土 21 (F-21) (図 V-8、表 V-2)

調査・特徴: P・Q51 区の III 層を調査中に赤褐色土の広がりを検出した。一部が攪乱により消失している。平面形は不整な楕円形で、断面は半紡錘形。遺物は剥片 1 点が出土した。

時期: 層位と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。 (直江)

焼土 22 (F-22) (図 V-8)

調査・特徴: Q49 区の III 層を調査中に赤褐色土の広がりを 2 か所検出した。平面形は①が楕円形、②が不整な楕円形で、断面は両者とも半紡錘形。

時期: 層位と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。 (直江)

(4) 礫集中

礫集中 1 (SC-1) (図 V-8、表 V-2、図版 8)

調査・特徴: P54 区の V 層上面で礫のまとまりを検出した。集中域の最大長は 1.8m ほどあり、広範囲に散在している。3cm 前後の泥岩製の円礫が主体的である。遺物は IV 群 a 類土器 12 点、原石 2 点、礫 156 点が出土した。

時期: 層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。 (直江)

掲載出土遺物: (図 V-8、図版 166)

土器: 1 は IV 群 a 類土器で、無文の口縁部片である。口唇部には棒状工具の側面による刻みが施される。 (鈴木)

表V-1 B地区遺構一覧

遺構名	位置 (坐標区)	構面	構面	平面形	横断面(m)		底面(m)		深さ (m)	長軸方向	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸				
H-35	P52、Q52	Ⅱ層	V層	不整形	2.86	2.71	2.56	2.38	1.40	N-80°-E	縄文後期前葉	K04-D38
H-36	O51、Q52、P51・52	Ⅱ層	V層	隅丸長方形	3.42	2.60	2.97	2.15	0.22	N-80°-E	縄文後期前葉	K04-D39
P-90	R53	Ⅱ層	V層	小判形	0.55	0.62	(0.42)	0.37	0.22	N-60°-E	縄文後期前葉	
F-8	I54	Ⅱ層?	V層	—	0.42	(0.30)	—	—	0.04	—	縄文後期前葉?	
F-9	J58・59	Ⅱ層?	V層	—	0.56	0.38	—	—	0.11	—	縄文中～後期?	
F-10	L58・59	Ⅱ層?	V層	—	0.25	0.16	—	—	0.03	—	縄文後期前葉	K04-D45
F-11	R63	Ⅱ層?	V層	—	0.99	0.60	—	—	0.09	—	縄文前～後期?	
F-12	K64	Ⅱ層?	V層	—	0.51	0.51	—	—	0.05	—	縄文前～後期?	
F-21	P51、Q51	Ⅱ層下	Ⅲ層下	—	0.83	(0.36)	—	—	0.06	—	縄文後期前葉?	
F-22①	Q49	Ⅱ層下	Ⅲ層下	—	0.32	0.27	—	—	0.08	—	縄文後期前葉?	
F-22②				—	0.22	0.13	—	—	0.03	—		
SC-1	P54	Ⅱ層	V層	—	1.90	1.16	—	—	—	—	縄文後期前半?	

表V-2 B地区遺構出土遺物一覧

種別		土器類 土器					石器類 石器										小計	総計
	層位	Ⅱb	Ⅳa	不明	焼成粘土塊	小計	石槌	スタレイバー	Rフレイタ	剥片	石核	たたき石	台石	原石	加工痕のある礫	礫		
遺構名																		
H-35	覆土		19			19				26	1					8	35	
	覆土2		4			4				1	25	1	1		1	3	32	
	床面			2		2					10					7	17	
										1	61	2	1	1	1	18	84	
	H-35 集計		23		2	25				1	61	2	1	1	1	18	84	
H-36	覆土		24			24	1			29	2					5	37	
	覆土1		57	1		58				14	2	1			1	42	60	
	覆土2 層上	1	109			110		1	3	31	1			2		27	65	
	覆土2 層下		1			1				7						6	13	
	床面		3			3				4						2	6	
	埋戻		1			1				2						3	5	
H-36 1F-1	覆土								1							1	1	
H-36 集計		1	195	1		197	1	1	3	88	5	1	2		1	85	187	
P-90	覆土																1	
	覆土1															2	2	
	P-90 集計															3	3	
F-21	覆土									1							1	
SC-1	面		12			12								2		156	158	
総計		1	230	1	2	234	1	1	4	150	7	2	2	3	1	262	433	
																	170	

表V-3 B地区遺構出土掲載土器一覧

標記	図面番号	遺構・ 坐標区	層位	遺物 番号	点数	分類	器形・部位	備考
V-3	165	1	H-35 P-58	Ⅱ層上 Ⅱ層上	9 17	Ⅳa	口縁～胴部	V-208-92と 同一
V-3	165	2	H-35	Ⅱ層上2	1	Ⅳa	口縁	
V-3	165	3	H-35	Ⅱ層上	1	Ⅳa	胴部	
V-6	165	1	H-36	Ⅱ層上2	122	Ⅱb	胴部	
V-6	165	2	H-36	Ⅱ層上1	45	Ⅳa	口縁	
V-6	165	3	H-36	Ⅱ層上2	152	1	Ⅱb	胴部
V-6	165	3	H-36	Ⅱ層上1	42	5	Ⅳa	口縁～胴部
V-6	165	4a	H-36	Ⅱ層上1	6	6	Ⅳa	口縁
V-6	165	4b	H-36	Ⅱ層上1	2	1	Ⅳa	口縁
V-6	165	4c	H-36	Ⅱ層上1	59	1	Ⅳa	胴部
V-6	165	4d	H-36	Ⅱ層上1	79	2	Ⅳa	胴部
V-6	165	5a	H-36	Ⅱ層上1	66	1	Ⅳa	胴部
V-6	165	5b	H-36	Ⅱ層上2	93	3	Ⅳa	胴部
V-6	165	6	H-36	Ⅱ層上2	154	1	Ⅳa	底面
V-6	165	7	H-36	Ⅱ層上2	80	19	Ⅳa	底面
V-6	165	8	H-36	Ⅱ層上2	90	3	Ⅳa	底面
V-6	166	9	H-36	Ⅱ層上2	83	1	Ⅳa	底面
V-6	166	10	H-36	Ⅱ層上2	90	3	Ⅳa	底面
V-6	166	11	H-36	Ⅱ層上2	105	2	Ⅳa	底面
V-6	166	12	H-36	Ⅱ層上2	85	4	Ⅳa	底面
V-6	166	13	H-36	Ⅱ層上2	136	19	Ⅳa	胴部～底面
V-6	166	14	SC-1	Ⅱ層	1	1	Ⅳa	口縁

表 V-4 B 地区遺構出土掘載石器一覧

種別	図版	番号	器種名	遺構・発掘区	層位	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
V-3	165	4	石槌	11-35	層土 2	22	97	57	36	134.8	頁岩	
V-3	165	5	たたき石	11-35	層土 2	11	110	73	49	532.9	砂岩	
V-7	166	12	石槍	11-36	層土	185	79	24	11	14.9	頁岩	
V-7	166	13	スクレイパー	11-36	層土 2 層上	108	65	43	18	35.9	頁岩	元沢あり
V-7	166	14	石槌	11-36	層土 2 層上	132	59	38	41	14.2	頁岩	
V-7	166	15	石槌	11-36	層土 1	62	46	54	29	72.7	頁岩	
V-7	166	16	石槌	11-36	層土	187	54	55	33	87.6	頁岩	
V-7	166	17	石槌	11-36	層土	186	41	47	21	42.3	頁岩	
V-7	166	18	石槌	11-36	層土 1	73	46	40	36	94.2	頁岩	
V-7	166	19	たたき石	11-36	層土 1	65	136	76	37	419.6	頁岩	
V-7	166	20	加工痕のある礎	11-36	層土 1	56	68	44	17	67.3	砂岩	
V-7	166	21	台石	11-36	層土 2 層上	149	345	349	37	4,890.0	安山岩	

3 包含層出土遺物

(1) 概要 (図 V-9 ~ 11、表 V-6)

B 地区の包含層からは土器等 681 点、石器等 1,157 点、計 1,838 点が出土した。遺物は尾根上の地形の頂部に多く、Ⅲ群 a 類は M ライン以南、Ⅳ群 a 類は M ライン以北、特に H-35・36 周辺の M ~ Q51 ~ 54 区周辺を中心に分布する。その他、Ⅱ群 b 類、Ⅳ群 c 類は局所的に点在し、Ⅳ群 b 類の深鉢 1 個体が潰れた状態で J59 区から出土している (図 V-12)。石器類は土器の集中域と重複するが、石鏃・石槍・両面調整石器・U フレイク・扁平打製石器・たたき石は M ライン以北、つまみ付きナイフ・スクレイパー・石錐・北海道式石冠は M ライン以南、剥片・石核・石斧・礫は両者に分布する。

(2) 土器

Ⅱ群 b 類 4 点、Ⅲ群 a 類 25 点、Ⅳ群 a 類 559 点、Ⅳ群 c 類 88 点、時期不明 2 点、焼成粘土塊 3 点が出土した。

Ⅲ群 a 類 (図 V-13-1・2、図版 166)

1 の口唇部には縄の側面圧痕が加えられる。2 は円筒上層 a2 式。口縁部文様帯下部の横位の貼付には R の縄の側面圧痕が、縦位の Y 字状貼付と口縁部無文帯には縦横に 3 本 1 組の縄線が施される。地文は結束第 1 種羽状縄文である。

Ⅳ群 a 類 (図 V-13-3 ~ 24、図版 166・167)

3 ~ 5 は口縁部に無文帯があり、3・4・7 の口縁部は折り返し状で肥厚し、口唇部は角形である。5 の口唇部には LR 縄文が、6 は口縁部の上下に横位の縄線文が施される。4・6 ~ 12 の縄文は原体を縦に回転させて施文するが、4・6・7 の口縁部は胴部と同一原体を横方向に回転させて、羽状に表現している。10・11 は小型土器で、口縁部が丸く内湾する。13 ~ 15 は沈線のあるもので 13 は単軸絡条体 1 類、14 は無文、15 は斜行縄文が施文される。16 は曲線的な貼付に沿って刺突が加えられる。17 は単軸絡条体 1 類、18 は縦の綾絡文が施される。19 は上部に焼成前の切断痕がある切断壺形土器で、青森県での大木 10 式併行期に相当する。20 ~ 25 は底部。20 は結束第 1 種羽状縄文が縦方向に回転される。21 は上部に横位の低い貼付がある。22 は上げ底、23 は中央が凹状で、指頭圧痕がある。24 は底面に網代痕がある。底部は全体に平坦な板状で胴部にかけて斜めに立ち上がり、縄文は縦回転が多数で、底面まで及ぶ傾向がある。

Ⅳ群 c 類 (図 V-13-25 ~ 32、図版 167)

26 は小型の深鉢で、胴部はくびれ、口縁部が軽く内湾して斜めに立ち上がる。口縁部には 3 個 1 組の小突起が 4 単位あり、口縁部・頸部には 4 ~ 5 本、底部付近に 1 本の沈線が巡り、口縁部・胴部にはそれぞれ 4 単位・3 単位の帯状文による入り組み文が配置される。帯状文は沈線で縁取られ、中

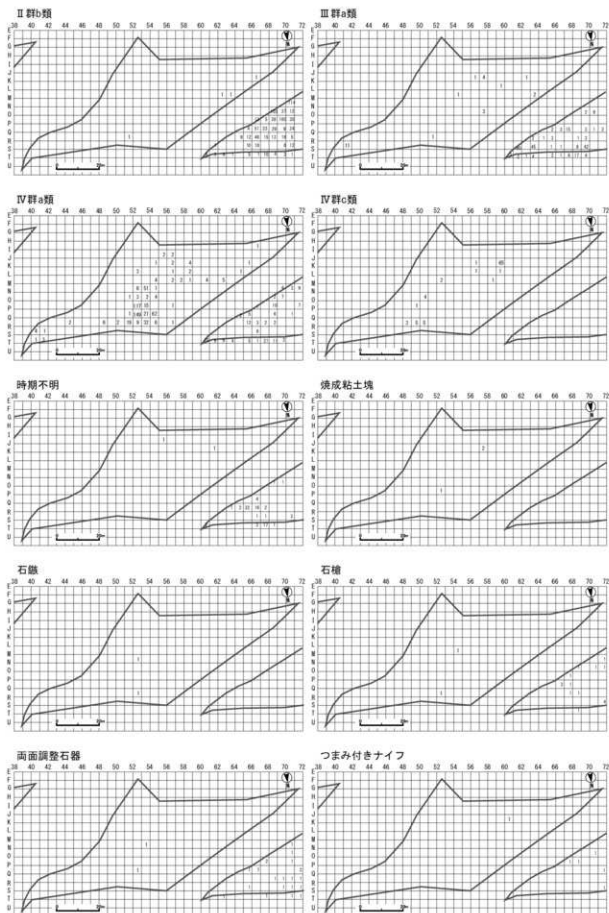


図 V-9 B地区包含層出土遺物分布(1)

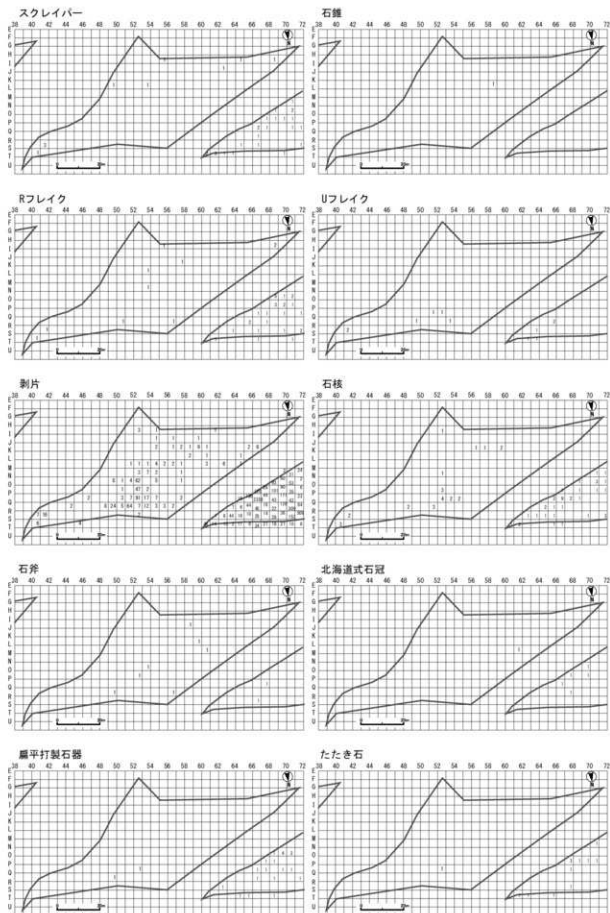


図 V -10 B 地区包含層出土遺物分布 (2)

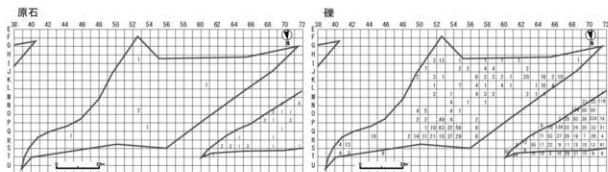


図 V-11 B 地区包含層出土遺物分布 (3)

包含層個体土器 J59

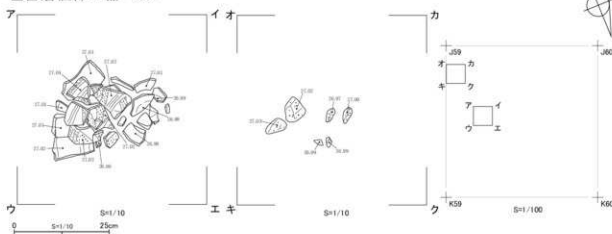


図 V-12 J59 区個体土器出土状況

は撚りの異なる羽状縄文が充填される。27～29は口縁部で、27・28は切り出し形、29は内側が肥厚する。27の口縁部突起内面、28の口唇部内面には刻みがあり、沈線で区画された口縁部文様帯や胎土の類似から同一個体の可能性がある。また、出土地点に近い台部25と同一で台付き鉢の可能性もある。29～31は沈線文のある破片で、30は浅鉢の底部片、31は胴部片。32は地文のみの破片である。27を除いて撚りの異なる縄文により羽状に表現される。

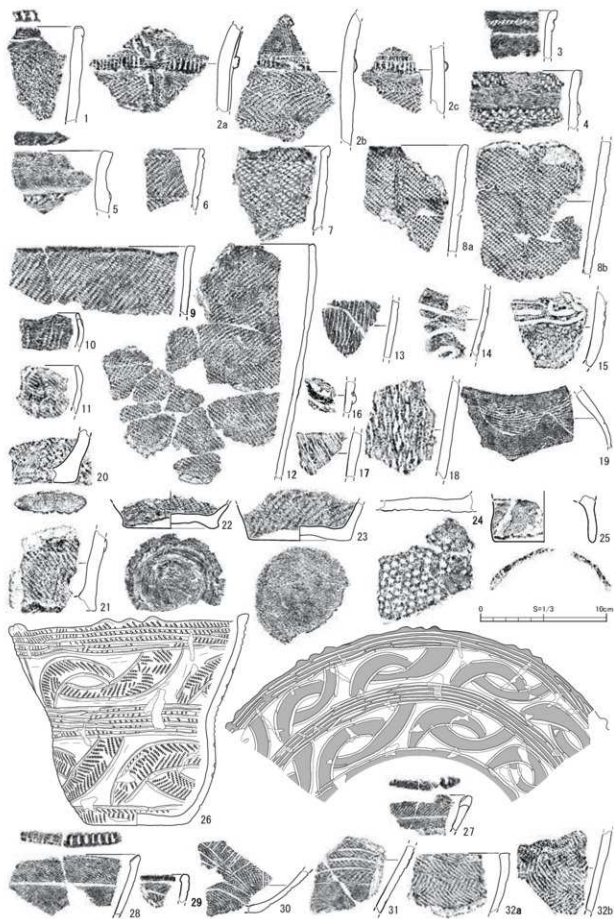


図 V-13 B 地区包含層出土土器

(3) 石器

石鏃 2 点、石槍 2 点、両面調整石器 2 点、つまみ付きナイフ 1 点、スクレイパー 10 点、石錐 1 点、R フレイク 10 点、U フレイク 6 点、剥片 496 点、石核 27 点、石斧 7 点、北海道式石冠 1 点、扁平打製石器 2 点、たたき石 1 点、原石 6 点、礫 583 点が出土した。

石鏃 (図 V-14-1・2、図版 167)

2 点出土し、全て頁岩製である。2 点を図示した。1 は II a 類、2 は II b 類で反りのある薄い剥片素材。

石槍 (図 V-14-3、図版 167)

2 点出土し、全て頁岩製である。1 点を図示した。3 は頸部が長い。

つまみ付きナイフ (図 V-14-4、図版 167)

1 点出土し、頁岩製である。1 点を図示した。4 は薄く先端部に反りのある剥片素材で、縁辺部のみ加工がある。

スクレイパー (図 V-14-5・6、図版 167)

10 点出土し、全て頁岩製である。2 点を図示した。5・6 はどちらも I a 類で、左側縁に光沢がある。光沢のある左側縁は正面側に加工があり、右側縁は 5 には軽微な、6 は腹面に粗い加工が施される。

U フレイク (図 V-14-7、図版 167)

6 点出土し、全て頁岩製である。1 点を図示した。7 は寸詰まりの剥片素材で、素材末端側の直線的な一辺に微細剥離痕と光沢が残る。

石核 (図 V-14-8 ~ 図 V-15-12、図版 167)

27 点出土し、頁岩製 25 点、泥岩製 2 点である。5 点を図示した。8 は II a 類、9・10 は V 類、11・12 は VI 類である。10 ~ 12 は長さ 10 ~ 15 cm、厚さ 5 cm 以下の盤状の角礫素材で、表裏の平坦面を中心に幅広の剥片が剥離され、10 は小口面でも剥離が行われる。

北海道式石冠 (図 V-15-13、図版 167)

1 点出土し、砂岩製である。1 点を図示した。13 は全面敲打で成形され、両面に使用に伴うとみられる下面からの剥離面が残る。左側面が欠損するが、下面にはその面を切る敲打痕があり、欠損後も使用されたと考えられる。

扁平打製石器 (図 V-15-14、図版 167)

2 点出土し、安山岩製 1 点、砂岩製 1 点である。1 点を図示した。14 は長方形の平面形、上部に最大厚があり、下部が尖る素材で、直線的な下縁が潰れ、その両面には刃こぼれ状の不整な剥離面が残る。左側縁にも同様の痕跡がある。

(鈴木)

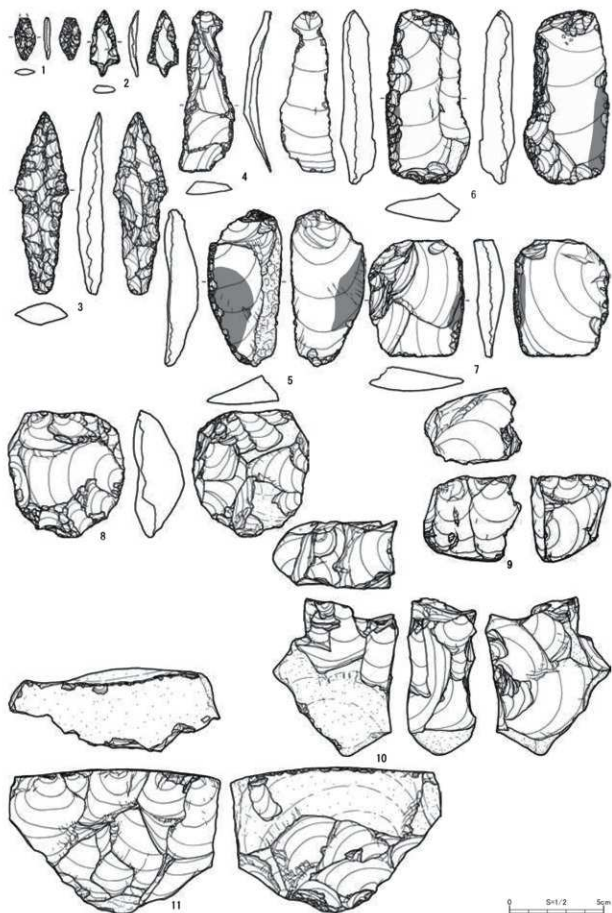
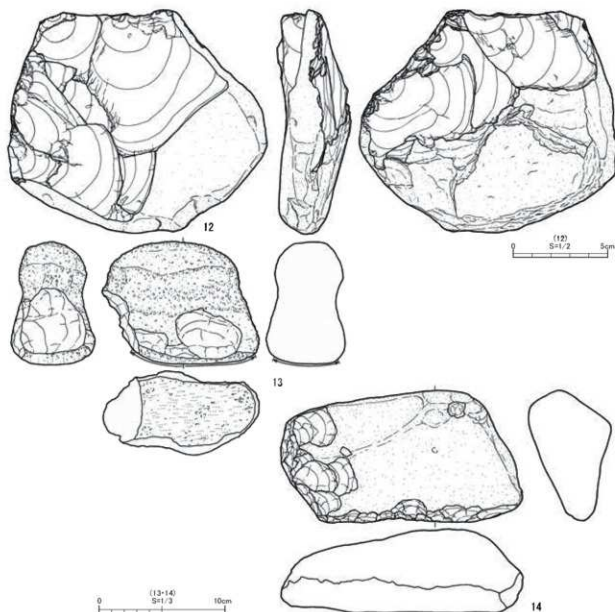


图 V-14 B 地区包含層出土石器 (1)



図V-15 B地区包含層出土石器(2)

表V-5 B地区包含層出土掲載石器一覧

棟号	図版	番号	器種名	遺構・ 発掘区	層位	遺物 番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
V-14	167	1	石鏃	Q52	Ⅲ	1	22	11	3	0.7	頁岩	
V-14	167	2	石鏃	M52	Ⅲ	1	35	15	5	1.9	頁岩	
V-14	167	3	石槍	Q52	Ⅲ	2	96	28	14	27.1	頁岩	
V-14	167	4	つばみ付きナイフ	J60	Ⅲ	1	85	29	15	13.5	頁岩	
V-14	167	5	スクリンバー	S40	Ⅲ	1	83	39	18	46.4	頁岩	光沢あり
V-14	167	6	スクリンバー	R41	Ⅲ	3	92	44	19	67.7	頁岩	光沢あり
V-14	167	7	リフレイク	P52	Ⅲ	2	62	51	16	42.8	頁岩	光沢あり
V-14	167	8	石鏃	R41	Ⅲ	7	67	61	26	96.5	頁岩	
V-14	167	9	石鏃	Q51	Ⅲ	2	46	51	41	92.2	頁岩	
V-14	167	10	石鏃	S40	Ⅲ	3	83	66	36	161.3	頁岩	
V-14	167	11	石鏃	Q48	Ⅲ	1	(76)	112	(44)	(353.9)	頁岩	
V-15	167	12	石鏃	P52	Ⅲ	3	118	136	39	567.3	頁岩	
V-15	167	13	北海道式石鏃	L61	Ⅲ	1	97	123	67	980.0	砂岩	
V-15	167	14	扁平打製石器	P52	Ⅲ	7	104	191	66	1,400.2	砂岩	

表 V-6 B 地区包含層出土遺物一覧

種別	分類	石種	層位			総計
			Ⅲ	Ⅳ	後乱	
土器類①	Ⅲ b		4			4
	Ⅲ a		25			25
	Ⅳ a		582		7	589
	Ⅳ c		87	1		88
	不明		2			2
	變成粘土塊		3			3
小計			673	1	7	681
石器類①	石鏃	貫岩	2			2
	石鏃	貫岩	2			2
	両面調整石器	貫岩	2			2
	つまみ付きナイフ	貫岩	1			1
	スクレイパー	貫岩	10			10
	石鏃	貫岩	1			1
	Rフレイク	貫岩	10			10
	Uフレイク	貫岩	6			6
	剥片	貫岩	480	1	6	487
		安山岩	1			1
		砂岩	3			3
		花岩	3			3
		片岩	2			2
	石鏃	貫岩	25			25
		花岩	2			2
	石斧	片岩	1			1
		緑色岩	6			6
	北海道式石冠	砂岩	1			1
	扁平打製石器	安山岩	1			1
		砂岩	1			1
	たたく石	安山岩	1			1
	原石	貫岩	6			6
	礎	チャート	26			26
		めのう	2			2
		安山岩	103		1	104
		砂岩	64			64
		石英岩	5			5
		花岩	361		11	372
		花岩 2	10			10
小計			1,138	1	18	1,157
総計			1,811	2	25	1,838

表 V-7 B 地区包含層出土掲載土器一覧

神国	図版	番号	遺構・ 発掘区	層位	遺物 番号	点数	分類	器形・部位	備考
V-13	166	1	L63	Ⅲ	1	Ⅲ a	口縁		
V-13	166	2a	J56	Ⅲ	1	Ⅲ a	胴部		
V-13	166	2b	J57	Ⅲ	3	Ⅲ a	胴部		
V-13	166	2c	K39	Ⅲ	1	Ⅲ a	胴部		
V-13	166	3	Q14	Ⅲ	2	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	4	M53	Ⅲ	1	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	5	J56	Ⅲ	1	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	6	Q54	Ⅲ	1	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	7	R41	Ⅲ	1	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	8a	Q51	Ⅲ	2	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	8b	Q51	Ⅲ	6	Ⅳ a	胴部		
V-13	166	9	O52	Ⅲ	2	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	10	O52	Ⅲ	1	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	11	Q53	Ⅲ	1	Ⅳ a	口縁		
V-13	166	12	P52	Ⅲ	11	Ⅳ a	口縁～胴部		
V-13	166	13	O52	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	166	14	R52	Ⅲ	3	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	15	R64	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	16	Q51	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	17	Q54	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	18	R40	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	19	Q52	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	20	Q51	Ⅲ	1	Ⅳ a	胴部		
V-13	167	21	J54	Ⅲ	1	Ⅳ a	底部		
V-13	167	22	Q52	Ⅲ	1	Ⅳ a	底部		
V-13	167	23	Q54	Ⅲ	1	Ⅳ a	底部		
V-13	167	24	M53	Ⅲ	3	Ⅳ a	底部		
V-13	167	25	Q50	Ⅲ	4	Ⅳ c	底部		
V-13	167	26	J59	Ⅲ	64	Ⅳ c	口縁～底部		
大きさ：19.0 × 16.5 × 7.0cm									
V-13	167	27	Q49	Ⅲ	2	Ⅳ c	口縁		
V-13	167	28	Q49	Ⅲ	2	Ⅳ c	口縁		
V-13	167	29	N50	Ⅲ	1	Ⅳ c	口縁		
V-13	167	30	Q48	Ⅲ	3	Ⅳ c	胴部		
V-13	167	31	N50	Ⅲ	2	Ⅳ c	胴部		
V-13	167	32a	L52	Ⅳ	1	Ⅳ c	口縁		
V-13	167	32b	L52	Ⅳ	1	Ⅳ c	胴部		

VII D地区の遺構・遺物

1 概要

地形的にC地区の高位部の続きで、遺構・遺物の内容も類似する。C・D地区間にはH-3、地区の東にはH-39（本体は未調査）があり、その周堤（RM層）の裾部が地区内に分布し、その下位にはC地区同様、土器・石器の廃棄物が検出された。住居は直径4m程の小型のものから7mを超える大型のものがあり、土坑は中央に直径1～1.5m程のものが集中する（図VII-1）。

2 遺構

（1）堅穴住居跡

堅穴住居跡40（H-40）（図VII-2・3、表VII-2、図版150）

確認・調査：調査区西側の標高29.0m付近の高位部に位置する。RM層掘り下げ後、調査区南東隅で調査区外に続く黒色土の広がりを確認した。調査範囲の西側の輪郭にほぼ直交するように土層観察用のベルトを設定し、二分割して調査を行った。住居全体の縁辺のみの調査である。

土層：大きく上下に分けられ、上部は自然堆積層のⅠ～Ⅲ上層、下部は漸移層の黒褐色土（2層）、屋根土の崩落土である褐色土（3層）、三角堆積土の暗褐色土（4層）である。遺構の北東と南西には周堤のある大型住居であるH-39、H-3があり、周辺にはそれらのRM層が分布する。本遺構はそのRM層を掘り込んでいることから両住居より後に建てられたと考えられる。また、本住居に伴う周堤（RM層）は検出されなかった。

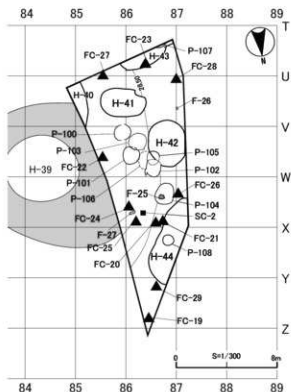
床面・壁：床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は判明している部分と時期などから胴の張る隅丸方形・長方形と推定される。

付属遺構：支柱穴2基（HP-1・2）、細い柱穴状ビット1基（HP-3）がある。HP-1は上部にV層類似土が詰められており、HP-1からHP-2に移設されたと考えられる。

遺物出土状況：出土遺物の総数は629点で、土器等が139点、石器等が491点である。土器等はⅡ群b類137点、Ⅲ群b類2点、石器等は石槍1点、スクレイパー3点、Rフレイク2点、剥片182点、石核6点、たたき石1点、礫296点が出土した。
時期：住居に関連する土器はないが、覆土中のほとんどがⅡ群b類であること、周堤のある大型住居より後に建てられていることから縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。

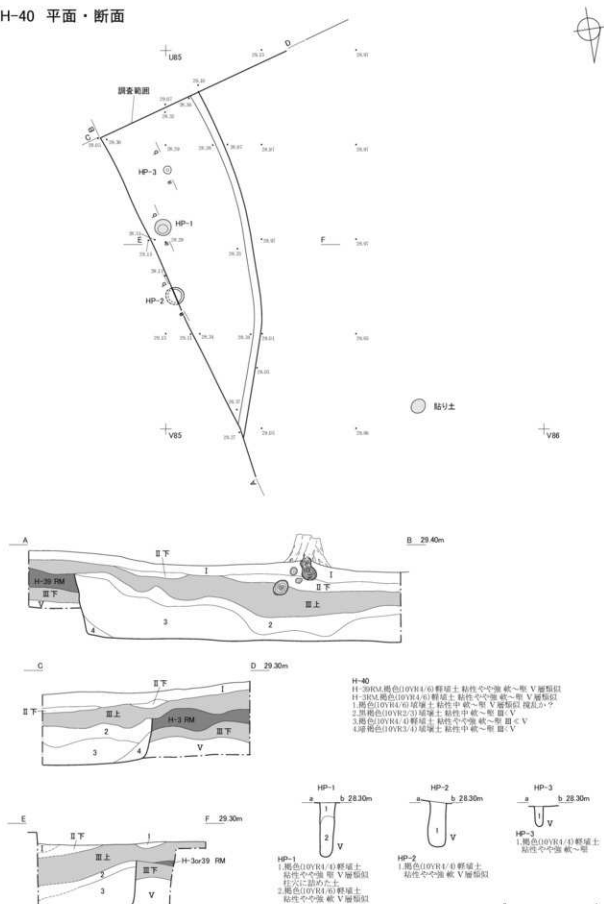
掲載出土遺物：（図VII-3-1～8、図版274）

土器：1～6はⅡ群b類。1は円筒下層b1～b2式。RLR横走縄文。2・3は円筒下層b2式。口縁部が沈線2本で区画され、沈線間には2は中空工具による刺突、3は刻みが加わる。3の口縁部には不

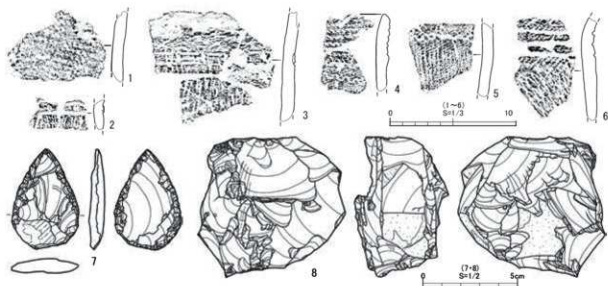


図VII-1 D地区遺構位置図

H-40 平面・断面



図Ⅶ-2 竪穴住居跡 (I) H-40 (I)



図Ⅶ-3 竪穴住居跡 (2) H-40 (2)

整紋絡文が施される。胴部は単軸絡条体1類。4・5は同一個体の可能性が高く、結束第2種羽状縄文で区画された口縁部に縄線文、胴部に単軸絡条体1類が施文される。円筒下層d1式。6は円筒下層c式。口縁部に縦回転のRL縄文、くびれた頸部に縄線3本、胴部に単軸絡条体6類が密に施される。石器:7は石槍。斜軸剥片の素材形状を活かして周縁加工によって涙滴形に整形される。8は石核V類。節理面が複数残る。(鈴木)

竪穴住居跡 41 (H-41) (図Ⅶ-4・5、表Ⅶ-2、図版 151)

確認・調査: D地区南側の標高28.5m付近の高位部に位置する。Ⅲ層を除去後、86ラインに設定した南北方向のメインセクション観察用のトレンチでⅢ層やRM層を切る落ち込みを検出した。断面を確認したところ、暗褐色土を最下層とする床面と壁面を確認し、竪穴住居と判断した。東西方向のベルトも設定し、周辺をRM層まで掘り下げ、黒褐色土の楕円形の範囲を確認し竪穴内の調査を開始した。
土層: 覆土は床面全体に暗褐色土(覆土3)が厚く堆積し、その上位に褐色土(覆土2)、黒褐色土(覆土1)と続く。覆土2は東側に部分的にみられ、覆土1は全体的に厚く堆積している。

床面・壁: 床面はほぼ平坦だが西側が若干低い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構: 付属遺構はHFC-1のみである。住居南東側の壁際、覆土3層上部から検出した。

遺物出土状況: 出土遺物の総数は5,294点で、土器等が264点、石器等が5,030点である。土器等はⅡ群b類260点、Ⅳ群a類4点、石器等は石礫2点、石槍2点、両面調整石器2点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー3点、石錐1点、Rフレイク2点、Uフレイク1点、剥片4,485点、石核6点、石斧1点、扁平打製石器1点、加工痕のある礫1点、礫522点が出土した。

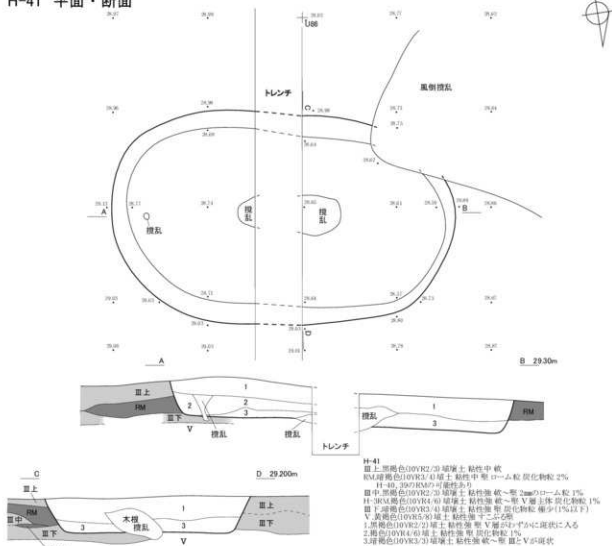
時期: 床面出土遺物、RM層より新しい状況から縄文時代前期後半円筒下層d1式期以降と考えられる。(直江)

掲載出土遺物: (図Ⅶ-5-1~8、図版 274)

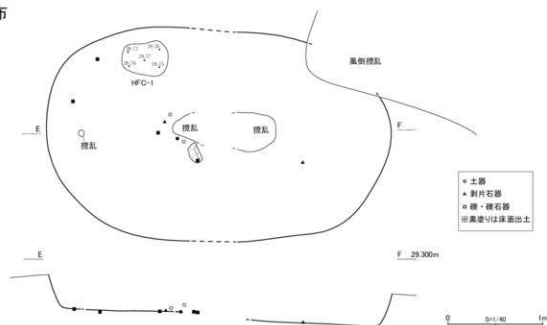
土器: 1~5はⅡ群b類。1は円筒下層b2式。横方向の貝殻条痕が見られる。2は円筒下層c~d1式。2本1組の縄線Rが2組横走する。3は円筒下層d1式。縄線が水平・斜め方向に施文される。4は円筒下層c式。2本1組の縄線Rが口縁部を区画する。5は円筒下層d1式。結束第2種羽状縄文と自縄自巻Lが施文される。

石器: 1は石礫1a類。加工は周縁のみである。7はつまみ付きナイフ。斜軸剥片素材で、両側縁に光沢があるが、長辺である左側縁の範囲が広い。8はスクレイパーVI類。(鈴木)

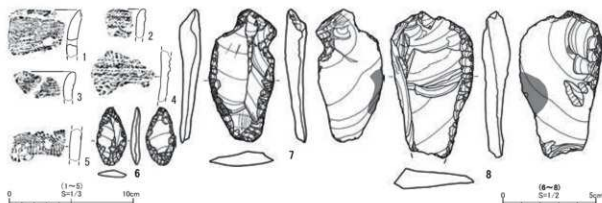
H-41 平面・断面



遺物分布



図VII-4 竪穴住居跡 (3) H-41(1)



図VII-5 竪穴住居跡(4) H-41(2)

竪穴住居跡 42 (H-42) (図VII-6～13、表VII-2、図版152・153)

確認・調査：調査区西側の標高 28.2m 付近の高位部に位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅴ層上面で黒褐色土の広がりを確認した。その中心に直交するように土層観察用のベルトを設定し、四分割して調査を行った。覆土中には多くの個体土器が出土し、図面・写真の記録を取りながら掘り下げた。北東部の覆土中から焼土 (HF-1) が検出された。北東部は P-105 に壊されている。

土層：大きく上下に分けられる。上部は RM 層が混じる黒褐色土 (2 層) とⅢ層に相当する黒褐色土 (3 層)、下部は屋根土の崩落土である褐色土 (4 層) と三角堆積土の暗褐色土 (4 層) である。最上部には一部 RM 層の二次堆積とみられるにぶい黄褐色土 (1 層) がある。遺物は上部に多量に含まれる。

床面・壁：床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は楕円形である。

付属遺構：支柱穴 2 基 (HP-2・3)、杭状のビット 1 基 (HP-4)、浅い皿状ビット 1 基 (HP-1) がある。住居長軸に 2 本柱の住居である。中央の HP-1 には炭化材があるが燃焼面は確認されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 4,102 点で、土器等が 3,477 点、石器等が 625 点である。土器等はⅡ群 b 類のみで 3,477 点が、石器等は石鏃 3 点、石槍 2 点、両面調整石器 3 点、つまみ付きナイフ 4 点、スクレイパー 4 点、石錐 1 点、R フレイク 4 点、U フレイク 2 点、剥片 405 点、石核 4 点、石斧 1 点、扁平打製石器 3 点、すり石 2 点、砥石 4 点、石皿 1 点、原石 2 点、礫 179 点、石製品 1 点が出土した。

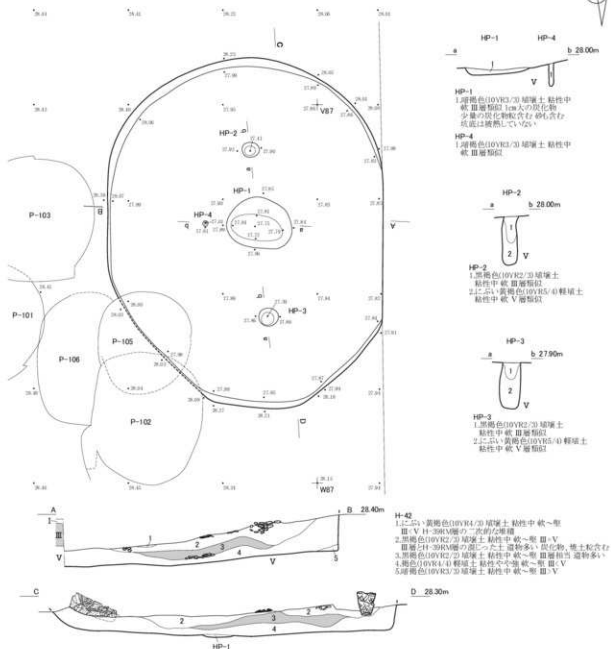
覆土中から多くの個体土器などが出土したが、遺構長軸の南北端には個体土器がそれぞれ 1 個体ずつ (1・2) 出土した。今回の調査で多くの土器が出土しているが、形状を保って出土したのはこれらの個体のみである。床面近くの覆土下層からは扁平打製石器、砥石、すり石、石皿など礫石器が出土している。

時期：覆土上層検出 HF-1 出土の炭化材からは $4,780 \pm 30\text{yrBP}$ (K04-D42)、HP-1 覆土出土の炭化材からは $5,040 \pm 20\text{yrBP}$ (K04-D43) の年代測定値が得られている。K04-D43 の年代値はやや古い、遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層 b1～b2 式期と考えられる。

掲載出土遺物：(図VII-8-1～図VII-13-37、図版 274～277)

土器：1～18 はⅡ群 b 類。1～4 は円筒下層 b2 式。1 は筒形で、底部は上げ底。口縁部はわずかに外反する。指頭圧痕を伴う隆帯で区画された口縁部と区画文下部に綫絡文が、胴部には単軸絡条体 1 類回転文が施文される。口縁部には鋸歯状沈線が加えられる。2～4・7・8 は口縁部文様帯があるが区画帯のないもので、円筒下層 b2 式。2 は口縁部には横方向に不整綫絡文または単軸絡条体 5 類、胴上部には縦方向に単軸絡条体 5 類、下部に縦方向に単軸絡条体 1 類が施文される。3 は口縁部に貝殻条痕文、胴部に単軸絡条体 1 類、4 は低い波状口縁で、口縁部に結束第 1 種羽状縄文が対向するように、胴部には RRL 縄文が施文される。7 の口縁部には貝殻条痕文に 2 本 1 組の沈線と 1 本の縄文が

H-42 平面・断面



HF-1 平面・断面

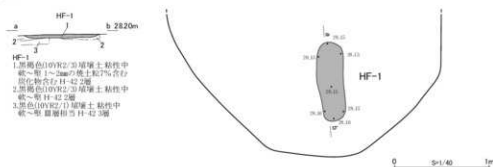
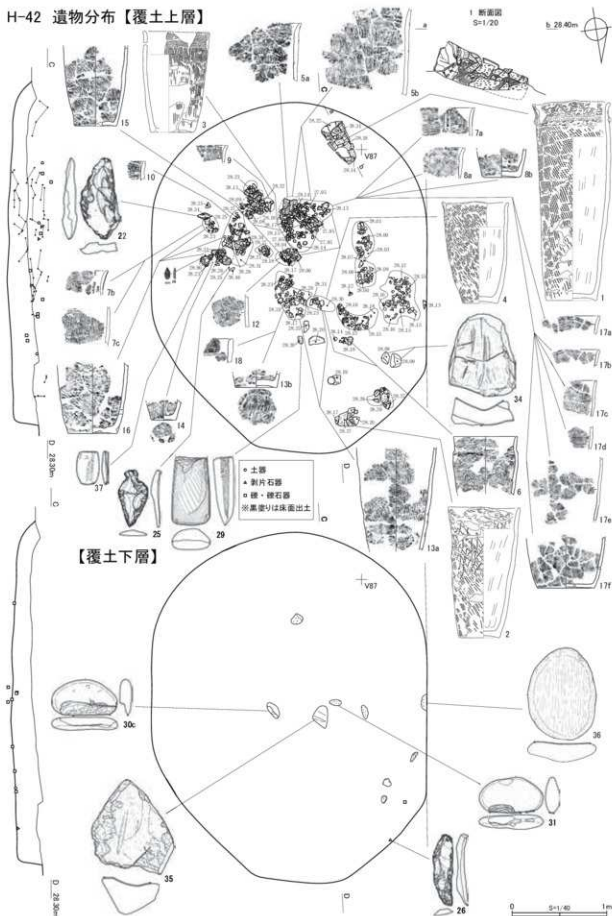
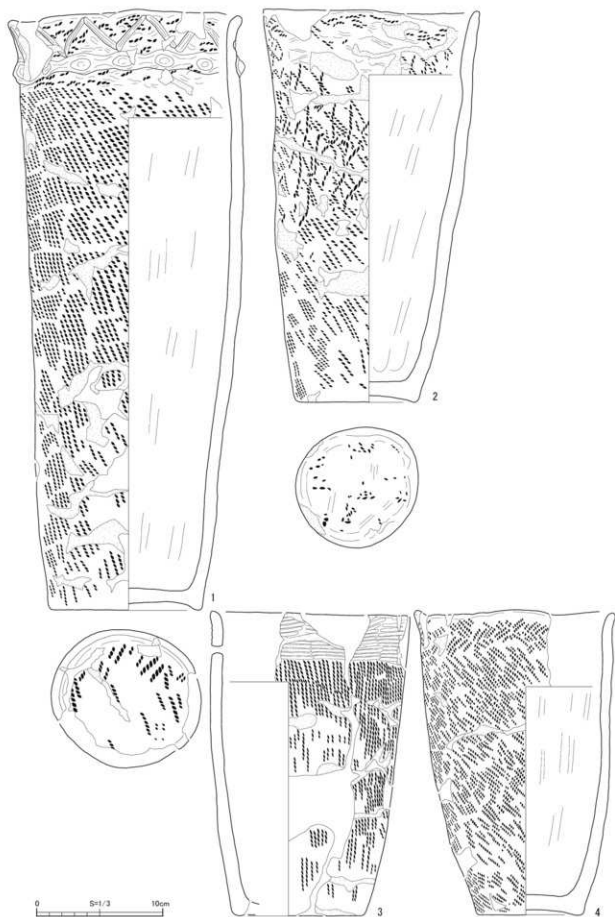


図 VII-6 竪穴住居跡 (5) H-42 (1)

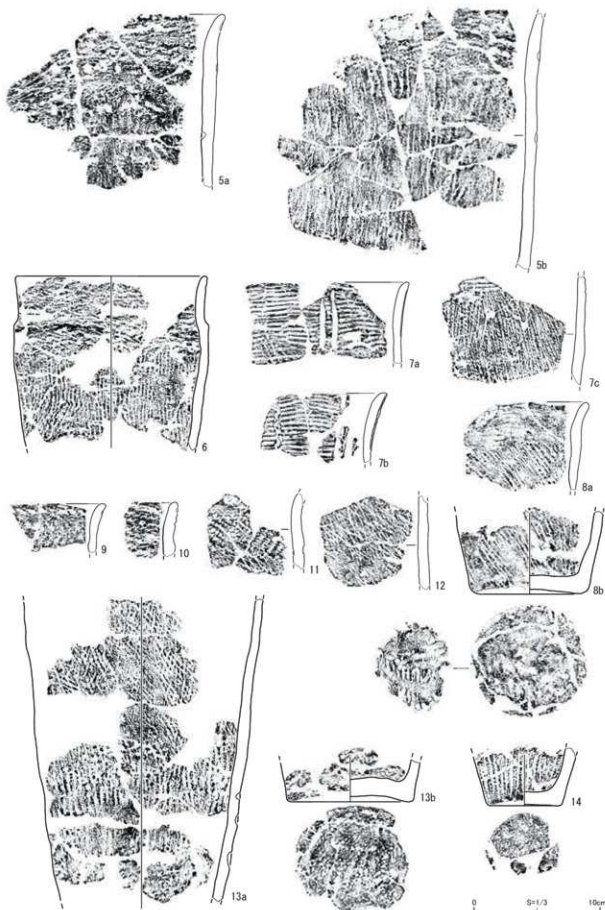
H-42 遺物分布【覆土上層】



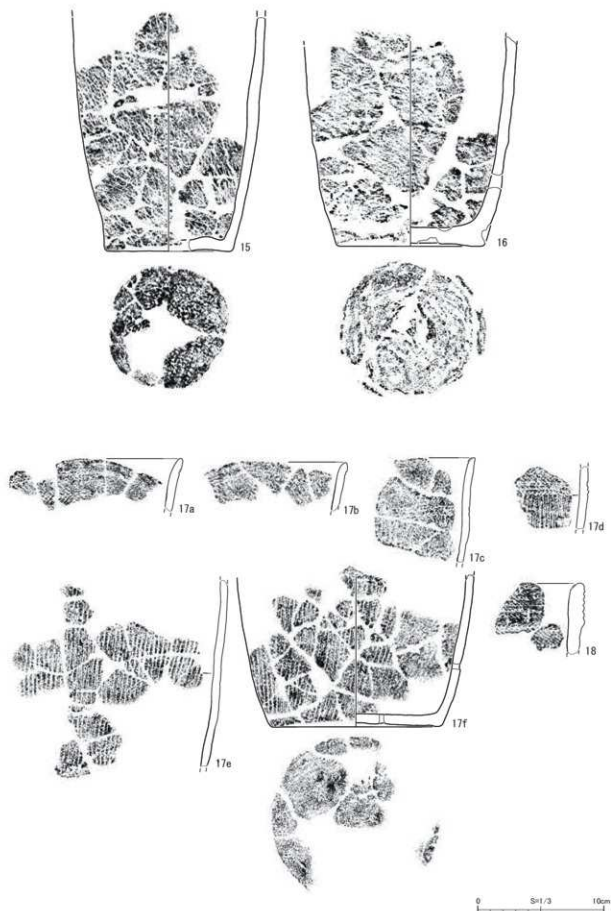
図Ⅶ-7 竪穴住居跡(6) H-42(2)



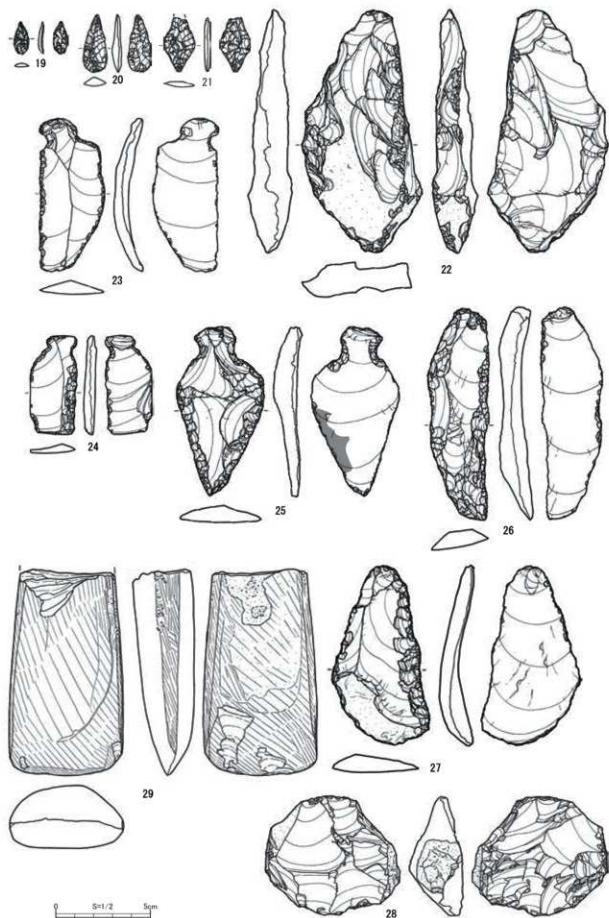
図VII-8 竪穴住居跡 (7) H-42 (3)



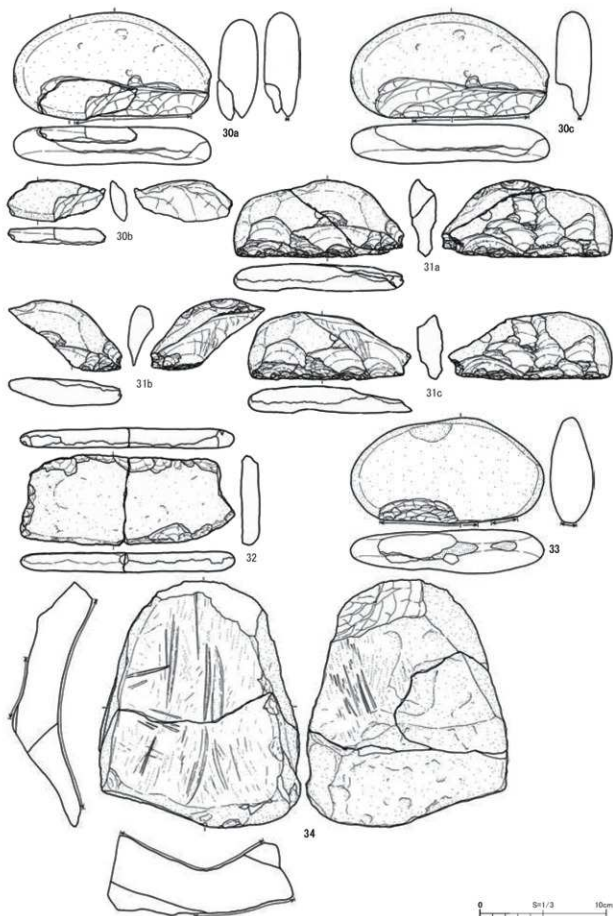
図VII-9 竪穴住居跡(8) H-42(4)



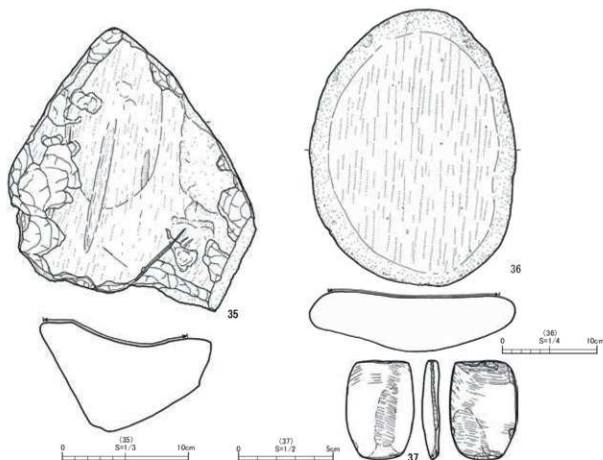
圖VII-10 豎穴住居跡 (9) H-42 (5)



図VII-11 竪穴住居跡 (10) H-42 (6)



図Ⅶ-12 竪穴住居跡 (11) H-42 (7)



図Ⅶ-13 竪穴住居跡 (12) H-42 (8)

交互に縦に施文され、胴部は単軸絡条体1類回転文である。8の口縁部と底面には貝殻条痕文、胴部には単軸絡条体1類が施文される。5・6は円筒下層b1式。5は指頭圧痕を伴う低い段で区画された口縁部とその下部に不整綾絡文、胴部に単軸絡条体1類が施文される。6は段状の低い貼付による区画の上下に不整綾絡文、胴部に単軸絡条体1類が施文される。9・11は縄線文と羽状縄文のある円筒下層c式。10は縄線文のみの円筒下層b2式。12は単軸絡条体5類の円筒下層b1～b2式。13～16は底部を含む破片で、円筒下層b1～b2式。13は上部が単軸絡条体5類、下部が単軸絡条体1類の胴部～底部片。14・16は単軸絡条体1類、15は単軸絡条体5類で、15は底面にLR縄文、内面に貝殻条痕文が残る。

17は円筒下層c式。口縁部下部にLとRの2本1組の組紐状縄線2組、口唇直下に1組の押捺で区画された内部に結束第1種羽状縄文が対向するように施文される。胴部は単軸絡条体1類回転文である。器壁が薄く、比較的広い底部から直線的に斜めに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。18は円筒下層d1式。結束第1種羽状縄文で区画された口縁部に6条の縄線が押捺され、内面はよく磨かれ、光沢がある。

石器：19～21は石鏃。19・20はI a類、21はII a類。19はめのう製で、非常に小さい。22は両面調整石器。亜角礫素材。23～25はつまみ付きナイフ。25は幅広で、尖頭部が作出される。26・27はスクレイパー。26はI b類、27はII類。28は石核II a類。ノジュール素材で一部角礫面が残る。29は石斧の折損品。全面研磨で、右側面には敲打痕がある。裏面刃部には研磨によって切られる刃部からの剥離面があり、刃こぼれ後の研ぎ直しの痕とみられる。30～32は扁平打製石器。30・31は

Ⅲ類、32 はⅣ類。30a は刃こぼれによる剥片 30b 剥落後、下縁が整えられ、30c は再利用されている。31a も 30 同様 31b の剥落による刃こぼれが認められるが、再生はされずに遺棄されたようである。32 は上下に加工が施される。33 はすり石Ⅱ類で、正面左に刃こぼれが見られる。34・35 は砥石。34 の正面は上下方向に深くくぼみ、その中や裏面に幅の狭い溝状の擦痕がある。35 は 34 と同様な大きさで、正面に幅広の浅いすり面がある。36 は楕円形の石皿で、正面側に浅いすり面が残る。37 は緑色岩製で、全面研磨により整形される。(鈴木)

堅穴住居跡 43 (H-43) (図Ⅶ-14・15、表Ⅶ-2、図版 154)

確認・調査：D 地区南側の標高 28.5m 付近の高位部に位置する。Ⅲ層を除去後、Ⅲ下層で褐色土の半円形の広がりを確認した。南側約 3 分の 2 は調査区外に続いている。南北方向に土層観察用のベルトを設定し、堅穴内の調査を開始した。東西方向の土層は調査区境界の壁面を利用して記載した。断面を確認したところ、褐色土を最下層とする床面と壁面を確認し、堅穴住居と判断した。また、住居西側で P-107 に切られた重複関係を確認した。

土層：覆土は床面全体に広く褐色土（覆土 1）があり、一部壁際の三角堆積として褐色土（覆土 4）、黄褐色土（覆土 3）、暗褐色土（覆土 2）がみられる。覆土 1 層の上位には H-3R 層が堆積している。

付属遺構：検出していない。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 1,219 点で、土器等が 965 点、石器等が 254 点である。土器等はⅡ群 b 類のみで 965 点で、石器等は石鏃 1 点、鏃状石器 1 点、スクレイパー 1 点、石錐 1 点、R フレイク 2 点、剥片 206 点、礫 42 点が出土した。住居東側の覆土 1 層下部より個体土器の破片がまとまって出土した。

時期：床面出土遺物、H-3R 層より古い状況から縄文時代前期後半円筒下層 b1 ~ b2 式期と考えられる。(直江)

掲載出土遺物：(図Ⅶ-15-1 ~ 4、図版 277)

土器：1・2 はⅡ群 b 類。1 は円筒下層 b2 式。間に刺突を伴う 2 本の沈線で区画された口縁部に単軸絡条体 1 類が施文され、絡条体圧痕が縦の区画文として押捺される。2 は円筒下層 b1 ~ b2 式。単軸絡条体 1 類回転文で、外面は被熱によりピンク色に変色する。

石器：3 は鏃状石器。腹面側の下縁からの加工が顕著である。4 は石錐。断面三角形の縦長剥片素材である。(鈴木)

堅穴住居跡 44 (H-44) (図Ⅶ-16・17、表Ⅶ-2、図版 155)

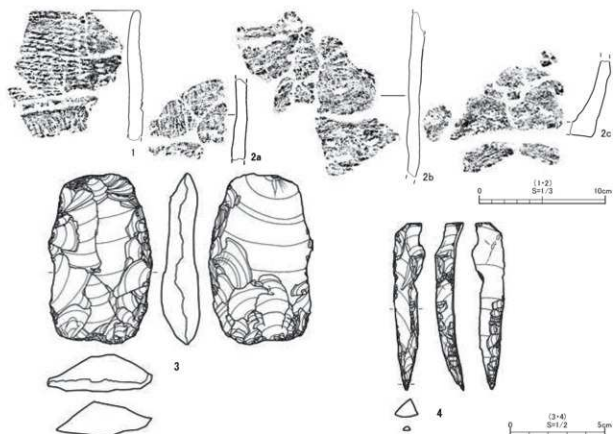
確認・調査：調査区西側の標高 27.2m 付近の高位部に位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅴ層上面でしまりの弱い褐色～黄褐色土の広がりを確認した。X ライン断面のベルトを残し、二分割して掘り下げた。その後、ベルトの断面で P-108 を検出し、ベルト幅で P-108 の調査を行った。西側は調査区外に広がるが、現地形では急な下り斜面になっており、その一部は浸食されたと考えられる。

土層：大きく上下に分けられ、上部にはⅠ～Ⅲ上層の自然堆積層と 3～5 層、下部には屋根土の崩落土とみられる黄褐色土（6 層）が厚く堆積する。上部のⅡ上層とⅢ上 2 層の間には他の遺構の掘り上げ土の可能性のある 3～5 層が挟まり、住居廃絶後に腐植土（Ⅲ上層）が形成し、その後、人為的に排土が行われた後、自然堆積土（Ⅰ・Ⅱ上下層）が形成される。周堤は検出されなかった。

床面・壁：床は平坦であるが、中央南寄りにはしまりの弱い黄褐色土（7 層）が分布する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸長方形と推定される。

付属遺構：検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 195 点で、土器等が 84 点、石器等が 111 点である。土器等はⅡ群



図VII-15 竪穴住居跡 (14) H-43 (2)

b 類 83 点、IV 群 a 類 1 点が、石器等はつまみ付きナイフ 1 点、剥片 15 点、擦切残片 1 点、礫 94 点が出土した。

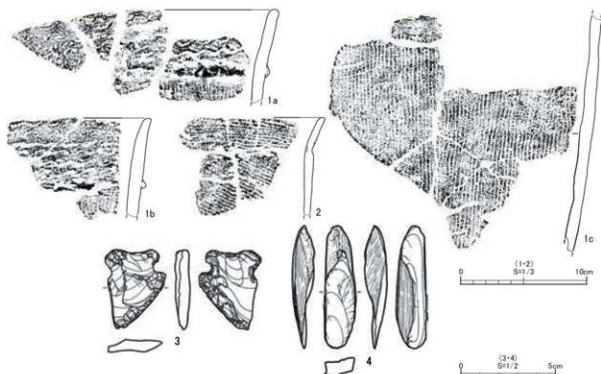
遺物は少なく、床面からは出土していない。

時期：出土遺物や周辺の遺構などから縄文時代前期後半と推定される。

掲載出土遺物：(図VII-17-1～4、図版 278)

土器：1・2 は II 群 b 類。1 は円筒下層 b1 類。刻みのある隆帯で区画された口縁部に不整綾絡文、胴部に単軸絡条体 1 類が施文される。2 は円筒下層 b2 式。単軸絡条体 1 類が口縁部には横方向に、胴部には斜めに施文される。区画文の有無は不明。

石器：3 はつまみ付きナイフ。白色の珪化岩製で、短寸の素材に幅広のつまみ部が作出される。4 は擦切残片。擦り切り技法による分割後、下縁がわずかに丸く研磨される。(鈴木)



図VII-17 竪穴住居跡 (16) H-44(2)

(2) 土坑

土坑 100 (P-100) (図VII-18・21、表VII-2、図版 155)

調査・特徴：Ⅲ層を除去後、D地区のメインセクション観察用のトレンチにⅢ下層を切る黒褐色～褐色土の落ち込みを確認し、調査を行った。覆土は坑底に暗褐色土（覆土5）が厚く堆積し、その上位には壁際に褐色土（覆土3・4）と暗褐色土（覆土2）の崩落土がみられる。最上位にⅢ層に由来する黒褐色土（覆土1）が厚く堆積する。自然堆積とみられる。坑底はほぼ平坦で、壁は一部に崩落がみられるが、オーバーハングするフラスコ状土坑である。遺物はⅡ群b類土器13点、スクレイパー2点、Rフレイク2点、剥片31点、原石1点、加工痕のある礫1点、礫75点が出土した。

時期：周辺の遺物から縄文時代前期後半と考えられる。

(直江)

掲載出土遺物：(図VII-21-1～3、図版 278)

土器：1・2はⅡ群b類。1・2ともに不整縦絡文のある円筒下層b1式。1は指頭圧痕のある隆帯で区画される。

石器：3は加工痕のある礫。正面右側縁のみ加工がある。

(鈴木)

土坑 101 (P-101) (図VII-18、表VII-2、図版 156)

調査・特徴：Ⅲ層を除去後、D地区のメインセクション観察用のトレンチにRM層を切る暗褐色～褐色土の落ち込みを確認し、調査を行った。覆土は全体的に暗褐色土（覆土1）が厚くみられ、壁際の方に褐色の崩落土（覆土2）が堆積する。埋め戻しの可能性がある。また、南西側のP-103に切られていることが判明した。坑底は緩やかに湾曲し、壁は垂直に立ち上がる。崩落以前はフラスコ状土坑であったと思われる。遺物はⅡ群b類土器12点、剥片17点、石核1点、台石1点、礫19点が出土した。

時期：RM層より新しく、P-103より古い重複関係と周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。

(直江)

土坑 102 (P-102) (図VII-18・21、表VII-2、図版 156・157)

調査・特徴: 調査区中央の標高 28.4m 付近の高位部に位置する。W ライトレンチ掘削時に断面 (C-D) で暗褐色～褐色の落ち込みを確認した。北側を掘り下げ、断面記録後、南側を掘り下げたところ、他の土坑 (P-105・106) との切り合いが確認されたため、それらと同時に調査を進めた。覆土は下部に暗褐色土 (6 層) が厚く堆積し、その上に他の遺構の掘り上げ土とみられる褐色土 (5 層)、さらにその上の窪みにⅢ上層相当の黒色土 (3 層) と RM 層の再堆積土とみられる暗褐色土 (2 層) が堆積する。6 層堆積後、掘り上げ土が排土され、腐植土の形成後、周辺の RM 層が流入したと考えられる。坑底は平坦で、壁は東側が垂直に、西側が斜めに立ち上がる。遺物はⅡ群 b 類土器 85 点、スクレイパー 1 点、石錐 1 点、R フレイク 1 点、剥片 39 点、石核 1 点、礫 20 点が出土した。

時期: H-42・P-105・106 より新しい。また、H-39RM 層を切っており、H-39 より新しい。出土遺物や周辺の状況から縄文時代前期後半円筒下層 d1 式期と考えられる。

掲載出土遺物: (図VII-21-4～6、図版 278)

土器: 4・5 はⅡ群 b 類。4 は不整綫絡文のある円筒下層 b1 式。5 は円筒下層 c 式。口縁部が低い段状の隆帯で区画され、その稜上と上下に縄線が押捺される。口縁部は LR 斜行縄文の下地に 2 本 1 組の縄線 2 組が施文される。

石器: 6 は石錐。小型の斜軸剥片の端部に刃部が作出される。 (鈴木)

土坑 103 (P-103) (図VII-18、表VII-2、図版 156)

調査・特徴: Ⅲ層を除去後、Ⅲ下層で楕円形の暗褐色～褐色土の広がりを確認した。半載したところ、北東側の P-101 を切って構築されていることが判明した。覆土は坑底に褐色土 (覆土 4) が薄く広がり、上位に暗褐色土 (覆土 1・3)、壁際の一部に褐色土 (覆土 2) が堆積する。自然堆積とみられる。坑底は緩やかに湾曲し、壁は開き気味に立ち上がる。遺物はⅡ群 b 類土器 1 点、スクレイパー 1 点、剥片 26 点、礫 19 点が出土した。

時期: P-101 より新しい重複関係と周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層 d1 式期と考えられる。 (直江)

土坑 104 (P-104) (図VII-19・21、表VII-2、図版 156)

調査・特徴: 調査区北寄りの標高 28.4m 付近の高位部に位置する。Ⅲ層掘り下げ後、V 層上面で楕円形の黒褐色土の広がりを確認し、長軸中央に土層観察用のベルトを残して調査を行った。覆土はⅢ下層に類似した黒褐色土のみである。坑底は皿状で、壁は斜めに立ち上がる。遺物はⅡ群 b 類土器 495 点、石槍 1 点、剥片 63 点、扁平打製石器 1 点、礫 35 点が出土した。周辺のⅢ下層から連続して多くの遺物が出土した。

時期: 出土遺物から縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。

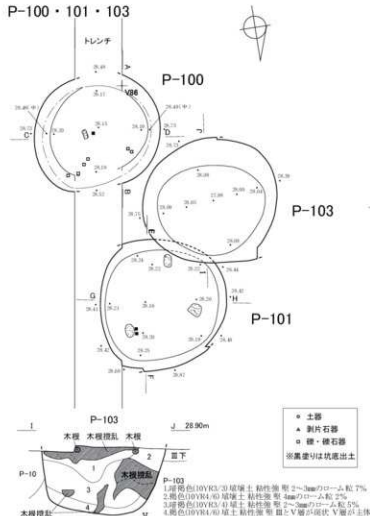
掲載出土遺物: (図VII-21-7～9、図版 278)

土器: 7～9 はⅡ群 b 類。7 は円筒下層 b2 式。2 本 1 組の沈線で区画された口縁部に不整綫絡文または単軸絡条 5 類が、胴部に単軸絡条 1 類が施文される。8・9 は円筒下層 b1～b2 式の底部片。8 は平坦な底面、9 は上げ底である。 (鈴木)

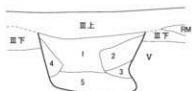
土坑 105 (P-105) (図VII-18・21、表VII-2、図版 156・157)

調査・特徴: 調査区中央の標高 28.1m 付近の高位部に位置する。Ⅲ層掘り下げ後、V 層上面で褐色土の広がりを確認した。ベルト (A-B) を残して掘り下げたが、二つの土坑が確認され、P-105・106 とした。覆土は褐色～黄褐色土主体で、暗褐色土が坑底と途中に薄く挟在する。褐色～黄褐色土は他の遺構の掘り上げ土または H-39RM 層の可能性ある。坑底は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。遺物は

P-100・101・103



P-100 B 29.20m



- P-100
- 1.黒褐色(10YR2/3)埴土・粘性中軟 2mmのローム粒 2%
 - 2.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 型 4mmのローム粒 炭化物粒 5%
 - 3.褐色(10YR4/6)埴土・粘性強 型 IIIとV層が混在 V層が主体
 - 4.褐色(10YR4/6)埴土・粘性強 型 IIIとV層が混在 V層が主体
 - 5.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在 V層が主体

P-100 D 28.90m

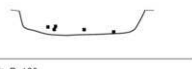


P-101 F 29.00m

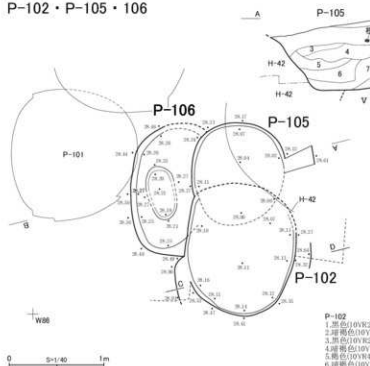


- P-101
- 1.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在 V層が主体
 - 2.褐色(10YR4/6)埴土・粘性強 型 2mmのローム粒 炭化物粒 1%

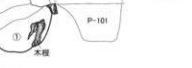
P-101 H 28.60m



P-102・P-105・106

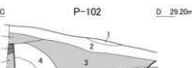


P-105 B 28.80m



- P-105
- 1.褐色(10YR4/6)埴土・粘性中軟 型 IIIとV層が混在
 - 2.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 3.褐色(10YR4/6)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 4.褐色(10YR4/6)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 5.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 6.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 7.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 8.褐色(10YR4/6)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在

P-106 D 29.20m



- P-106
- 1.暗褐色(10YR2/3)埴土・粘性中軟 型 IIIとV層が混在
 - 2.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 3.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 4.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 5.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 6.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 7.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在
 - 8.暗褐色(10YR3/3)埴土・粘性強 中軟 型 IIIとV層が混在

図Ⅶ-18 土坑 (I) P-100～103・105・106

II 群 b 類土器 13 点、スクレイパー 1 点、剥片 3 点、加工痕のある礫 1 点、礫 6 点が出土した。

時期：H-42・P-106 より新しく、P-102 より古い。縄文時代前期後半円筒下層 b1 ~ d1 式期と考えられる。

掲載出土遺物：(図VII-21-10、図版 278)

石器：10 はスクレイパーVI類。(鈴木)

土坑 106 (P-106) (図VII-18、表VII-2、図版 156・157)

調査・特徴：調査区中央の標高 28.5m 付近の高位部に位置する。III 層掘り下げ後、V 層上面で褐色土の広がりを確認した。P-105 と同時に検出された。覆土は黒褐色土のみである。坑底は丸く、中央はくぼんで 2 段になり、壁は斜めに立ち上がる。遺物は II 群 b 類土器 21 点、スクレイパー 1 点、剥片 39 点、礫 13 点が出土した。

時期：P-102・105 より古い。縄文時代前期後半円筒下層 b1 ~ d1 式期と考えられる。(鈴木)

土坑 107 (P-107) (図VII-19、図版 157)

調査・特徴：III 層を除去後、III 下層で確認した H-43 の土層を調査中に H-3RM 層および H-43 を切る黒褐色 ~ 暗褐色土の広がりを確認した。大半は南側の調査区外に続いており、調査区内の坑底、壁面は H-43 の掘削中に消失した。覆土は坑底に暗褐色土(覆土 4)、褐色土(覆土 3)が部分的に堆積し、その上位にぶい黄褐色土(覆土 2)がみられる。最上位には黒褐色土(覆土 1)が堆積する。自然堆積とみられる。坑底は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。

時期：H-43、H-3RM 層より新しい重複関係と周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層 d1 式以降と考えられる。(直江)

土坑 108 (P-108) (図VII-19、表VII-2、図版 157)

調査・特徴：調査区北側の標高 27.5m 付近の高位部に位置する。H-44 の東西ベルトの除去中に、暗褐色土の落ち込みを確認し、残存するベルトにて調査を行った。覆土は下部が暗褐色土(2 層)、上部が褐色土(1 層)。坑底は丸く、壁は斜めに立ち上がる。遺物は II 群 b 類土器 2 点、剥片 3 点、礫 1 点が出土した。

時期：H-44 より新しく、出土遺物などから縄文時代前期後半と考えられる。(鈴木)

(3) 焼土

焼土 25 (F-25) (図VII-20、図版 157)

調査・特徴：調査区中央の標高 28.8m 付近の高位部、P-104 の上部に位置する。III 層掘り下げ中に検出された。平面形は不整形で、断面の輪郭は乱れる。

時期：出土炭化物から 3,090 ± 20yrBP (K04-D46) の年代測定値が得られている。年代測定値は縄文時代後期後葉に相当するが、周囲に同時期の遺物がなく、不明である。(鈴木)

焼土 26 (F-26) (図VII-20、図版 157)

調査・特徴：U86・87 区の III 下層を調査中に赤褐色土の広がりを検出した。北側の一部は攪乱により消失している。平面形は楕円形で、断面は推定で半紡錐形。炭化物粒をわずかに含む。

時期：炭化物から 3,730 ± 30yrBP (K04-D47) の年代測定値が得られた。周辺から少量のトリサキ式土器が出土しており、縄文時代後期前葉とみられる。(直江)

焼土 27 (F-27) (図VII-20、図版 157)

調査・特徴：P-101 調査時に上部の縁辺部で赤褐色土の広がりを検出した。平面形は楕円形で、断面は凸レンズ状である。

時期：P-101 の覆土上部であることから縄文時代前期後半円筒下層 d1 式以降と考えられる。(直江)

(4) 剥片集中

剥片集中 19 (FC-19) (図VII-20・21、表VII-2、図版161)

調査・特徴：Y86区のⅢ下層上部を調査中にフレイクを中心とするまとまりを検出した。東側は調査区外に続いている。遺物はⅡ群b類土器9点、剥片1,809点、石斧1点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

掲載出土遺物：(図VII-21-11、図版278)

石器：11は母岩41・接合439、大きさは25.9×15.0×8.8cm。26cm以上のやや扁平なノジュール素材。大型両面調整体の片側縁の調整剥片接合資料である。長軸方向の剥離(工程3・4)以外は表裏の右側縁からの剥離で、側縁の断面が「U」字状から「V」字状に変化している。欠落する本体の厚さは3cm程で、粗い加工段階である。

(鈴木)

剥片集中 20 (FC-20) (図VII-20、表VII-2)

調査・特徴：W86区のⅢ下層上部を調査中にフレイクを中心とする南北に細長いまとまりを検出した。遺物は剥片95点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

剥片集中 21 (FC-21) (図VII-20、表VII-2)

調査・特徴：W86区のⅢ下層上部を調査中にフレイクを中心とする楕円形の小規模なまとまりを検出した。遺物は剥片45点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

剥片集中 22 (FC-22) (図VII-20、表VII-2、図版161)

調査・特徴：V85区のH-39RM層を調査中にフレイクを中心とするまとまりを検出した。遺物は時期不明土器2点、剥片1,337点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

掲載出土遺物：(図VII-22-12～図VII-23、図版279)

石器：12は母岩42・接合440、大きさは29.0×17.5×9.7cm。30cm程の角礫素材で、直方体に近い整った形状の原石が選択される。大型両面調整体の調整剥片接合資料である。最初に原石の突出部を除去し、厚みを減少させるまとまったやや粗い加工が施される(工程1～12)。その後、次第に打面の小さい薄い加工に変化し、本体の表面も滑らかで、断面凸レンズ状に変化したと考えられる(工程13～21)。最終的に長さ25×7×2cm程の大型両面調整体が製作され、調査区内からは出土しなかった。

(鈴木)

剥片集中 23 (FC-23) (図VII-20、表VII-2)

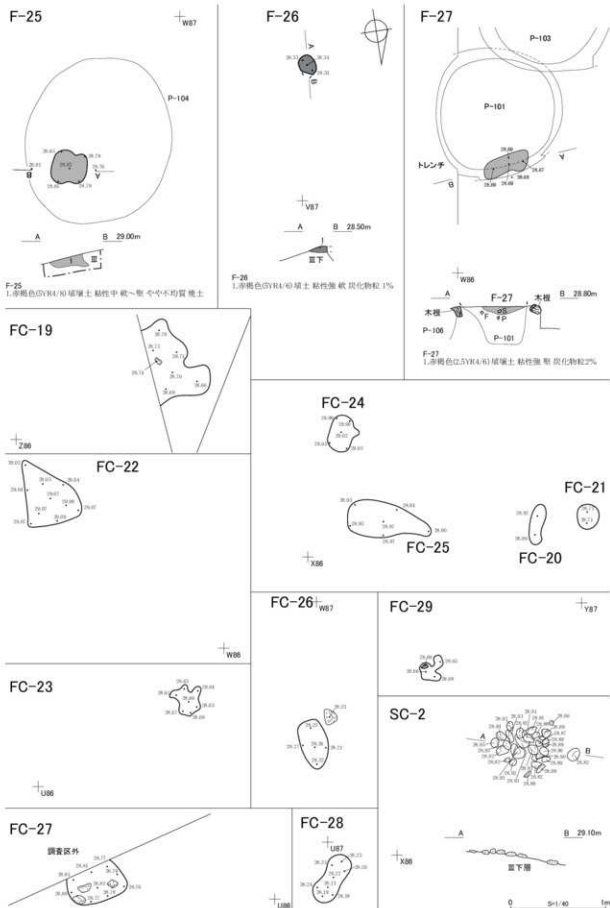
調査・特徴：T86区のH-3RM層を調査中にフレイクを中心とする小規模なまとまりを検出した。遺物は両面調整石器1点、剥片511点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

剥片集中 24 (FC-24) (図VII-20、表VII-2、図版161)

調査・特徴：調査区中央の標高29.0m付近の高位部に位置する。廃棄域にあり、RM層掘り下げ後、



Ⅲ下層上部で検出された。遺物集中部は土ごと取り上げ、1mmメッシュの篩で水洗選別を行った。遺物は剥片513点が出土した。5cm以下の薄い剥片・細片がほとんどである。

時期：廃棄域のⅢ下層上部出土であることから縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。
(鈴木)

剥片集中 25 (FC-25) (図Ⅶ-20、表Ⅶ-2、図版 161)

調査・特徴：調査区中央の標高 29.0m 付近の高・低地・斜面部に位置する。遺物集中部は土ごと取り上げ、1mmメッシュの篩で水洗選別を行った。遺物は時期不明土器 6 点、石磯 1 点、両面調整石器 1 点、R フレイク 1 点、剥片 2,725 点が出土した。5cm以下の薄い剥片・細片がほとんどである。

時期：廃棄域のⅢ下層上部出土であることから縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。
(鈴木)

剥片集中 26 (FC-26) (図Ⅶ-20、表Ⅶ-2)

調査・特徴：W86・87 区のⅢ層を調査中にフレイクを中心とするまとまりを検出した。また、集中域のそばから 15cm 程の大型礫が出土した。遺物はⅡ群 b 類土器 1 点、石磯 1 点、剥片 2,368 点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。
(直江)

剥片集中 27 (FC-27) (図Ⅶ-20・24、表Ⅶ-2、図版 162)

調査・特徴：T・U85 区のⅡ-3RM 層を調査中にフレイクを中心とするまとまりを検出した。集中域の中には 10cm 程の大型礫が 3 点含まれている。遺物は時期不明土器 6 点、剥片 3,558 点、石核 3 点、礫 1 点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。
(直江)

掲載出土遺物：(図Ⅶ-24-13～15、図版 280)

石器：13 は石核Ⅱ a 類。14 は母岩 48・接合 482、大きさは 15.4×11.4×6.1cm。両面調整体製作の接合資料で、16cm 程の扁平楕円のノジュール素材。両面で外皮の除去が行われ(工程 1～5)、一回り小型化し、硬質な内部が露出した本体は接合しなかった。

15 は母岩 49・接合 483、大きさは 10.9×9.1×7.3cm。剥片剥離を目的とした接合資料で、11cm 以上の角礫素材。多くの剥片は接合していないが、工程 1 を始めとして正面・裏面で求心状の剥離が行われる。
(鈴木)

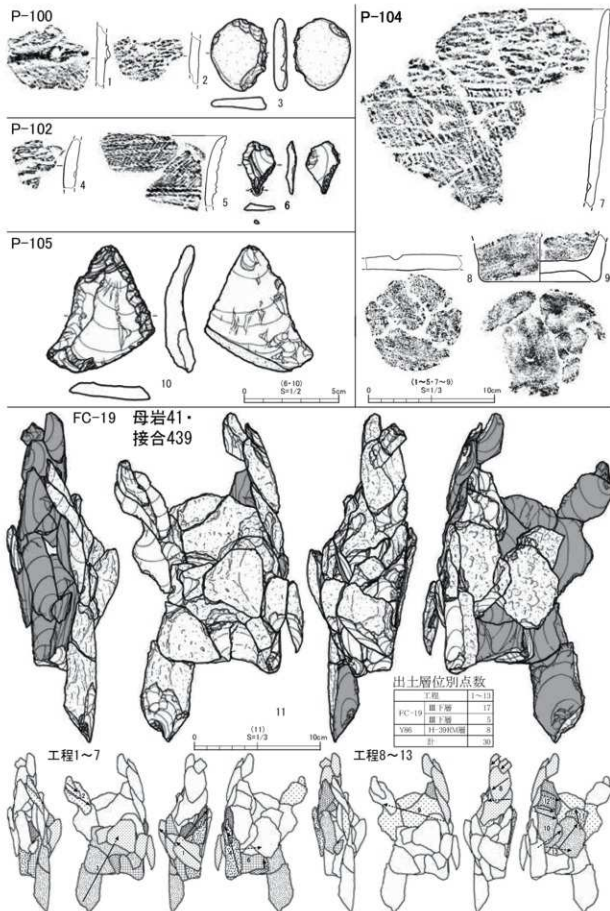
剥片集中 28 (FC-28) (図Ⅶ-20・25、表Ⅶ-2、図版 162)

調査・特徴：U86・87 区のⅢ層を調査中にフレイクを中心とする南北に細長いまとまりを検出した。遺物は時期不明土器 3 点、剥片 336 点が出土した。

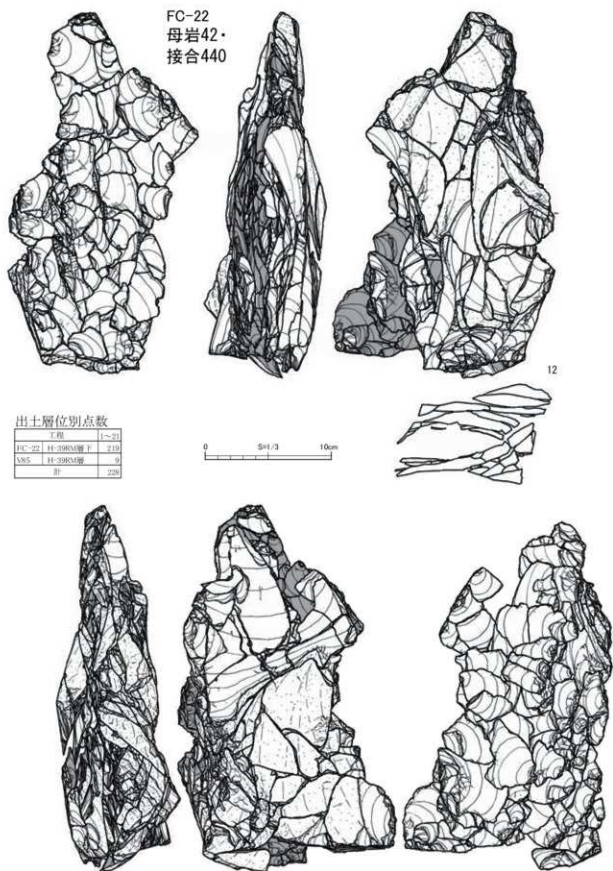
時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。
(直江)

掲載出土遺物：(図Ⅶ-25-16・17、図版 280)

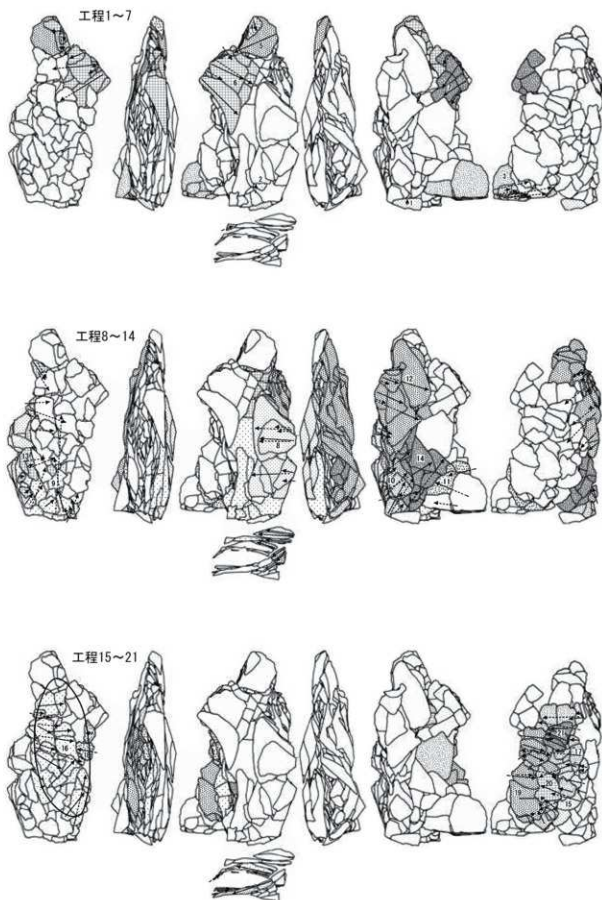
石器：16 は母岩 50・接合 484、大きさは 15.2×7.8×4.5cm。17 は母岩 50・接合 485、大きさは 14.7×7.8×3.7cm。両者は同一母岩で、接合していないが、接合 485 が外側、接合 484 が内側の関係にあたる。両面調整体製作を目的とする接合資料である。20cm 程度の扁平楕円形のノジュール素材で、その他の同一母岩資料を含めて原石に近い形状で搬入されている。表面に凹凸がなく、平面・断面形ともに両面調整体の形状に類似するため、厚さ・幅を減少させるように両面で左右から加工が行われる。一部長軸方向の剥離(接合 485 工程 1・3)も見られる。本体は表面が滑らかで、断面凸



図Ⅶ-21 土坑・剥片集中の遺物 (1) P-100・102・104・105、FC-19

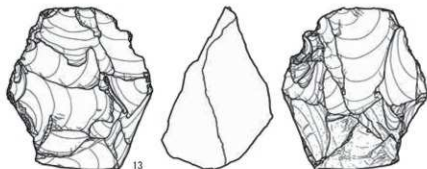
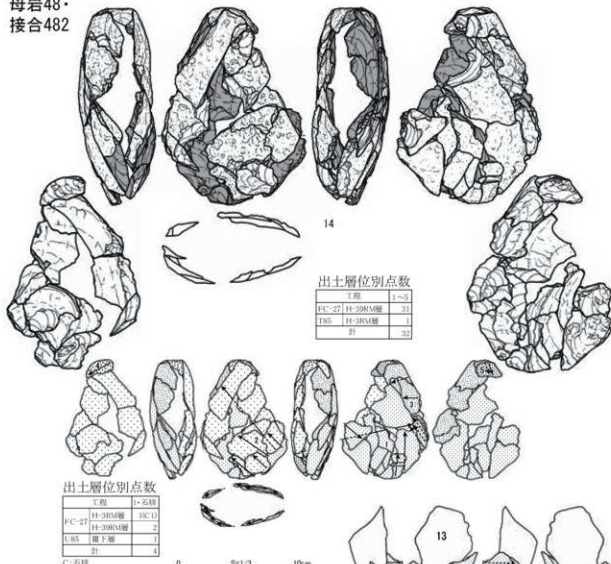


図VII-22 剥片集中の遺物(2) FC-22(1)

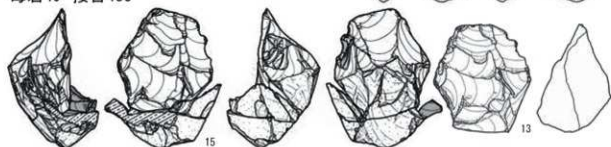


図Ⅶ-23 剥片集中の遺物 (3) FC-22 (2)

FC-27

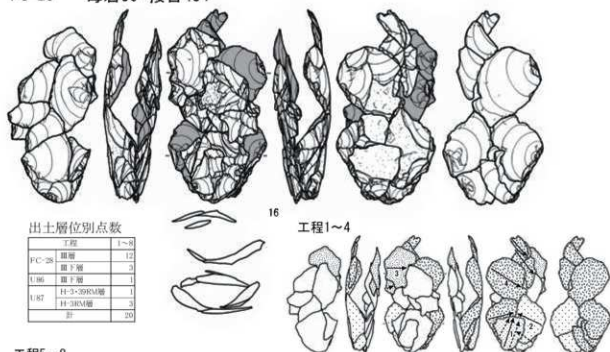
母岩48・
接合482

母岩49・接合483

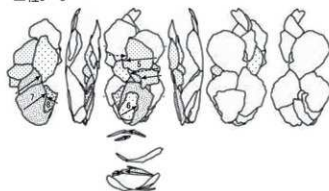


図VII-24 剥片集中の遺物 (4) FC-27

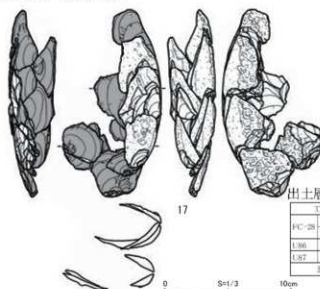
FC-28 母岩50・接合484



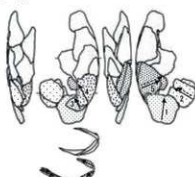
工程5~8



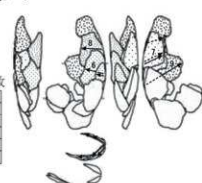
母岩50・接合485



工程1~5



工程6~9



図VII-25 剥片集中の遺物 (5) FC-28

レンズ状に順調に進行し、長さ15 cm以上、幅5 cm、厚さ1.5 cm程の両面調整体が製作されたと推定される。(鈴木)

剥片集中29 (FC-29) (図VII-20、表VII-2)

調査・特徴：Y86区のⅢ下層を調査中にフレイクを中心とするまとまりを検出した。遺物は両面調整石器2点、剥片37点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

(5) 礫集中

礫集中2 (SC-2) (図VII-20、表VII-2、図版162)

調査・特徴：W86区のⅢ下層を調査中に礫のまとまりを検出した。集中域の礫は60 cmの範囲に密集している。5～10 cm大の砂岩製の被熱した円礫が主体的である。遺物は礫31点が出土した。

時期：層位と出土遺物および周辺の遺物から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

(直江)

(6) 盛土 (図III-12)

D地区ではC地区高位部同様、RM層が広い範囲に検出された。RM層は縄文時代前期後半円筒下層d1式期の大型住居の屋根土裾部が周堤状に残ったもので、南側はC地区北端にあるH-3、中央から北側にかけての大部分は調査区外東側にあるH-39の周堤である。調査区東壁の厚いところ(W-Vライン間)で50 cmを測り、西側の斜面に向かって薄くなる。RM層下位からは円筒下層b1～c式期の住居のほか、同時期の遺物の集積である廃棄域(図VII-28～31)が検出されている。これらはC地区高位部から連続するもので、同時期に形成された一連のものである。

表VII-1 D地区遺構一覧

遺構名	位置 (坐標)	構面	検出面	平面形	検出面(m)		断面(m)		深さ(m)	長軸方向	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸				
H-39	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H-40	U34・85	H-20RM層上	3M層下・ 圓筒下層上	不明	(3.52)	(1.15)	(3.36)	(1.06)	0.66	N-14°-W	縄文前期後半 円筒下層d1式	
H-41	U35・86、V85・86	圓筒	圓筒	小円形	3.64	2.25	3.34	1.84	0.38	N-41°-W	縄文前期後半 円筒下層d1式以降	
H-42	U36・87、V86・87	圓筒	V層	円筒形	3.72	(2.90)	3.54	(2.86)	0.38	N-7°-E	縄文前期後半 円筒下層b1～d2式	KOH-D42・D43
H-43	T85・86	圓筒	圓筒	円筒形?	(4.02)	(1.10)	(3.78)	(0.97)	0.54	N-25°-E	縄文前期後半 円筒下層b1～d2式	
H-44	W86・87、X86・87	圓筒	V層	圓筒形?	2.10	(2.08)	6.72	(1.50)	1.04	N-20°-E	縄文前期後半	
P-100	N85・86	M層上部	トレンチM層	円形	1.37	(1.20)	1.16	1.04	0.60	N-72°-E	縄文前期後半	
P-101	V86	M層下部	トレンチM層	円形	1.30	1.35	1.16	1.22	0.74	N-6°-W	縄文前期後半 円筒下層d1式	
P-102	V86	圓筒	V層	円筒形	[1.36]	1.16	[1.32]	1.16	0.83	N-15°-E	縄文前期後半 円筒下層d1式	
P-103	V86	?	V層	円形	1.45	1.32	1.14	0.95	0.72	N-78°-E	縄文前期後半 円筒下層d1式	
P-104	W86	—	V層	円形	1.80	1.54	1.85	1.38	0.15	N-24°-E	縄文前期後半 円筒下層b1～c式	
P-105	V86	H-20RM層上	V層	円形	[1.10]	[1.02]	[1.04]	[0.94]	0.56	N-3°-E	縄文前期後半 円筒下層b1～d1式	
P-106	V86	H-20RM層上	V層	円筒形	[1.36]	(0.60)	[1.28]	(0.59)	0.48	N-11°-E	縄文前期後半 円筒下層b1～d1式	
P-107	T85	圓筒	V層	不明	(0.86)	(0.20)	(0.84)	(0.18)	0.38	N-74°-E	縄文前期後半 円筒下層d1式以降	
P-108	X86	—	H-44盛土中	円形	0.88	(0.83)	0.56	(0.50)	0.22	N-74°-W	縄文前期後半	

遺構名	位置 (船橋5C)	構面	構出面	平面形	横断面(m)		縦断面(m)		深さ(m)	長軸方向	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸				
F-25 W86	遺構中	遺構中	—	—	0.49	0.36	—	—	0.12	—	不明	KO4-D46
F-26 U86	遺下層	遺下層	—	—	0.22	0.17	—	—	0.06	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	KO4-D47
F-27 V86	P-102 上面	IV層	—	—	0.52	0.20	—	—	0.08	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-19 V86	遺下層上面	遺下層上面	—	—	(0.30)	(0.60)	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-20 W86	遺下層上面	遺下層上面	—	—	0.43	0.14	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-21 W86	遺下層上面	遺下層上面	—	—	0.26	0.23	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-22 V85	H-305M 層	H-305M 層	—	—	0.83	0.61	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-23 T86	H-305M 層	H-305M 層	—	—	0.54	0.33	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-24 W86	遺下層上部	遺下層上部	—	—	0.38	0.30	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-25 W86	遺下層上部	遺下層上部	—	—	0.90	0.40	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-26 W87	遺構	遺構	—	—	0.52	0.29	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-27 T85	H-305M 層	H-305M 層	—	—	0.64	(0.46)	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-28 U87	遺構	遺構	—	—	0.96	0.25	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
FC-29 W86 + 87	遺下層上部	遺下層上部	—	—	0.30	0.26	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	
SC-2 W86	遺下層	遺下層	—	—	0.91	0.64	—	—	—	—	縄文前期後半 内陸下層 bl ~ c 式	

表Ⅶ-2 D 地区遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	土器				石器(土器)																小計	累計				
		IIb	IIIb	IVa	不明	小計	石鏡	石斧	石鏃	石錐	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃			石鏃	石鏃		
H-20	層	218				218																11	17	235			
	遺下層	10				10																5	5	15			
H-20 集計		228				228																29	35	250			
H-40	層	6				6																94	122	136			
	遺下層	1				1																6	6	9			
	層	56	2			60							38	1								35	75	135			
	層土下層	26				26							67									93	163	189			
	層土下層	46				46							68	5								64	119	165			
H-40 10P-1	層土																					1	1	1			
H-40 10P-2	層土																					2	2	2			
H-40 10P-3	層土																					1	1	1			
H-40 集計		137	2			139	1						3	2		182	6					1	290	491	629		
H-41	層土上層	181				181	1	2	2		1	2	1	1	355	4	1						1	116	287	393	
	層土下層	60	4			64							1	2	137	2						1	101	245	309		
	床面直上	5				5																			5		
	床面	14				14																	5	7	21		
H-41 集計		260	4			264	1	2	2		1	3	1	2	1	4,465	6	1	1	1			1	522	1,030	3,826	
H-42	層土上層	3,333				3,333	2	1	3	4	3	2	2	2	300	4	1	1					2	123	1	883	3,826
	層土下層	24				24							1	1	55							1	1	106	120		
	1P-395M	120				120									9								5	15	135		
H-42 10P-1	層土																					1	1	1	1		
H-42 集計		3,477				3,477	3	2	3	4	4	1	4	2	495	4	1	3	2	4	1	2	179	1	623	4,045	
H-43	層土	6				6																	12	26	32		
	層土上層	150				150	1						1	1	1	2							22	144	294		
	層土下層	297				297																	6	77	874		
	床面直上	12				12																	1	4	17		
	床面																						1	2	2		
H-43 集計		965				965	1						1	1	2	206							42	254	1,219		
H-44	層土																						31	34	34		
	層土下層	83	1			84									15			1					60	77	161		
H-44 集計		83	1			84									15			1					91	111	195		
P-100	層土	13				13																	1	68	104	117	
	坑底直上																						4	4	4		
P-100 集計		13				13																	5	72	121		
P-101	層土	12				12																	15	33	45		
	坑底																						4	4	4		
P-101 集計		12				12																	19	38	50		
P-102	層土	4				4																	5	16	20		
	層土中層																						5	20	20		
	層土下層	81				81									1	1	12						10	27	108		
P-102 集計		85				85									1	1	1						20	63	188		

種別	遺構名	層位	土器				右図30→																			小計	累計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
			Ⅱb	Ⅱb	Ⅳa	不明	小計	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁			石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁	石椁

表Ⅶ-3 D地区遺構出土土器一覧

種別	図版	番号	遺構・発掘区	層位	遺物番号	点数	分類	器形・部位	備考
Ⅶ-3	274	1	H-40	覆土	1	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-3	274	2	H-40	覆土下	2	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-3	274	3	H-40	覆土	5	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-3	274	4	H-40	覆土下	2	Ⅱb	口縁		
Ⅶ-3	274	5	H-40	覆土	2	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-3	274	6	H-40	覆土上	3	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-5	274	1	H-41	覆土上	1	Ⅱb	口縁		
Ⅶ-5	274	2	H-41	覆土上	1	Ⅱb	口縁		
Ⅶ-5	274	3	H-41	覆土上	2	Ⅱb	口縁		
Ⅶ-5	274	4	H-41	覆土上	1	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-5	274	5	H-41	覆土上	1	Ⅱb	銅部		
Ⅶ-8	274	1	H-42	覆土上	5	103	Ⅱb	口縁～底部	
						大きさ：[18.2]×47.7×11.7cm			
Ⅶ-8	274	2	H-42	覆土上	14	32	Ⅱb	口縁～底部	
						大きさ：[17.1]×31.9×9.2cm			
Ⅶ-8	274	3	H-42	覆土上	4②	21	Ⅱb	口縁～底部	
						大きさ：[15.9]×24.0×[10.1]cm			
Ⅶ-8	275	4	H-42	覆土上	4②	13	Ⅱb	口縁～底部	
			H-42	覆土上	12②	3			
			H-42	覆土上	35	33			
			H-42	覆土上	4	4			
						大きさ：[15.5]×24.0×7.8cm			
Ⅶ-9	275	5a	H-42	覆土上	27	6	Ⅱb	口縁～銅部	
Ⅶ-9	275	5b	H-42	覆土上	4②	5	Ⅱb	銅部	
			H-42	覆土上	27	15			
Ⅶ-9	275	6	H-42	覆土上	12②	11	Ⅱb	口縁～銅部	
			H-42	覆土上	13	6			
			H-42	覆土上	3	3			
			H-42	覆土上	1				
						大きさ：[15.5]×24.0×7.8cm			
Ⅶ-9	275	7a	H-42	覆土上	4②	2	Ⅱb	口縁	
			H-42	覆土上	1				
Ⅶ-9	275	7b	H-42	覆土上	23	4	Ⅱb	口縁	
Ⅶ-9	275	7c	H-42	覆土上	23	4	Ⅱb	銅部	
Ⅶ-9	275	8a	H-42	覆土上	4②	1	Ⅱb	口縁	
			H-42	覆土上	4②	1			
Ⅶ-9	275	8b	H-42	覆土上	4②	11	Ⅱb	銅部～底部	
Ⅶ-9	275	9	H-42	覆土上	6	2	Ⅱb	口縁	
Ⅶ-9	275	10	H-42	覆土上	8②	1	Ⅱb	口縁	
Ⅶ-9	275	11	H-42	覆土上	3	Ⅱb	口縁		
Ⅶ-9	275	12	H-42	覆土上	10①	3	Ⅱb	銅部	
Ⅶ-9	275	13a	H-39	皿	2	Ⅱb	銅部		
			H-42	覆土上	11①	14			
			H-42	覆土上	11②	3			

種別	図版	番号	遺構・発掘区	層位	遺物番号	点数	分類	器形・部位	備考
				H-42	覆土上	12①	1		
					</				

表Ⅶ-4 D 地区遺構出土土曜載石器一覧

採掘 図版	番号	器種名	遺構・ 発掘区	層位	遺物 番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考	
Ⅶ-3	274	7	石鏃	H-40	Ⅰ	53	34	8	14.5	頁岩		
Ⅶ-3	274	8	石鏃	H-40	Ⅱ	74	28	50	289.8	頁岩		
Ⅶ-5	274	6	石鏃	H-41	Ⅱ	31	16	5	1.9	頁岩		
Ⅶ-5	274	7	つまみ付きナイフ	H-41	Ⅱ	71	36	11	20.5	頁岩	先刃あり	
Ⅶ-5	274	8	スレイバー	H-41	Ⅱ	79	44	15	38.9	頁岩	先刃あり	
Ⅶ-11	276	19	石鏃	H-42	Ⅱ	32	17	8	3	0.3	めんのう	
Ⅶ-11	276	20	石鏃	H-42	Ⅱ	48	30	13	5	1.5	頁岩	
Ⅶ-11	276	21	石鏃	H-42	Ⅱ	47	(29)	16	3	(1.2)	頁岩	
Ⅶ-11	276	22	両面調整石鏃	H-42	Ⅱ	128	64	24	147.3	頁岩		
Ⅶ-11	276	23	つまみ付きナイフ	H-42	Ⅱ	52	35	15	21.6	頁岩		
Ⅶ-11	276	24	つまみ付きナイフ	H-42	Ⅱ	51	52	25	5	7.3	頁岩	
Ⅶ-11	276	25	つまみ付きナイフ	H-42	Ⅱ	34	90	46	15	36.3	頁岩	先刃あり
Ⅶ-11	276	26	スレイバー	H-42	Ⅱ	45	112	33	17	42.7	頁岩	
Ⅶ-11	276	27	スレイバー	H-42	Ⅱ	54	95	32	18	38.3	頁岩	
Ⅶ-11	276	28	石鏃	H-42	Ⅱ	64	63	71	28	125.9	頁岩	
Ⅶ-11	277	29	石斧	H-42	Ⅱ	109	(109)	60	33	(378.2)	緑色岩	
Ⅶ-12	277	30a	接合資料			83	155	31	571.4	砂岩	接合No.37	
		30b	剥片	H-42	Ⅱ	32	77	13	30.3	砂岩		
		30c	扁平打製石鏃	H-42	Ⅱ	83	155	31	541.1	砂岩		
Ⅶ-12	277	31a	接合資料			61	134	22	166.9	頁岩	接合No.31	
		31b	扁平打製石鏃	V80	Ⅱ	8	55	89	22	51.8	頁岩	
		31c	扁平打製石鏃	H-42	Ⅱ	53	128	22	115.3	頁岩		
Ⅶ-12	277	32	扁平打製石鏃	H-42	Ⅱ-39RM	66	71	168	154.9	安山岩	接合No.50113	
				V86	Ⅲ	38			145.1			
Ⅶ-12	277	33	すり石	H-42	Ⅱ	39	83	151	34	592.4	砂岩	
Ⅶ-12	277	34	砥石	H-42	Ⅱ	20	193	157	60	668.2	泥岩	接合No.50127
				H-42	Ⅱ	21 ①			881.4			
				H-42	Ⅱ	21 ②			155.8			
Ⅶ-13	277	35	砥石	H-42	Ⅱ	38	214	194	75	2,355.0	泥岩	
Ⅶ-13	277	36	石皿	H-42	Ⅱ	46	291	217	61	6,210.0	安山岩	
Ⅶ-13	277	37	石製品	H-42	Ⅱ	33	52	36	10	25.3	緑色岩	
Ⅶ-15	277	3	部伏石鏃	H-43	Ⅱ	15	90	55	20	90.2	頁岩	
Ⅶ-15	277	4	石鏃	H-43	Ⅱ	17	88	17	15	11.9	頁岩	
Ⅶ-17	278	3	つまみ付きナイフ	H-44	Ⅱ	1	41	32	8	7.4	緑色岩	
Ⅶ-17	278	4	部切残片	P-100	Ⅱ	2	65	16	12	13.6	緑色岩	
Ⅶ-21	278	3	加工痕のある鏃	P-104	Ⅱ	13	57	45	11	25.5	泥岩	
Ⅶ-21	278	6	石鏃	P-102	Ⅱ	28	18	6	1.5	頁岩		
Ⅶ-21	278	10	スレイバー	P-105	Ⅱ	67	57	16	28.5	頁岩		
Ⅶ-24	280	13	石鏃	FC-27	Ⅱ-39RM	3	81	77	56	274.2	頁岩	母岩No.砂・接合No.483

表Ⅶ-5 D 地区遺構出土土曜載石器接合資料一覧

採掘 図版	番号	器種名	遺構・ 発掘区	層位	遺物 番号	重量 (g)	接合 点数
Ⅶ-21	278	11	母岩No.41・接合No.439(頁岩)			764.9	30
			剥片	FC-19	Ⅱ下	4	34.8
				FC-19	Ⅱ下	5	31.4
				Y86	Ⅱ下	45	53.9
				Y86	Ⅱ-39RM	75	11.3
			剥片	FC-19	Ⅱ下	6	3.2
				FC-19	Ⅱ下	29	9.1
				Y86	Ⅱ下	46	41.5
			剥片	FC-19	Ⅱ下	7	28.7
			剥片	FC-19	Ⅱ下	8	4.0
				FC-19	Ⅱ下	11	7.8
			剥片	FC-19	Ⅱ下	9	8.4
			剥片	FC-19	Ⅱ下	10	33.1
			剥片	FC-19	Ⅱ下	13	8.1
			剥片	FC-19	Ⅱ下	16	8.0
			剥片	FC-19	Ⅱ下	30	13.5
			剥片	FC-19	Ⅱ下	31	3.8
			剥片	FC-19	Ⅱ下	40	29.0
			剥片	FC-19	Ⅱ下	41	5.5
			剥片	FC-19	Ⅱ下	42	2.3
			剥片	FC-19	Ⅱ下	45	6.2
				Y86	Ⅱ-39RM	53	110.4
				Y86	Ⅱ-39RM	54	21.8
			剥片	Y86	Ⅱ下	56	13.0
			剥片	Y86	Ⅱ下	67	20.1
			剥片	Y86	Ⅱ下	74	2.3
			剥片	Y86	Ⅱ-39RM	52	19.6
			剥片	Y86	Ⅱ-39RM	55	175.5
			剥片	Y86	Ⅱ-39RM	59	18.7
			剥片	Y86	Ⅱ-39RM	72	25.0
			剥片	Y86	Ⅱ-39RM	76	14.9
Ⅶ-22	279	12	母岩No.42・接合No.440(頁岩)			1,717.7	228
			剥片	FC-22	Ⅱ-39RM	1	15.9

採掘 図版	番号	器種等	遺構・ 発掘区	層位	遺物 番号	重量 (g)	接合 点数
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	218	0.6	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	2	38.6	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	3	29.4	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	4	62.7	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	5	48.1	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	6	2.3	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	7	16.1	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	141	3.2	
			V85	Ⅱ-39RM 20	38.5		
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	8	39.4	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	84	21.6	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	199	0.7	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	9	6.1	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	10	19.6	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	58	8.7	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	106	3.8	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	107	1.9	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	11	7.1	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	12	8.8	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	13	1.7	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	78	1.4	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	14	2.6	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	15	3.2	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	16	31.7	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	17	34.1	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	62	8.3	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	18	62.1	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	44	11.4	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	119	1.1	
		剥片	FC-22	Ⅱ-39RM 下	19	9.0	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	56	2.9	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	57	28.9	
			FC-22	Ⅱ-39RM 下	94	4.6	

碑図	図版	番号	図層等	遺構・ 基礎区	層位	遺物 番号	重量 (g)	接合 点数
			剥片	FC-22	H-390M F	20	5.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	21	6.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	71	4.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	111	1.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	22	3.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	232	2.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	23	1.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	24	8.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	33	13.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	147	0.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	25	5.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	135	1.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	36	5.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	204	0.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	27	25.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	30	3.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	38	5.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	29	38.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	158	0.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	31	4.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	32	11.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	36	7.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	32	3.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	151	1.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	159	2.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	160	1.0	
				VRS	H-390M	31	3.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	34	29.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	76	1.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	35	1.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	37	12.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	38	60.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	43	2.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	114	1.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	39	5.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	40	6.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	202	3.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	203	0.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	233	0.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	234	1.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	41	65.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	42	7.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	50	7.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	45	12.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	97	0.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	46	10.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	47	8.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	48	4.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	49	71.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	215	1.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	51	11.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	53	79.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	67	1.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	54	4.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	55	3.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	59	7.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	60	4.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	61	5.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	63	11.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	65	6.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	174	1.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	64	13.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	66	3.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	68	4.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	69	5.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	70	9.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	99	7.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	72	6.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	73	77.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	74	1.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	75	11.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	77	0.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	79	2.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	191	1.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	80	9.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	81	0.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	157	1.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	82	2.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	83	4.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	86	4.2	

碑図	図版	番号	図層等	遺構・ 基礎区	層位	遺物 番号	重量 (g)	接合 点数
				FC-22	H-390M F	87	17.1	
				FC-22	H-390M F	103	3.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	88	2.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	91	3.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	92	7.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	93	2.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	168	2.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	214	0.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	95	4.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	96	4.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	98	3.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	100	2.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	101	6.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	102	2.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	104	5.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	105	1.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	108	5.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	109	7.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	110	2.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	112	3.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	134	6.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	115	3.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	215	0.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	116	0.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	118	4.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	169	0.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	173	2.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	189	0.4	
			剥片	FC-22	H-390M F	120	6.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	121	1.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	123	12.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	124	10.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	125	8.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	126	3.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	127	3.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	128	9.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	129	38.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	130	29.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	131	6.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	132	1.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	133	0.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	136	0.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	137	2.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	138	5.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	178	2.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	139	1.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	140	0.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	142	1.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	143	1.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	144	3.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	145	1.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	146	0.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	148	0.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	149	1.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	150	1.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	152	0.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	153	1.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	156	1.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	161	13.4	
				VRS	H-390M	33	2.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	162	1.0	
			剥片	FC-22	H-390M F	163	1.7	
				VRS	H-390M	37	1.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	164	0.6	
			剥片	FC-22	H-390M F	180	3.7	
				VRS	H-390M	35	1.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	165	2.5	
			剥片	FC-22	H-390M F	166	1.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	167	0.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	171	0.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	240	1.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	172	2.1	
			剥片	FC-22	H-390M F	175	3.3	
			剥片	FC-22	H-390M F	176	1.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	177	0.9	
			剥片	FC-22	H-390M F	179	3.7	
			剥片	FC-22	H-390M F	181	1.8	
			剥片	FC-22	H-390M F	182	3.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	183	1.2	
			剥片	FC-22	H-390M F	184	2.0	

棟号	区画	番号	図様等	遺構・ 基礎区	層位	遺物 番号	重量 (g)	接合 点数
				FC-22	H-390M F	185	1.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	186	0.9	
				FC-22	H-390M F	192	0.6	
			銅片	FC-22	H-390M F	187	1.3	
				FC-22	H-390M F	198	2.3	
			銅片	FC-22	H-390M F	188	0.5	
			銅片	FC-22	H-390M F	190	2.1	
			銅片	FC-22	H-390M F	193	2.8	
			銅片	FC-22	H-390M F	200	2.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	201	0.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	205	0.5	
			銅片	FC-22	H-390M F	206	0.5	
			銅片	FC-22	H-390M F	207	2.2	
			銅片	FC-22	H-390M F	210	0.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	211	5.0	
			銅片	FC-22	H-390M F	212	1.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	214	3.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	217	1.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	219	2.0	
			銅片	FC-22	H-390M F	220	0.6	
			銅片	FC-22	H-390M F	221	1.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	222	1.1	
			銅片	FC-22	H-390M F	227	2.1	
			銅片	FC-22	H-390M F	235	0.2	
			銅片	FC-22	H-390M F	239	1.4	
			銅片	FC-22	H-390M F	241	0.9	
			銅片	FC-22	H-390M F	242	1.2	
			銅片	FC-22	H-390M F	244	2.5	
			銅片	V85	H-390M	32	4.4	
			銅片	V85	H-390M	34	1.6	
			銅片	V85	H-390M	36	1.0	
			銅片	V85	H-390M	38	1.3	
Ⅷ-24	280	14	母遺 No.48・接合 No.492(真鍮)				236.0	32
			銅片	FC-27	H-390M	4	14.3	
			銅片	FC-27	H-390M	5	6.3	
			銅片	FC-27	H-390M	6	4.3	
			銅片	FC-27	H-390M	7	11.0	
			銅片	FC-27	H-390M	20	4.4	
			銅片	FC-27	H-390M	21	20.9	
			銅片	FC-27	H-390M	29	3.6	
			銅片	FC-27	H-390M	30	12.5	
			銅片	FC-27	H-390M	31	9.8	
			銅片	FC-27	H-390M	8	15.2	
			銅片	FC-27	H-390M	9	5.5	
			銅片	FC-27	H-390M	10	16.1	
			銅片	FC-27	H-390M	12	19.1	
			銅片	FC-27	H-390M	13	5.8	
			銅片	FC-27	H-390M	14	1.4	
			銅片	FC-27	H-390M	15	2.6	
			銅片	FC-27	H-390M	16	3.6	
			銅片	FC-27	H-390M	17	5.3	
			銅片	FC-27	H-390M	19	1.3	
			銅片	FC-27	H-390M	11	1.5	

棟号	区画	番号	図様等	遺構・ 基礎区	層位	遺物 番号	重量 (g)	接合 点数
				FC-27	H-390M	22	14.5	
			銅片	FC-27	H-390M	18	5.2	
			銅片	FC-27	H-390M	23	15.1	
			銅片	FC-27	H-390M	24	6.2	
			銅片	FC-27	H-390M	25	1.9	
			銅片	FC-27	H-390M	53	0.7	
			銅片	FC-27	H-390M	32	8.3	
			銅片	FC-27	H-390M	33	3.0	
			銅片	FC-27	H-390M	52	2.8	
			銅片	FC-27	H-390M	54	6.2	
			銅片	FC-27	H-390M	58	3.5	
			銅片	T85	H-390M	18	4.4	
Ⅷ-24	280	15	母遺 No.49・接合 No.493(真鍮)				284.5	4
Ⅷ-24	280	13	石橋	FC-27	H-390M	3	274.2	
			銅片	FC-27	H-390M	34	17.1	
			銅片	FC-27	H-390M	35	88.3	
			銅片	T85	Ⅷ下	43	4.9	
Ⅷ-25	280	16	母遺 No.50・接合 No.494(真鍮)				151.6	20
			銅片	FC-28	Ⅷ	5	17.3	
			銅片	FC-28	Ⅷ	6	14.5	
			銅片	FC-28	Ⅷ	12	2.9	
			銅片	FC-28	Ⅷ	14	2.2	
			銅片	FC-28	Ⅷ	15	2.4	
			銅片	FC-28	Ⅷ	30	1.2	
			銅片	FC-28	Ⅷ	31	3.7	
			銅片	FC-28	Ⅷ	34	8.6	
			銅片	FC-28	Ⅷ	38	0.8	
			銅片	FC-28	Ⅷ	39	15.8	
			銅片	FC-28	Ⅷ	51	2.2	
			銅片	FC-28	Ⅷ	53	3.3	
			銅片	FC-28	Ⅷ下	33	11.0	
			銅片	FC-28	Ⅷ下	37	17.5	
			銅片	FC-28	Ⅷ下	54	2.5	
			銅片	T86	Ⅷ下	67	29.3	
			銅片	T87	H-390M	25	8.7	
			銅片	T87	H-390M	36	2.7	
			銅片	T87	H-390M	37	1.6	
			銅片	T87	H-390M	28	3.4	
Ⅷ-25	280	17	母遺 No.50・接合 No.495(真鍮)				86.9	14
			銅片	FC-28	Ⅷ	7	9.5	
			銅片	FC-28	Ⅷ	10	3.7	
			銅片	FC-28	Ⅷ	11	3.9	
			銅片	FC-28	Ⅷ	13	8.3	
			銅片	FC-28	Ⅷ	16	2.6	
			銅片	FC-28	Ⅷ	17	7.4	
			銅片	FC-28	Ⅷ	29	9.1	
			銅片	FC-28	Ⅷ	42	6.8	
			銅片	FC-28	Ⅷ	50	1.1	
			銅片	FC-28	Ⅷ下	19	7.3	
			銅片	FC-28	Ⅷ下	28	7.2	
			銅片	T86	Ⅷ下	57	9.9	
			銅片	T86	Ⅷ下	65	6.2	
			銅片	T87	Ⅷ下	26	3.9	

3 包含層出土遺物

(1) 概要 (図VII-26～31、表VII-6)

土器等 17,204 点、石器等 13,398 点、合計 30,602 点が出土した。そのうち、RM 層とその下位の III 下層からが 27,308 点で 89% を占める。これらは RM 層形成時期の円筒下層 d1 式期以前であるが、わずかに円筒下層 d1 式が混じるものの、主体は円筒下層 b1 ～ c 式期のものである。

土器は RM 層下部・III 下層上部から、RM 層を切っている遺構を除いて V ライン以南で個体の状態もしくは大型破片の単位で検出されている (図 VII-28～31)。H-42 の覆土中の遺物も一連のものである。これらの破片は破砕がひどく、小片に割れている。おそらく大型住居構築時の作業で踏まれたものと思われる。

石器類も全域から出土し、明瞭な分布の偏りは見られないが、土器も含め W86 区は多くの遺物が分布する。北海道式石冠が含まれない特徴がある。

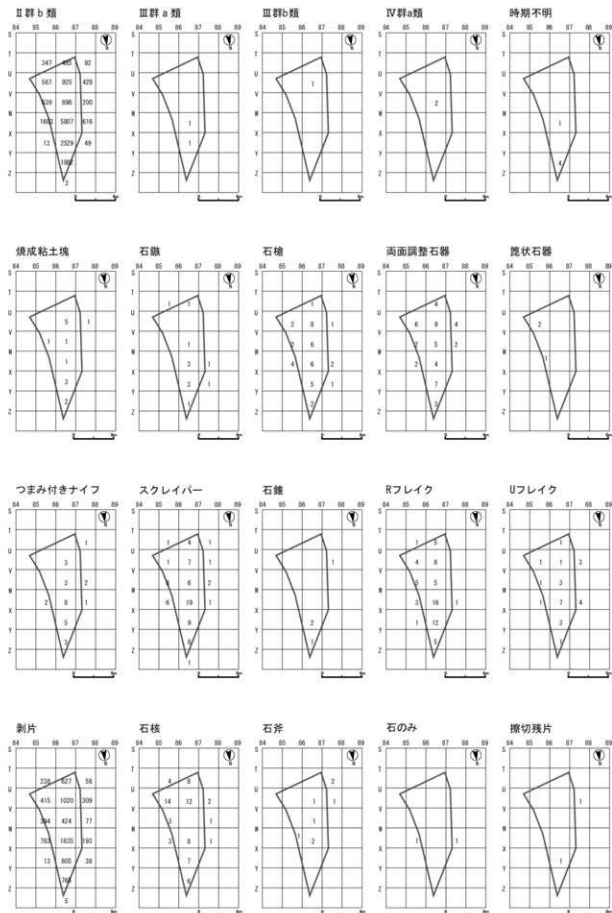
(2) 土器

II 群 b 類 17,180 点、III 群 a 類 2 点、III 群 b 類 1 点、IV 群 a 類 2 点、時期不明 5 点、焼成粘土塊 14 点が出土した。

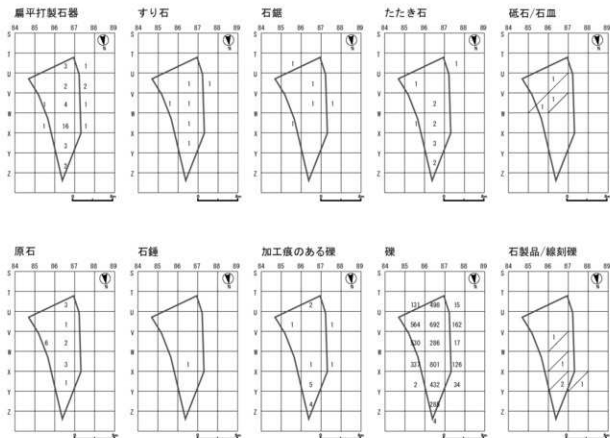
II 群 b 類 (図 VII-32-1～図 VII-37-45、図版 281～285)

1～5 は口縁部区画帯が隆帯のもの。1 は円形突起が伴い、口縁部・胴部ともに LR 斜行～横走縄文が施文される。筒形で 3 単位の山形突起が付く。3 は指頭圧痕が伴い、単軸絡条体 1 類が区画帯上下には横方向に、胴部には斜め方向に施文される。2・4・5 は隆帯に縄線が加わるもので、2・3 は上下を挟むように、4 は隆帯上に押捺される。2 の隆帯は低く、口縁部には LR 斜行縄文、胴部には単軸絡条体 1 類が、4 は胴部に多軸絡条体、5 の口縁部には単軸絡条体 5 類、胴部に単軸絡条体 1 類が施文される。6～9 は口縁部が 2 本 1 組の沈線で区画されるもので、9 は間に指頭圧痕が加わる。6 は口縁部に単軸絡条体 6 類、胴部に単軸絡条体 1 類が施文され、内面に貝殻条痕が残る。7 は単軸絡条体 1 類が口縁部には横方向、胴部には縦方向に、8 の口縁部には単軸絡条体 1 類の下地に縄線・沈線が交互に施文される。9 は口縁部に単軸絡条体 5 類、胴部のほとんどは単軸絡条体 1 類が縦方向に、底部付近の高さ 1 cm ほどには横方向に施文される。10～13・15・20 は口縁部が縄線で区画されるもので、10・12 は 1 条、11・13・15・20 は 2 条である。10 は 4 単位の波状口縁で、口縁に沿って縄線が押捺され、LLR 縄文が口縁部文様帯には横方向に、胴部には縦方向に施文される。上げ底の底部から斜めに直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。11 は口縁部に単軸絡条体 5 類、胴部に単軸絡条体 1 類、12 は口縁部に LLR 斜行縄文、胴部には単軸絡条体 1 類が施文される。13 の区画帯は段状で、口縁部には LR 斜行縄文の下地に 2 本 1 組の縄線が口唇下部に、3 本 1 組の縄線が縦の区画文として押捺される。胴下部には LR 斜行縄文が横走気味に付けられ、一部磨いて消した後に、上下に単軸絡条体 1 類が施文される。口唇部にも単軸絡条体が見られる。15 は下端に縄端圧痕のある 2 本 1 組の縦の縄線が加わる。20 の口縁部区画帯は段状で、口唇下部にも 2 本 1 組の縄線がある。全体は LR 斜行縄文である。底部からやや膨らみながら立ち上がり、口縁部で少しくびれて外反する。口縁部は低い波状である。

14・16～19・21・23～26 は口縁部区画帯が無い不明なもの。14 は 4 単位の波状口縁で、口縁部に単軸絡条体 1 類、胴部に LR または LLR 斜行縄文が施文される。16 は低い段状の口縁部区画帯の上下に不整絡縄文、胴部に単軸絡条体 1 類が施文される。17・18 は口縁部に縄線が押捺され、18 の胴部は単軸絡条体 1 類回転文である。19 は対向する結束第 1 種羽状縄文によって菱形に表現される。



図Ⅶ-26 D地区包含層出土遺物分布(1)



図VII-27 D地区包含層出土遺物分布(2)

21は筒形で、口縁部はくびれて外反する。口縁部はLR斜行縄文、胴部は単軸絡条体1類が施文される。22は底部からほぼ斜めに直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。綾絡文風の文様で区画された口縁部にはLR斜行縄文、胴部には単軸絡条体1類が施文される。上げ底気味の底面にもLR縄文が見られる。23は筒状に直線的に立ち上がる。文様はLR斜行縄文のみである。24・25は口縁部に絡条体圧痕文が押捺され、24は3条の縦の圧痕が加わる。25は全体に単軸絡条体1類が施文され、圧痕と同一原体とみられる。26は全体にLLR縄文が施文される。27は波状口縁で、単軸絡条体1類が見られる。Ⅲ群b類の可能性もある。

28～32は底部。28は底径の大きいもので、LLR縄文が斜回転で押捺される。底角は丸く、ほぼ垂直に立ち上がる。29は側面・底面ともに単軸絡条体1類施文後に表面が磨かれる。30は単軸絡条体1類、31は原体不明、32は単軸絡条体1類の回転施文後、一部磨かれ、角度を変えて再度同一原体で施文される。

33～35は円筒下層c式。33の口縁部はLとRの2本1組の組紐状縄線2組ずつが上下に配置され、その間に結束第1種羽状縄文が押捺される。胴部は自縄自巻縄文と結束第1種羽状縄文が多段に施文されるが、羽状縄文は2段ごとに方向が入れ替わる。34の口縁部は水平・斜めの縄線が描かれ、結束第1種羽状縄文が2段押捺される。胴部には同一方向の羽状縄文と自縄自巻縄文が多段に施文される。底角は丸い。35は口縁部には2本1組の組紐状縄文が2組押捺されるのみで、胴部には結束第1種羽状縄文と自縄自巻縄文が羽状の方向を変えながら多段に施文される。底角は張り出さずやや丸みを帯びる。

36～38は円筒下層d1式。36はわずかにくびれた口縁部に縄線が矢羽根状に表現される。口縁部